

オイカイワタチ 第二卷(別冊一・二)

はしがき

本巻は、書籍「オイカイワタチ」の第二巻であり、「無の世界」における「世の終り」と「新しい世の誕生」の成就を記述したものである。従って、順序としては、「オイカイワタチ」本書読了の後に読んで頂くべきものである。

本巻は、ある意味から一般公開を差し控え（一九七六年当時のこと）別冊として、「無の世界」が判り、ワンダラーの真の使命の判る方に配布することにした。それは、真の判らぬところから生ずる無用の混乱を避け、世の中をゆさぶらぬためにも大切なことであると考えたからである。しかし機は熟し、公開の時に至ったのである。（一九七八年）

本巻は、極めて深い、重要な内容を持つものである。しかも、それが「無の世界」での出来事であるだけに、これを文章として記述するのは不可能に近いことであるが、私達はあえてそれを試みた。たとえ私達の文章が表現力不足であっても、これをお読みいただく一部の方々は真の心で判り、靈感で補って、行間にある真意と「無の世界」を理解して下

さると確信したからである。

私達の真の心を汲みとって頂きたいと心から切望して、別冊をあなたにお届けする。

目次

第一章	天の神様、神々を従えて地球に降り給う……………	5
第二章	太陽の方、地球に降り給う……………	30
第三章	「有の世界」の聖戦はじまる……………	75
あとがき……………		92

第一章 天の神様、神々を従えて地球に降り給う

ワンダラーの使命は、「オイカイワタチ」本書に記述してあるごとく、「無の世界」の中で働き、動き、役を果して、「無の世界」の形を創っていくことにある。だが、歩む道は予め示されていない。神様から靈感を頂いて、「無の世界」で形を、地図を創っていくのである。

ワンダラーは、地球の肉体を着て、極めて不自由な物質という低いバイブレーションの中であって生活し、真に目覚め、魂に目覚めて「無の世界」の中で働き、その役目を果たすべくのである。

ワンダラーにとって大切なことは、生活の場の中でかけられる柔らかい靈感をよく味わい、それが僅かな理解に止どまることがあっても、更に、理解しがたい時にも、神に全託して、靈感のままに実行することである。それを実行するにあたっては、過去に学んだ知識を織り混ぜて、勝手な想像や絵を画いてはいけない。だから、実行という足を一歩踏み

出すには大変な勇気が必要なのである。しかし勇気を出して実行しなければ何事も前進しない。

『無の世界』のことだからといっても、魂の、心の、想念の世界にだけ展開するものではない。ワンダラーが地球の肉体を着て今、ここにいるということには、重大な意味があるのである。ワンダラーが『無の世界』を形創って行く場合には、心の働きとその展開、そしてそれと同時に身体からだの行動も共に存在するのである。『身も心も神様に預けなさい』と教えられた意味が良く判るのである。

心と身を神様に預けて実行に移した時に、道は必ず開け、それまで明らかでなかった『無の世界』で創られた地図が、絵が、そしてその意味と全貌が明確に意識の世界で判り、理解されるのである。

しかし、多くのワンダラーは、受ける靈感が余りにも柔らかく、氷山の一角のような思いのため、その靈感をやり過ぎてしまうか、一応は考えるという段階にまで至ることがあっても、行動に、実行に躊躇した。そして、頭で、知識で完全に理解できるまで待ったのである。つまり、実行することによってはじめて、『無の世界』で形を、道を、地図を創ってゆくことができ、それによって、判り、理解という段階に至ることができるのだということ忘れてしまったのである。

他の者から地図を聞いて理解した時には、すでに『無の世界』では姿、形が出来上り、過去のものとなってしまっている。このようにワンダラーの戦いは難解であるため、役に充分に果たす者が少なくなり、長い年月をかけての戦いとなったのである。

この別冊は、それ以後（「オイカイワタチ」本書の編集、発刊準備の終わった以降）に起こった、『無の世界』での戦いを記述したものである。

これらは重要な内容を持つものであるため、少し時期をさかのぼりながら、時間的経過にそって、今日に至るまでの様々な出来事を述べてゆくことにする。

また当時（一九七四年～一九七六年四月まで）は、多くのワンダラーの方々が、テレパシー、靈感、啓示などを受けられ、それぞれ各自で記録されていた。それらを、私は後日に至って知らされ、取り纏まとめたのであったが、その時、それらの事柄は、それぞれが、ある大きな目的を果すための大切な役割であり、それらの間に深い繋がりがあったことを確認したのであった。これらのことも付け加えながら、この別冊は進めて行きたい。

わくたまの儀式終る

一九六三年一月、わくたまの戦い（儀式）終る。永い永い宇宙年月にわたって地球を暗黒の力で苦しめ、人類を悪の力で誘惑し続けて来た外宇宙からの強大な悪の力は断たれたのである。すなわちオリオンは地球から断たれたのである。

このわくたまの大偉業を成しとげたある方は、一九六四年二月に地球を去り、金星に戻られた。これによって地球には新生の礎ができたのである。『無の世界』における（第一の）扉が開けたとでも申そうか。

「世の終りの判る方は、世の中には沢山ありますが、カミラが語るわくたまの真夜中の変るカルマの判る方は、かくまわりにはありません。」

祝事の儀式終る

外宇宙からの強大な悪の力は断たれても、永年に涉って積み重ねられたカルマと残る悪

の力は、なおも地球上でその栄華を誇っている。この地球と、人類のカルマと、弱る悪の力とを真で解く戦い（ワンダラーの聖戦）が引き続いて始まっているのである。これが祝事の儀式（戦い）である。その戦いは、すでに十数年間の歳月を経ている。生き残り、目覚めているはずのワンダラー達も、繰り展げられる長い激戦に傷つき、疲れ果ててゆく。疲れ果てながらも、残る気力と意気込みを持って、ただ、ひたすら神に祈りながらの戦いであった。くたぶれるワンダラーのことは、私達は前もって次のように教えられていた。

『真の神は誠の通うところにおられることを忘れず、くたぶれぬことが大切です。』

『……まわりの方々のカルマがたかる、カルマで沢山の耐え難いことのため、くたぶれる方々がよく耐えられず、苦しみながら戦うため、まわりは沢山のたかる、カルマが連々としてたかっ来て来ます。』

一九七四年二月一五日、私達仲間のN氏が次のような啓示を受けたのであった。

美しく桜の花が一杯に咲いた素朴な学校の校庭で、ある卒業式が行われており、『蛍の光』の合唱が始まっている。全員がいい知れぬ喜びに満ちた、落ちついた、爽やかな、和やかな雰囲気の中に、そのメロディーが響きわたってゆくという光景であった。

それは、あたかも、地球の喜びの卒業式を象徴するかのようであった。

ワンダラーの中には、この象徴的啓示の話を聞きながら、長かった戦いも終りに近づきつつあると直感する者もいた。

それから十日後の二五日、あるワンダラーは、言葉では表現できがたい神聖な雰囲気の中で自分の心の深い静寂に気付いた。大きな儀式が始まるという感じがしたのである。

翌二六日未明、T氏は

『祝事は終りました。』とのテレパシーと共に、祝事の儀式の光景を見たのである。

それは、神の席の方と思われる二人のお方と、地球を代表するワンダラー四〜五名の方々とで、祝事の儀式がとり行なわれる光景であった。そしてT氏は、『祝事は終りました』との宣言を聞いたのである。

同日（二六日）未明、N夫人は、極めて明確に次のような情景を霊視し、そして言葉^{テレパシー}を聞いたのであった。

まず円盤の大編隊が、空に隙間のないほど一杯に、次から次へと出現した。そしてその円盤の大編隊が去ると同時に、次に飛来した円盤から、まことにいと高き気品のある立派なお方（宇宙の長老か、神の席の方であろうか？）がおみえになった。そのお方は、直立

不動の姿勢で「祝事の終り」を宣言され、次の通り語られたのである。

『今までは大変苦しかったですが、悪いものが消えて、新しい世となりました。これからは良くなり、綺麗になります。』

こうして、『無の世界』における次の（第二の）扉が開けたのである。これらの第一、第二の扉が難関にして最大の扉であったといえるであろう。

よみが 甦えり

かくて祝事は終り、『無の世界』において、地球の根のカルマは解けたのである。ワンダラー達は、安堵^どの息をもらしたのであったが、といって、果たして今後はなにをすれば良いかが判らない。そのような状態で、数ヶ月が過ぎた。

今までもそうであったが、このような期間には、AZ様（金星の長老、サナンダ）を始めとして多くの宇宙人の方々が、目に見えない姿で、『無の世界』の新しい地球を創るべく、忙しく沢山の働きをなさっているのである。しかし、このように、宇宙の多くの方々によって、新しい世の殆どの準備がなされるとはいえ、地球人としての肉体を着た者でなければ果たすことのできない分野が厳然と存在するのである。だが、その分野におい

てですら、私達は躓き勝ちであったのである。

この数ヶ月の間は、私達の身の廻りでは、以前と同じようにまだまだ戦いが続いているような気持であった。その頃のワンダラーの心には、長い間の習慣で、尚も世の終りの戦いの意識しかなかったのである。

今にして思えば、ワンダラーの役は、新しい世を建設することにあるということをお忘れしていたのだ。地球の新しい世を建設するのは、やはり、地球人の仕事である。カルマが解け、新生した地球に神の国を建設する準備、すなわち、地球の未来の形を選択するのも、やはり地球人自身の意志によるものであるはずである。そして、それらは、まず、無の世界で創られるべきものである。

このようにして、ワンダラーは、次の新しい戦いを徐々に自覚していった。意識の基準が、今までの悪いものとの戦い、カルマを解く戦いの段階から、魂の永遠の進化という観点からすべてを見、新しい地球を建設するという心の動きの段階へと変わってきたのである。

今年（一九七四年）に入った二、三月頃よりW氏は、一九六一年の初めに宇宙人から、『地球は寒冷の戦いが始まります。』と教えられていたことを時々語るようになった。

九月一〇日、十七時五十分、N夫人は、夕食用意のため近くのマーケットへゆく途中、めずらしい十字型宇宙機が飛来降下するのを目撃した。その宇宙機の本体は、美しい鮮かな薄黄色をなし、そのまわりは薄黄金色の輝くオーロラのようなものに包まれていた。

十一月一日、未明、N氏は、象徴的な啓示の光景を見る。それを要約すれば次のとおりである。

「多くの人達が、正しい本当の世の終りを理解し、総員が一定の方向に向かって（神の国に向って）、手に一物も持たずに（地球の過去のニセモノを全部捨てて）歩み始める。天空からは神の讚美したもう、喜びの世の終りを告げる音楽が流れ、その音楽に全員が歩調を合わせるように歩み出した。……これが新時代の始まりであり、正しい本当の世の終りである」と理解した。」

これは、多分地球の未来の姿を告げているのであろう。しかし、このような時が果たして来るのだろうかと考えさせられるほどに、現象的には、世の中は、混沌と、人間から放たれる悪臭と、人々のニセモノに対する異様なまでに強い執着に満ちあふれているのであった。私達は、時々、*「無の世界」*と*「有の世界」*の「*形の世界*」（*形の世界*は、*現・幽・霊界*を指すのである）とを混同させて見あやまる時もあるのであった。

一月四日、N夫人、『今は大切な時です』とのテレパシーを受ける。

一月五日、S氏は、ワンダラーは新しい世を建て直す戦を果たし、新しい路を開くものであると決意し、靈感と共に次のごとく語った。

「われ、心から地球の新生と再出発を祈る。風は私の思いわずらいを柔らげ、清め、過去の戦いを清める。我れに続け、新しきまことの世界へ。」

ワンダラー達は、新しい時代の意識を打ち建てるために、本来あるべき真の原型、ホンモノを創る働きをしていたのである。それは、新しい世の、意識の、正しい本物の素材選びであり、新時代の構築作業であり、新時代の根底をなす悠久の思想、考え方、あり方の選択であった。

一月二一日、未明、N夫人は次のような光景を霊視し、そしてテレパシーを受ける。

「寒冷と長い雨が続き、多くの人々は困っている。N夫人は、天に向って、「光を与えて下さい」と叫ぶようにお願いする。すると雨は止み、雲はさけ、光が放たれ、そこから円盤が飛来して眼前に着陸した。中より宇宙人が出てこられた。夫人は、その円盤と宇宙人をお迎えして挨拶する。

その宇宙人は、最初に次のことを言われたのである。

『寒冷にそなえること。』『急速に進んでいます。』

すでに、寒冷の戦いのことは以前からW氏より語られて充分承知していたのであるが、この言葉は、一層この戦いがよく戦えるように備える心構えが大切であることを意味し、それが急速に進んでいるということとは、とりもなおさず、寒冷の戦いが（無の世界にて）すでに最盛期にあることを知らせるものであった。

寒冷の戦いは、新しい真物を探求する戦いであり、自然の助けを借りて新しい世を創る戦いであり、すべてのものを見直す戦いでもあった。

これを戦うには、心に、のんきと素の儘が大切であった。この寒冷の戦いには、すでに二、三月頃より、真剣に取組んでいたのである。ワンダラー達は、これを「無の世界」で戦い、恐怖は恐怖として、苦しみは苦しみとして素直に受け、あらゆる対策を考え、学び、行動に移し、実際にやってみて、それを理解して解いていったのである。そして、それらを通して真物を知り、ものに対する考え方、見方も変って来たのであった。

さらに、その宇宙人は、

『充実した生活を行なって下さい。』と言われた。これからの様々の世の混乱の中にあ

っても、皆さんは、充実した生活を行って下さい、と語っておられるのである。

続いて、その宇宙人は、

『木の実を保持すること。』

と語られ、さらに、これを注釈されるように、

『沢山ありました木も、現在はその内の二本だけになりました。その二本だけでも枯らさないように大切に保持し、守って頂きたいのです。』

と語られたが、意味がのみ込めないので、「それは、どういう意味ですか？」と問うと、その方は、次のように答えられた。

『一杯ついていた木の実も落ちてしまって、木の実のついているのは、今は二本だけになりました。重い木の実をつけている二本の木の実を、大切に落ちないように保持して頂きたいのです。』

宇宙の法則からして、宇宙人は地球人に、『何々をしないで』と教え、命令することはできないのである。ワンダラー自身が自ら目覚め、学び、知るべきことを、第三者（宇宙人）が教えることはできないのである。だからワンダラーに気付かせるためには、この程度の象徴的な例で表現するのが、許されたりぎりぎりの限界なのだ。それは、ワンダラー

が自分自身で判り、知り、行うべきことであるからである。

N夫人には、この宇宙人の言葉の意味は十分に理解できなかった。しかし、宇宙人の方は今はこれ以上語られないが、『二本の木の実』を保持することは極めて大切なことであり、この『二本の木の実』を保持することによって、地球のことは、自然に、楽に、すべてが解決できること、そして、もし保持できなかった時には、地球は大変なことになるということだけが、強く、明確に、判るのであった。そしてこのことが、いつまでもいつまでも、重く心にのしかかっていたのであった。

㈦ 後日、N夫人は、この『二本の木の実』とは、ワンダラーを指すのだということを理解したのである。

一二月二五日、未明、S氏は、『無の世界』における「寒冷の戦い」の終了を天に報告した。そして、もはや、地球の古いものでは我々を束縛することはできなくなったことを知った。

一九七五年一月三日、未明、S氏、

「祝事の終わったあとにも残って地球を覆っていた、黄色と白色で象徴されるカルマを

破る。」

多くのワンダラーは、祝事の前にあった黒い障壁（カルマ）についてはよく気付き、戦った。だが次に、黄色い障壁と、その次に白い障壁があり、これらは、気付き難い存在のカルマなのであった。そして、更にこの地球の外側は、もう一つの透明な膜で覆われていたのである。地球はこれで包まれ、閉じ込められた世界となっていたが、この覆いも、天の蓋が取り除かれる如くに取りはずされたのである。

このことがあった後に、多くのワンダラーは、神様について、色々の面より、考え、思う靈感を多く受けるようになってきた。

そして、新しい世づくりは祝事以後始まっているが、新しい意識を持ち、これは正しいものなのか、真物なのかと問い、かつ考えて、真を積み上げて行くのが今の働きの時なのであり、このことが判るようになった時、地球は、いよいよ最期の戦いへと突入するのであるとの考え方が、大きく拡がって来たのであった。

一月二六日、あるワンダラーは、真物の判らぬ、うそぶく高い位置の指導者達の意識に、最後の絞りをかける。

一月二七日、未明、S氏、次のような光景を啓示的に見る。

「とり残れる、浮かぶカルマの意識が、暗黒の凄まじい大津波となって地を襲う。だが、新しい世では、もはや被害を与えることは出来なかった。」

「もはや地球には、なんらの障害も見当たらず。」

「春風駘蕩、輝きわたる大海原を航海するに似る日々。」

「世界は美しく変化し、すべてが終わった感じを受ける。」

「甦りの日の来たことを知る。」

「今は甦りの時である。」

——場面は変わり、葬儀が取り行なわれている。——

多くの参列者の中に、ある二人の男性がいる。やがて出棺となり、死者の棺は数人の人に担がれて、行列は野辺の道を通って埋葬地に向って歩み始めた。その行列に従って歩いていたその男性の一人は、もう一人の男性に「ここで良いではないか」と語りかけて目で合い図をした。もう一人の男性は棺のそばに歩みより、死者に向って「もう、いいかげんに目を覚まさない、起き上がりなさい」と語ると、その死者は起き上がり、生者となつて、歩き始めたのである。

「死者の甦りの時である。」

地球ゆずり

一月二八日、S氏は、これまでの経過を静かに思い浮かべて、多くの宇宙の方々に、そして金星の方々に、これまでのことを報告し、お礼の言葉を申し述べた。その時、金星より次のテレパシーを受けた。

『さあ、私達は、神様のいらっしゃる日のために、準備しましょう。』

天の神様は、自然のリズムに、神様の手順にのせられて、そのことを、着々と進行させておられることを直感した。地球が、古い姿から、真物の姿へと脱皮する時が近いことを知るのであった。

二月三日、W氏はS氏からこのことを聞いた時、一九六七年より八年間考え続けて来た、『エクアドルの戦い』がいよいよ始まったと直感するのであった。

——『エクアドルの戦い』はW氏に与えられた長い間の公案であり、秘められた意味を解くべき課題であった。ワンダラーとしてこれを自から判り、解かねばならない命題なのである。——

「ワンダラーは、神様のお命じになられたすべてを整えて、天の神様に、地球にお降り下さることをお願いすることである。」

「天の神様に、地球へお降り下さるようお願いすることは、すなわちお迎えすることである。」

「このお願いの時期を間違えぬよう、神様のみ心のままに行うことである。」

この様に靈感を受けながら、地球が新しい世となった喜びが、内から大きく湧き起こる。この喜びは、宇宙の神々の喜びでもあると理解した。

二月一三日、午後五時、W氏は知人を訪ね、「地球は新しい世となり、地球の最期は近づけり。」と語って帰途についた時、頭上を、明るく輝く大きな円盤が、美しい光の尾を曳いて滑るように飛び去っていくのを目撃した。その瞬間、彼は、「自分の果たすべき使命について、深い自信と確信を持った。真の判る方々に語る時が来た。」と直感したのである。

三月二五日、TS氏、夕方、天空より光り輝く大きな玉の如き物体が三個舞い降り、彼の頭上で数回旋回して、落下したと思ったとたん消え去るのを目撃。彼は、「何か大きな戦いが始まった。」と感じるのであった。

四月七日、W氏は、朝から異常な衝動にかられていた。明日八日は、重大な使命を果たすに行くのであるということが、極めて明確に判り、それが深い自覚となって来るのであった。

しかも、今日まで一回も思い出したことのない、一九六〇年のある時期に宇宙人の長老AZ様（サナンダ様）が語られた、『古事記を読みなさい』という言葉が、不思議と、強く思い浮かぶのであった。そして、次々と柔らかい靈感が波の如くにおしよせて、全身を包むのであった。

「明日八日は、エクアドルの戦いに出かける。」

「神様を地球にお迎えする、大切な準備を果たしに行く。」

「天の神様の命によらずして、永い歴史の間に地球人の手によって勝手に作られた、神と、神々と称せられている方々に、この地球は新しい地球となったので、地球を天の神様にお返しするように、すなわち、地球ゆずり」の説得に行くのである。」

四月八日、午前四時二十分、W夫人は、突然目を覚ました。とはいえ、まだ夢と現実の境のような中で、天空より物凄い大音響とともにある、御霊みたまが天降るのを見、かつ聞いたのである。（その大音響で完全に目が覚めたはずであるが……）そして、み霊たまの天降られ

た地球が一面に火の海となって燃え上っている姿が見えるのであった。

夫人は、この不思議な光景をW氏に語る。W氏はそれを聞いて、目的地に向う。

彼の向う地には、台風なみの野分けの風が、すさぶるように吹き荒れていた。彼の乗った飛行機は、引き返し条件了解の上での飛行を続けている。彼は機中で、すべてを神様に託して、静かに瞑想に入った。すると、

「この十数年間に渉る激しい戦いのあとが、走馬燈のように次々と想い出されてくる。苦しかったこと、悲しかったこと、同志の一人一人が次第に離れて遠くに去ってしまったこと。このような長い戦いの中で、地球はまさに悪の手に、破滅の中に落ち込まんとした。しかし、天の神様は、大きな愛の御手で地球をじっとお抱えになり、強い大きい忍耐で、ワンダラー達が果たす『約束の日』を待たれたのである。また、この長い年月の間、AZ様を始め、カミラ様や宇宙の多くの方々の忍耐と愛の助けのお陰で地球は新生したことが、見えるように心から湧き上ってくるのであった。彼は、頬に流れる涙を拭うことも忘れて、感激の心でそれを見ていたのである。」

「飛行機は着陸体勢に入ります」とアナウンスがある。強風の中を、飛行機は、正に滑べるように静かに着陸した。

彼は、飛行機のタラップより降り、その地に両足をつけた。そのとたん、

「役は果たせり！」

という強い確信に満たされたのである。これから向う地においては、残る僅か五〜十%を果たすのであるということが明確に自覚できる自分を不思議に思いながら、彼はその地に向った。強く、すさぶる風は、なおも吹き荒れている。

地球における長い歴史の中で、地球人の手によって作り上げられた神や神々と称せられる方々の頭かしらのお方がお祭りしてあるその場所で、彼はそのお方に次のごとく宣言したのである。

「地球のたかる、カルマは解け、明かるる世となりました。地球は新生し、新しい世となりました。まもなく地球へ、天の神様が降りていらっしやいます。あなた様を始め、皆々様は、天の神様をみんなでお迎えして下さい。私はこのことを申し上げるために、今日ここに参りました。」 時は、午後五時であった。

その頃には風は凪ないでいたが、その時まで天を覆っていた黒い厚い雲が、突如、パッと二つに裂けるように分かれ、その分かれ目から青空と共に太陽が輝き出した。と同時に、僅かな、細い絹糸のような小雨が降り出し、その一滴、一滴のしずくが数珠じゆずのように連なり、太陽の光を反射して玉の繋がりのように輝きながら、彼の全身に柔らかく降り注いだのである。彼はその時、「役は果たし終えり。」と、深い確信と自覚を得たのであった。

W氏は、

「高天原（高天原は金星にある）からの神々は、今の地球にはいらっしやらない。」

「今の地球は、本当の神様のおみえにならないところである。」

「だから、新しい世となった地球に、神様が天降られるのである。」

……ということを、この役を果たしつゝ感ずるのであった。

さて、ここで話を四月七日に戻して、この日に名古屋市在住のN夫人に起こったことを述べることにしよう。

四月七日、未明、N夫人は、「地球ちくゆずり」を象徴するかの意味深い啓示の光景を見ていたのである。

「広い大きなホール地球の意味（部屋）の中に、書籍が一杯に天井高く詰まっている。そして、その書籍の全部が八地球人によって作られた神様のことが書いてある本Vであると判るのである。二人の男性の方が、その書籍をホール地球の意味（部屋）から次々と外に出している。N夫人が山のように積まれた書籍のうちの一冊を開いてみたら、それは、やっぱり地球の神様のことが一杯に書かれた本であった。その沢山の書籍は、まもなくその二人の男性の方の手によってホールから全部外に出されて、そのホールは空になってしまった。そしてN夫人

には、このホールには、新しい、本当の神様のことが書かれた書籍が詰められるのであると判るのであった。しかし、その時には、まだ新しい本は入れられなかった。」

四月九日、午後八時、TS氏は三重県鈴鹿の山中にて天空を仰ぎ、まわりの天地自然と草木を眺めていた。すると……

「草木も、自然も、天の神様をお迎えしようと思いが思い、考えている意識の流れを……」全身で感じたのであった。

天の神様、神々を従えて地球に降り給う

四月一〇日朝、W氏は、自分の祈りの言葉に変化が起こっているのに気付き、驚いた。前日までの祈りの言葉は、次のようなものであった。

「天の神様をお迎えする準備が正しく果たせますように、お導き下さい。」

ところが今朝は、祈りの言葉が知らぬ間に次のように変わっており、しかも彼は、祈りを終えたあとでこの変化に気付き、驚いたのである。

「地球は天の神様がお降り頂けるように準備が出来ましたので、天の神様、お降り下さ

いますよう、お願い申し上げます。」

四月一二日、未明、W夫人は、次のような夢を見た。

今までも度々W夫人に姿を現わされる、神様かと思われるほどの気品高きお方（神の席のお方か、或は宇宙の長老のお方か？）がこの時もお出になられて、W夫人に、

「地球は新しい世となりましたので、あなた方は、もう一度（無の世界で）結婚をしない下さい。」

と語られた。そして、そのお方が祭主となられて、新しく結婚式を挙げることになった。

四月一四日、午後三時四〇分、W氏はS氏に、「地球には天の神様がお降り頂けるように準備が完了したので、天の神様に、地球にお降り下さるようお願いをした。」ことを伝えた。

この二人のワンダラーの語らい（言霊）によるむすびを待っていられたかの如く……

S氏が丁度そこに来合わせたT氏にこれまでのW氏らの経過の詳細を語り終えた、その時、午後五時五四分、

『天の神様は、神々を従えて、地球に降り給うた。』のである。これを、ワンダラーS氏は、身も、心も、魂も、そのすべてで判り、限らない溢れる感動でお迎えしたのである。

これは、筆舌で記述の尽つくせるところではない。

この時よりワンダラーは、極めて平安に満ちた心で日々を送るようになったのである。以上が、『無の世界』において次の(第三の)扉が開かれるにいたった経過である。

四月二十七日、未明、S氏は、夢の中で、新しい白い道が未来に伸びて出来上っているのを見てハッと目を醒まし、寝床から起き上った。その時、次のテレパシーが入ったのである。

『さあ、世の終りが来ました。おだやかに、落着きをもって、世の終りを迎えないさい。あと一ヶ月位……このことで、世の中をゆさぶらないように。』(註)この世の終りの本当の意味が、この時点では判らなかつた。

ほぼ同じ時刻、K夫人は、夢の中で、地球に飛来降下して来た円盤の乗員の五名の方が、語り合っておられるのを見た。その中の一人の年輩の方が、他の方々に、地球人救助の担

当地域を説明し終えられたところであった。

話は前後するが、S氏は、四月三日、未明、数人の地球人と共にある意識の体で金星を訪れ、地球の人々を迎えるために建てられた宿舎と環境とを確認して来たのである。そこは非常に地球に似た素朴な環境で、住み心地のよい処だったので、彼は安心して戻り、それを皆に報告したのであった。

四月二十八日、未明、N夫人、『地球は神の国となった』と、神の席の方が語っておられるのを聞いた。

第二章 太陽の方、地球に降り給う

第二章は、昭和五〇年一九七五年五月以降に起こった、「無の世界」での出来事を記述する。

これから述べる事柄に関しては、前もって特に記しておかねばならぬことがある。それは、第一章、及びこの第二章の何れについても、その内容が、「無の世界」での進行を語ったものであるということである。そして、これは「オイカイワチ」本書の全編についてもいえることなのである。それを早合点して、勝手な判断と解釈をもって「形の世界」に直結させてしまつてはならない。

「無の世界」には幾つかの扉があると思われる。(扉という表現は適切ではないのかも知れない。或いは、幾つかの「封印を解いて」進むと申そうか。何れにしても「無の世界」のことを限られたこの世の言葉で現わすことは、極めて至難なわざであることをご理解頂きたい。)その幾つかの扉(封印)を開いて行く働きを、ワンダラーは、オイカイワチは、するのである。しかし、その扉がいくつあるのかは、私達には全く判らない。ただ判

っていることは、「無の世界」において「世の終り」と「新しい世」が完全に成就したあとに、「有の世界」に移行するということである。

オイカイワチ、ワンダラーが、今日までに幾つの扉を開いてきたかを数えることは中々難しいが、それでもこれまでのことを振り返ってみれば、おおよそ大凡のことは判るのである。まず、「無の世界」で第一の扉を開けば、そこでの働き(役)があり、それを果たし終えらるると次の扉が待っている。さらにその第二の扉を開き、そこでの役を果たす。このようにして、第三、第四と進んで行くのであろう。しかし、私達には、その扉が、これから先に幾つあるかは判らない。これまでの体験では、これから先のことは判らないが、使命を果たし終えた分野のことについては、それまでの内容が明確に判るのであった。

しかし、時には私達の目覚めの至らなから、ひとつの扉(封印)を開きその「無の世界」での働き(役)が終ると、次の扉は「有の世界」の中の「形の世界」への扉を開くものと早合点することもあったのである。

ルシファアの苦しみを学ぶ体験

次の出来事は、私達の一部の者が、誤って「無の世界」と「形の世界」とを混同させて

考えたために味わった、苦しみの体験である。

それは、四月二十七日、未明、S氏の受けたテレパシーに始まる。

『さあ、世の終りが来ました。おだやかに、落ち着きをもって、世の終りを迎えない。あと一ヶ月位……。このことで世の中をゆさぶらないように。』

私達の一部の者は、このテレパシーが、無の世界[〃]において世の終りを迎える、という重要な戦いを語るものであることを忘れ、勝手な解釈による早合点からこれを「形の世界」に直結して、心に絵を画いたのであった。

私達は、十八年間の長きに渉る厳しい戦いに疲れ果てていたのだ。この苦しみと疲れから一日も早く解放されたいと希^{ねが}う自我の心が僅かでも湧^わき上った時、このテレパシーを「形の世界」に直結させてしまったのである。自我心によってテレパシーを正しく理解できなかったのである。

これは、前々から教えられていた、『最後の瞬間まで、素の儘に、心ののんきと礼儀を失わず、身も心も神様に預けなさい。』という言葉を忘れた瞬間に起った出来事であった。そして、この誤りの絵を画いたことに気付くためには、私達は、今だから経験したことのないほどの苦しい試練と戦わねばならない羽目となったのであった。

「あと一ヶ月位……」のテレパシーを受けた四月二十七日、S氏は、これをW氏に語る。二

人は、このことは重大事であり、世の中をゆさぶらぬためにも、二人だけの心に留^とどめて他^{ほか}には語らぬようにと話し合った。

丁度その頃、他の多くのワンダラーには、沢山のテレパシー、啓示、靈示がもたらされていた。S氏とW氏はそれらの報告を受けて、このすべてを、「形の世界」への移行を示す傍証と勝手に解釈したのである。それを二、三拾ってみると次の通りである。

五月二〇日、未明、S氏は夢で数名の人達と一緒にある特別な通路を通じてピラミッドの中に入り、秘密とされている機械装置を見た。自分達数名は、よその者からは見ることの出来ない姿でピラミッドの中を歩いて行くため、この秘密の機械装置を護^{まも}るピラミッドの霊人達は、自分達を発見することが出来なかった。そして、彼は、この機械装置の説明を聞いて帰ったのである。

五月二十一日、未明、N夫人次の夢を見る。

「五月二十一日より五月二十七日までの七日間の予定で、N夫人は皇太子殿下ご夫妻の御在所の大掃除に行く。参上した時には皇太子殿下はご病気で伏せておられたが、三日目に元気になられ起き上がられたのでお目にかかり、色々とお話を申し上げた。そして七日間の

大掃除を終えて五月二七日に帰宅した。」

五月二三日、岐阜県のI氏、未明に突然目が醒める。そして次のテレパシーを受けた。

『その時は、五月二七日朝です。』

I氏には、この意味が理解しかねるのであった。何か重大な意味を持つものであるという気が心の中に強く広がるのであるが、それ以上のことは判らない。一日中熟慮した結果、W氏に語ろうと思い、その日の夕刻連絡した。

I氏から連絡を受けたW氏は、心で、「五月二七日は、四月二七日から丁度一ヶ月目に当る」と思い、当然のことながら、このテレパシーを、その事に結びつけたのであった。このことがW氏からS氏に通知されたのは勿論である。

翌日（五月二四日）、高知市のN夫人より手紙が到着した。

五月二〇日のこと、N夫人は、バスの中で、心の目に展開するある象徴的な光景を靈視して、次のように強く感じたのである。

「人々が一列になって行進して行く姿であった。人々は、なぜか黒っぽい外国の僧侶が着るような服装をしていた。なぜ人々は、その高い方向に向って、ただ喜び勇んで、しか

も黙って行進を続けているのだろうか。

それは、行手に、今までに人類の経験した事のない、最も美しく、優しく、荘厳な姿がみえているからである。だから人々は行かずにおられないのだ。

しかも良き香りはまわりに満ち、花は咲き乱れている。何よりも天の美しさが人々をいざなうのだ。

人々は、ただ言いようのない安堵あんどと感謝の心で黙って歩いて行く。そして最後の人が進み終った時、ある人が扉を閉じた。途端にゴーツという大音響と共に、今まで歩んで来た世界は水の中に巻き込まれてしまった。

しかし、高い所に向って一路進んで行く先の人々は、最早や知らないうちに、気が付かないうちに、今までのものを脱ぎ捨てて荘厳な姿に変わっているのだ。」

この頃には、まわりの多くのワンダラーの方々に様々な啓示があった。これ以外にもまだあったようである。前にも述べた如く、これらの啓示は、『無の世界』における進行においては重要な事柄であったのであるが、S氏、W氏はこれを『有の世界』の中の「形の世界」に直結して考えてしまったのであった。

五月二四日、S氏は、T氏とたまたまS氏を訪れたKM氏とにフト、何気なしにこれまでの経過とその時の日時（五月二七日）を語ったのである。ところがこの不用意——後日、これは、不用意というべきではなく、この二人のワンダラーが学ばねばならない、ある大きな役を果たすための大切な課題であったことを知るに至るのであるが、当時は不用意と思えたのである——の語らいが、大きく「このことで世の中をゆさぶる」結果となったのである。

S氏からこの話を聞いたKM氏は仰天した。彼は早速かねてから深い繋がりを持って隠れた系統の悪の力の者（KM氏は気付いてはいなかった）にこの顛末を語ったのであった。しかし、S氏は二八日の夕方までこのことは知らなかった。

五月二六日夜半から二七日の朝にかけて、私達は、大きな緊張と待望とをもって、その時々の来るのをじつと待っていた。それは、どのような経過をたどってやってくるのであるのか、時は刻々と過ぎてゆく……

しかし、何事も起こらなかった。いつもの通り夜は明けた。なんの気配も全く感じられない。S氏、W氏、T氏は、それぞれ我家で茫然自失した。

今にして思えば自我欲のなせる大きな間違いであった事は判るのであるが……当時は、正に真剣そのものであった。待望の時、人類の喜びを迎える時は待てども来たらず。一体なんたる事ぞ、このやる瀬なさ、悲しさ、不信心。眼の前は真暗闇となる。苦しみは全身を包み、怒りの心が大きく湧き上がって来る。この失意と怒りの気持は、誰にも、どこにもぶつけることのできない憤りとなる。

このような苦悩の中で、S氏は次のようなテレパシーを受けた。

「ライマカタにエサを与える真似は神様はなさらない。」

「神様の御業を盗むような、鷹の目をしたワンダラー。」

「神様の宝を盗もうと狙い続けたワンダラー。」

「神様を追いつめたワンダラー。」

「ワンダラーの特権を振り翳したワンダラー。」

W氏も前記の通り、眼前は真暗闇となる。茫然自失の状態から、怒り、悲しみの涙は溢れ、滂沱と流れて止まらない。苦しみが汐の如く押しよせてくる。十八年の長い間、一日、一刻たりとも忘れたことのない待ちに待ったその時は来たらず。自分の今までの歩みは、

すべてが間違っていたのではないだろうか？これまで堅く持ち続けて来た信念は、ガタガタと崩れ落ちんとした。そして神への不信の心が脳裡をかすめた！

その瞬間、心の奥底よりピカッと閃いたものがあった。

「ルシファーは、かってワンダラーであった時、これと同じ苦しみを味わった。その時ルシファーは神様への信を失ない、苦しみ、怒りによって神様のみもとから離れてゆき、ついに地に落ちた。」と……

W氏は、この体験により、ルシファーの地に落ちた苦しみを身をもって知ったのであった。続いて更に次の靈感を受けたのである。

「神の世は神様のみ心の儘の世であり、自我慾の無い、無我の世界を迎えんとするのに、その神の世の扉を開くワンダラーが、神様への全託を忘れ、自我慾を持ってして、どうして神の国を開くことができようぞ！」

二七日、二八日の両日をかけて、S氏、W氏、T氏は共に、ようやく失意から立ちあがることができた。しかしその時、五月二八日の夕方、S氏は殆んど見知らぬといえる、Aという若い女性からの電話を受けたのである。

「二七日は失敗しましたね。二七日の昼まで、前夜から、私はKさんと二人で一睡もし

ないで、『世の終り』を見守って来ましたが、何も起こりませんでした。失敗でしたね。」

と語り、更にA嬢は次の如く言うのであった。

「私は、今朝（二八日）から貴方に電話しようと思いましたが、中々貴方を把えることが出来ませんでした。今ようやく貴方を把えました。」

二七日は失敗しましたね。三人の宇宙人（註）ワンダラーのことを指して言ったのであるか？）が、『世の終り』を引き起こすのに、失敗しましたね。ワンダラーの周波数が上がらず、ピラミッドのボタンを押すことが出来ずに大失敗に終わりましたね。これから十五年あとに、もう一度『世の終り』を貴方々は起こそうとされておりますが、それは困るのです。（註A嬢の言う「十五年さき」「ピラミッド」云々は編者にも、この意味不明であることを附記する。）

私は十八年後には、この地球を破滅させます。私はその使命を持って地球に生まれて来たのです。私は、この太陽系以外の遠い遠い星から来たのです。私の父は、宇宙エネルギーの源の星の王様です。私は、その星の王女なのです。私はこの地球を破滅させる使命を持って来ているのです。この腐り切った地球は破滅させるより外に道はないのです。それが神様のみ心なのです。

私は、貴方々に、『世の終り』を起こさせないようにするため、二五日から二七日にかけて大多忙でした。世界中の私の仲間達にこのことを知らせるために、世界各地に電話をし

たのです。」

これと同意の電話がN氏にも、二八日にかけていられたのである。

宙A嬢は、ユリ・ゲラーの如く、驚く程の超能力者であった。日頃から様々な奇異なる超現象を示して多くの人達を魅了していた。また常々「私のテレパシーによって来訪する円盤は系統が異なり、私の呼びかけ以外には出現しないのです。」と語っていたようである。彼女に伴って円盤観測を行ったグループも数多くあったようである。こんな関係から、KM氏は特に密接にしていた様であった。この超能力は諸外国にまで彼女を旅行させた。外国語の達者な彼女は、諸外国に多くの知人、仲間を持っていたようである。

彼女から電話を受けたS氏は、『このことで、世の中をゆさぶらぬように。』と特に注意を受けていたにもかかわらず、僅かな不用意の語らいが、KM氏からA嬢にそして世界中の隠れた系統の組織にまで広がり伝わり、世の中を大きくゆさぶる結果となったことを知ったのであった。

S氏は、再び、失意のどん底に落ちたのである。自分の不用意の語らいが、かくも世界中に、しかも悪の系統に伝わった！そしてそれがために世の中を大きくゆさぶり、この失敗を招いたのだと思うと、今更の如く自分の責任の重大さを痛感したのである。

神様を始め、宇宙の方々、すべての方々に、取り返しのつかない事をしてしまった。いかにお詫びをしても足りない、申訳ないという心が次第に大きく全身を包む。そして、遂に自責の念から、自からの生命を断とうと真剣に考えるに至ったのである。

彼の脳裡に様々なことが去来する。一九六〇年に、金星の長老、サナンダ様が語られた言葉も思い出されて来る。『前の遊星の、世の終り、の戦いで、苦しみに耐えかねて、ワンダラー〇〇さんは自殺したのです。』すると、自分は彼（自殺したワンダラー）の二の舞をしてはならないという強い心が湧き上がって来るのであった。また、母親を始めとして、まわりのワンダラー達は、それぞれが靈感を感じて彼に励ましの言葉を送ったのであった。

彼は、ついにこの苦しみに耐え抜いた。流石に逞しいワンダラーS氏である。この厳しい試練から、やがて立ち上ったのである。

太陽の方、地球に降り給う

では、五月二十七日は、いかなる意味をもった大切な日であったのであろうか！ それは

順を追って述べることにし、ここでは、この大問題の起こった丁度この頃、いつもは週に最低一〜二回は必ずS氏やW氏と連絡し合っていたN氏が、この二週間ばかり一度の接触も無かったということを書いておきたい。なにかある力でこの接触を止められていたかと思えるのである。

五月二五日、N氏は夜半からなんとなく激しい胸騒ぎがする。寝床より起き上り、思わず合掌する。そして夜が明けるまで「天の神様」に祈り続けたのである。

その祈りの中で、次のテレパシーを受けるも、意味理解し得ず。

『未だ整わざるところあり。』

さらに、二六日、二七日も同様、N氏には、天の神様に祈らずにおられない強い衝動が湧き上がって来る。彼は、結局三日間に涉って、夜を徹して祈り続けたのである。その時も、昨夜と同様のテレパシーを受けた。

『未だ整わざるところあり。』

彼は、このテレパシーを静かに考えて、この意味を理解しようと祈り続けていた。すると、ある光景が眼前に浮かび上り、それによって啓示を受けたのである。

「昨年の一二月中旬、地球のことは愈々最終段階に入ったと直感した時、ワンダラー達の会合が開かれた。その集まりに向かう途中、輝く円盤が飛来し、△今日の集まり（儀式）は重要な意味をもつ大切な集まりである。▽というテレパシーを受けたのである。これと同じ意味において、再びワンダラーが集まる（儀式）必要のあることを直感したのであった。」

五月三一日、未明、N氏、ある意味深い象徴的な光景を見る。

「立派に出来上った新築の建物（地球のことを指すのか）がある。その建物の外壁のタイルにまだ付着している余分なヨゴレ、紙屑、木片、それに目地の中に入っているヨゴレ、ゴミなどを、三人の男性の方が、暖かい、柔らかい温水で清掃してられる。その三人の方は、その後方で、それを眺めているW氏とN氏には振り向きもしないで、出来上がったこの建物を、一生懸命に大掃除してられるのである。」

それは、新しい世の地球が出来上がり、付着している余分のヨゴレが清掃されて愈々完成の段階へと進行しつつある象徴のようであった。

六月一日、N夫人は、久し振りに今夜W氏を訪れる旨を約束した。その約束をした直後、

次のテレパシーを受けたのである。時は午後三時四〇分であった。

『太陽の方が、みんなの準備が整わないので降りられないのです。』

その日の夜、W氏を訪れたN夫人は、このテレパシーのことを語る。

『みんなの準備』、即ちワンダラー達の準備とは一体どんなことなのだろうか。そして、その準備さえ整えれば、今直ぐにも、太陽の方^は降りられるのであるという意味であるか。

N夫妻は、「昨年一二月中旬に、ワンダラー達の集まりが行われた。それは重要な意味を持った大切な集まりであったが、そのように、再び集まって語り合い、協議することが準備を整えることとなるのではないだろうか。」と語った。

これを聞いたW氏も、最近、ワンダラー達の集まりが必要であると感じていた時だけに、お互いの意見は早速一致した。日時の決定は、W氏が、みんなの都合良き日を選んで決めることにした。

この集まりは、六月一〇日までに行わねばならない。それより遅れることは許されない。この気持が、N夫人の心を強く占めていたのであった。このN夫人の考えがW氏の心に強く伝わり、なぜかW氏の心も、一〇日以前に集まるべきであると堅く思うのであった。

集まる日時は、六月九日、午後六時、W氏宅と決定された。

六月九日、未明、N夫人は次のような象徴的光景を見た。

「九日の午後六時に集まるワンダラー六名、その六名の戸籍謄本の如き書類が集められていた。しかし、六名の中の五名の書類には黒の文字がビッシリと一杯に書き込まれており、この五名の書類は集められたが、他の一名の書類には、この集まり（儀式）に不参加を意味するSOSの文字が赤色で書かれている。出席したワンダラー達は、彼の欠席で大さわぎとなる。あるワンダラーは四方八方へと走り廻って彼を探しに行く。この様なさわぎの中で、ある一人のワンダラーが赤字で書かれた書類を奪い取るように取り上げて、他の五通の書類と一緒に提出すればなんとか必ず間に合う筈であると語り、その六通の書類を持って彼は出て行ったのである。」

N夫人にはこれが何を意味しているのか理解しかねる所もあったが、今日の集まりに重大な支障をきたすのではないかと心配されるのだった。しかし、これをW氏に語る勇氣は出なかった。

午後四時三〇分頃、あるワンダラーからW氏に、突然の都合で今夕の集まりに欠席する旨の連絡が入った。W氏は、「今日の集まりは重要な意味ありと確信する。是非出席されるように」と強く要望。しかし、彼の返事の中に不確かさを感じ取ったW氏は、車で彼を迎えに行き、彼と共に会場のW氏宅へ直行したのであった。

六月九日、午後五時五〇分、儀式（集まり）は開始された。集まった者は、S氏、N氏、N夫人、T氏、TS氏、W氏の六名である。

W氏がまず今日の集まりの意味を語る。

「五月二十七日のことは、決して失敗ではない。ワンダラーの一番の苦しみは我が出た時であることを、今回の体験で学んだ。そして、自我から出た考えの誤りに気付いたのであり、一見失敗のように見えることも実は神様の御業がより良く成されるための助けであり、これからをより良くするための神様の御業であると確信して、神様に感謝致しましょう。」

「今日の集まりは大切な意味があると強く思えてなりません。これは、なにかの儀式であると思えるのです。今は判らないが、大切な儀式だと思えます。」

「ワンダラーの準備が整えば、△太陽の方▽には今にでもお降り頂けるのである。この会合は△太陽の方▽のお降り頂けるようにお願いする儀式であると思えます。」

「これからは、私達ワンダラーは勝手な想像や絵を画かないで、すべてを神様におまかせして、身も心も神様に預けて、進んで行きましょう。」

「これからも、天の神様を拜めるだけ拜んで進んで行きましょう。」

以上のことなどをみんなで語り合い、意志を統一し合ったのである。午後七時一五分、儀式終る。

天の神様は、このワンダラーの集まりによる儀式を待っておられたのである。待ち望んでおられたのである。

結論から先に述べよう！

翌日、六月一〇日、

「太陽の方は、地球に降り給うた。」のである。

儀式の終わった翌一〇日より、様々なことが、私達仲間のあいだに起こって来た。

六月一〇日、未明、W夫人に、今までも度々出現されてW夫人を助け、励まし、勇気づけて下さったいつもの気高きお方が現われて、次の如く語られ、そして、W夫人の顔を変えられた。

「地球はどんどん変わりつつありますから貴女のお顔も変えましょう。」

と語られて、そのお方は夫人の顔に手を当てられて、顔の皮を捲^{めく}って下さった。そして、皮が捲^{めく}れると、実に驚く程に気品がある美しい、皺^{しわ}一つない若々しい宇宙人のような顔に変貌したのであった。無の世界では、本当の顔に変化したのであろう。

註W夫人には、これと似たことが、昭和四六年一二月の寒い夜にもあ

った。ある事件で夫人が人事不省に陥った時、娘のY嬢は、母親（W夫人）の顔が突如変貌したのを目撃したのである。Y嬢の言葉によれば、「生きたマリヤ様のような顔」であったという。多分、その時と同じ顔であると考えられる。

同日（一〇日）、午後一時、N夫人、次のテレパシーを受ける。

『あとは、スムーズに行われます。』

N夫人は、それから（午後一時三〇分頃）知人のU老夫人を訪れた。U老夫人は今朝未明に見た夢を語った。

——私の知らない大変立派なお方が、私の顔の皮を一枚はがして下さった。そうしたら、とても綺麗な若い顔に変わってしまった。すると、自分の身体がずんずん下がって行って、自分は息を引き取った……そこには私の立派な葬式が取り行なわれている。部屋には一杯の人達がおられたが、その中に自分の知っている人は誰もいなかった。——

同日（一〇日）午後五時二〇分、N夫人には、太陽を見たいという心が強く湧き上がって来た。

空を見上げると天空は真黒い雲に覆われていたが、突然その真黒の雲の一部が裂け、その中から太陽が輝き出た。その輝く太陽を正面まへにジーンと眺めることが出来るのであった。N夫人には今だかつて経験した事のない、珍らしい事であった。

太陽の本体は銀光に輝き、その銀光がうごめき躍動しているのが見える。まわりは美しい薄ピンクに輝き、更にその外周は鮮かな薄黄色に輝いている。それは、文字や言葉で表現出来がたい色彩である。われを忘れたように暫く眺めていた。すると、太陽の本体で躍動する銀光が、突如としてある図柄を形成したのである。その図柄は、「日本列島」であった。明確な日本列島の地図が、太陽の中に造られたのである。暫くすると、その地図は突如として消え去った。と同時に、太陽の全体は、もう正面まへに見られない今までの太陽に戻ったのであった。この瞬間、N夫人は、

「太陽の方が地球にお降りになられた。」

と直感した。しかし、これを他人に語る心が起きなかったので、自分の心の中にのみしまっておいたのである。

六月一日、昨一〇日より今日にかけて、W氏の心の中に大きく広がって来るものがある。それは、「太陽の方がお降りになられた」という感じである。次第にそれは強く、大きく、心の中を占領して来るのであった。間違いなく「太陽の方は、お降りになられた。」

という確信が湧き上がって来るので、W氏はS氏の心を聞こうと思ひ電話した。

一方、S氏は、今朝（一日）未明、ふと目を醒した時、「太陽の方が降りられた。」という強い実感を全身心で感じたのであった。W氏から電話を受けたS氏は、W氏の語る前に、「太陽の方がお降りになったのではないだろうか。」と今朝未明に実感した旨を語るものであった。

W氏も同感の意をS氏に語り、この電話は、期せずしてお互いを、確かめ合う結果となった。

W氏がこれらのことをN夫人に知らせた時、N夫人は、前記した、一〇日午後五時二〇分、太陽を眺めて、「太陽の方がお降りになられた。」と直感した時の経過を語ったのであった。

N夫人は、W氏にこの経過を語ったあと、更に確信を得たいと思った。それは、W氏にもし自分が間違ったことを言っていたら大変であると責任を感じたからである。

N夫人は、すぐに（午前一時五〇分であった）天の神様に祈る。

「天の神様、太陽の方はお降りになられましたでしょうか」と……すると、

「太陽の方は、降りられたのです。」

と明確なテレパシーを受けたのである。

問題の五月二十七日は、一体どういう大切な日であったか。この重要な意味が、ここに至って始めて理解されたのである。

実は、「太陽の方が、地球にお降りになられる日」であったのだ。私達ワンダラーの至らなさと目覚めの足りなさから、その日にはお迎えが出来なかった。そして十四日間という尊い大切な日を延ばしてしまう結果となったのである。

それにしても、以上のような経過のうちに、宇宙の方々が目に見えない姿で私達に語り、私達が方向を誤まらぬように、宇宙の法則の許される最大の限度においてあらゆる援助をされておられることが判るのである。今回においても、一部のワンダラーが方向を間違いかけた時、他のワンダラーに真剣に語りかけておられたのである。

『未だ整わざるところあり。』

『太陽の方が、みなさんの準備が整わないので降りられないのです。』

この意味が、今にして、痛い程によく判るのであった。

私達は、このような試練を経てこれを判ることにより、実は大切なことを忘れていたのに気付いたのである。

一九六〇年にすでに教えられていた、『太陽の方が、降り給う時がある。』ことを、すっかり忘却していたのである。

地球が新しくなるということは、吾々太陽系の家族の一員に復帰するということである。新しい地球は、太陽を親とする家族に仲間入りするのである。

親である太陽の方が地球に降りられて、沢山の働き、即ち、地球の「世の終り」を行い、「新しい世」を創る具体的な働きが「無の世界」で成されるのである。

ワンダラーは降りられた△太陽の方▽と一緒に働き、一緒に進んで行き、使命を果たすのである。

今まで述べてきたように「無の世界」には、いくつかの扉のようなものがある。ワンダラーは、その扉を開いてはその「無の世界」の場で働き、役を果たしてゆくのである。こ

れまでの経過を省りみれば、このことはよく理解されよう。

一九六〇年一〇月二日、アトネ様（金星の方で、天の神様のお使いをなさるお方）が、『天の神様のお言葉』を私達に伝えられた。

『やがて、太陽の方が下に来られる時がきます。その時はみんなの働きの終りの時です。頼母しい彼をもち立てて、一緒に期待通りの働きをして下さい。』

かくして、六月一〇日、『太陽の方は、地球に降り給うた。』のである。ワンダラー達にとっては、これから「太陽の方」と一緒に沢山の働きが始まるのである。どのようなことをしてゆくのかは、今は全く判らない。ただ心に神様を念じて、身も心も神様に預けて、靈感の儘に進めば良いという事だけが判る。

「太陽の方」と一緒に進む

六月一二日、午前六時三〇分、N夫人次のテレパシーを受ける。

『地球の大周期終る。』（地球の、無の世界、において大周期が終わったという意味である。）

N夫人は、この時、自分の主な役は果し終えり、と直感した。

『地球の大周期終る。』の報告を受けたW氏は、「地球の、世の終り」の戦いの準備整えり。」と直感する。同時に、「これからは、ワンダラー達は、太陽の方と一緒に天の神様のご期待どうりの働きをするのである。」と決意を新たにするのであった。

六月一五日、*太陽の方*の歓迎とお礼の儀式を行う。集まったワンダラーは、前回と同じく六名。

この集まりにおいてN夫人は、大要次のように感謝の挨拶をする。

「六月一四日、太陽を見なさいというテレパシーを受け、夕方太陽を見ました。その時、再び皆さんの集まる必要であると思いました。

去る九日に皆さんが集まれ、太陽の方が降りて頂ける準備が出来ました。先に天の神様がお降り給い、このたび太陽の方がお降りになりました。今日はみなでそのお礼と歓迎の儀式をするのだと思います。私達はなにも判らずここまで来ましたが、皆さんの沢山の働きがあって無事に行われたのだと感謝致します。皆さん本当にありがとうございます。

した。」

ワンダラー達は、*太陽の方*のお降り頂いたことに対する感謝を互いに語り合った。W氏は、「これからは太陽の方と一緒に、天の神様のご期待通りの働きが出来るように、天の神様に祈って進んで行きましょう。」と語って儀式を終える。

丁度近所の方から贈られた、*出産祝*の赤飯で、この儀式を祝ったのである。

六月一九日、朝六時、N氏、突然目を醒ます。

天上より鳴り響く音楽を約七分間聞く。天上の音楽ということは判るが、この音楽が何を意味するかは不明である。しかし、心の中で、『戦いの音楽』であるという事だけが明確に判るのである。だが、N氏は、『地球の大周期』が終ってからもまだ戦いがあるとは考えられないと思い、その意味を理解し得なかった。

六月二〇日、午後一時、N夫人は、『戦い始まる。』のテレパシーを受けた。今更なんの戦いが始まるのか？自分の主な役は終ったはずだが、と思うと判らなくなるのであった。夫は『戦いの音楽』を聞き、

夫人は『戦い始まる』のテレパシーを受けた。

しかし、これらは大した意味が無いかも知れないが一応はW氏に語った方が良からうと思ひ、夕方、N夫妻はW氏を訪れ、意味不明だがと言いなながらもこのことを語った。

これを聞いたW氏は、**とたん!**
 「ツノカマタの音楽である。世の終りの戦いが始まったことを告げる音楽だ！」と叫んだのである。

『ツノカマタ』とは、一九六一年に、軽々しく口にすべからざる偉大なるお方の語られた御言葉であった。以来今日の日まで考えたこともなく、思ひ出す必要もなかったので、全く忘れていたこの五文字の『ツノカマタ』（宇宙語）が突如脳裡に閃めきわたったので、思わず叫ばずにはおられなかつたのである。

W氏の突然の叫び声に、事情を知らぬN夫妻は驚いてW氏を注目するのであった。次の御言葉を充分に味わって頂きたい。

『ツノカマタを、高く変る前は、沢山たかるカルマへかけて、世の終る戦いの出来ることを知らせます。』

一九六一年一月二〇日

畑ツノカマタは、天上の音楽、自然霊による音楽

ワンダラーがこの十数年間、主にそれぞれの生活の場において役を果たして来たことは、「オイカイワタチ」本書にも述べてある通りである。しかし、この頃に至って、ワンダラーには、靈感の儘に集まり、神様がなさる儀式に参加して果たす重要な使命があったことに気付いて来たのである。

これは大切な儀式であり、これが成されることにより、**無の世界**での新しい場面が次々と展開し進行することを体験で知ることが出来たのである。更にワンダラーは、降りられた**太陽の方**と一緒に働いて進んで行くのであり、ワンダラーの働きには、これらのことが鮮かに織り成されていくのである。だからワンダラーは、柔らかい靈感を受け、それを深く味わい、身も心も神様に預けて、**素の儘に、心ののんきを持って進まない**と、その使命をうまく果たすことは中々できないのである。

ワンダラーの苦しみには色々なものがあるであろうが、自我が、自我慾が出た時に最大の苦しみを味わうようである。

そしてそれは、神様に全てをまかせ切れない時なのであった。これは、この十数年間に得た私達の体験である。度々この体験と試練を受けながらも忘れる時がある。だから私達は、**絶えずこれを心に戒めるのであった。**

六月二一日、夜半、高知のN夫人、なぜか突然目を醒ます。その時次のテレパシーを受けた。

「いよいよ時が近づきました。心して日を送って下さい。あなたの苦しみの終る日も間近いでしょう」

六月二二日、「オйкаイワタチ」本書印刷製本出来上る。配本について、私達は、かねてから真の判る知人、知己を通じて、自然の流れの中で、日本中におられるワンダラー、元ワンダラー、リング、真の判る横の糸の方々に手渡されていくことを願っていたのである。しかしつい先日如く、不用意の者に手渡され、本書によって再び世の中をゆさぶることになりはしないか。前の痛手が大きかっただけにこの不安と心配とがあったのである。そのために出来上った「オйкаイワタチ」本書の配本は、暫く待つことにした。

六月二四日、午後一時、N夫人は、考えさせる意味深い象徴的な言葉を、テレパシーで受けたのである。

「二本の木に実が成るのは、木が生きて、生長して行く時、

木が大きくなれば新しい実も成る。その実は初めは青いが色づいてくるように、新し

い実の成り始めた実を大切に、まわりで守りましょう。

みのった実は、新しい実を、暖かく、みのるまで包んであげましょう。

二本の木には沢山の実がみっている。」

六月二六日、W氏は、「オйкаイワタチ」本書に記述してある『特別の手段』の（もう一つの意味）が開け、行われる時節の到来を直感した。（「オйкаイワタチ」本書P121参照）

今までのオ、カ、イ、ワ、タ、チのたどって来た道は、（現在の地球へ来るまでの数多くの遊星における戦いは）必ずしも輝かしいものではなかった。いわいこと祝事の儀式に到達するまでにサタン（オリオン、ルシファー）の強力な妨害と誘惑により真に目覚めず、眠ったままのワンダラーとなったり、あるいはサタンを神と間違えたワンダラーもあった。また、ついにはワンダラー同志の争いのまま「世の終り」を迎えたこともあった。その遊星のカルマが解けない前に「世の終り」を迎えたためにその遊星は良く高く変ることが出来ず、大災害や戦争で終ることとなった。多くの人類は苦しんだまま「世の終り」を迎えたのであった。これは失敗の世の終りであった。

今までに辿って来た長い宇宙年月での多くの遊星の失敗において、自責の念から神様の

みもとにも、また自分の遊星の我が家にも帰れず、更にはワンダラーの役目を神様に返上した元ワンダラー達（萬たる数の元ワンダラー）は、さ迷う運をつけて宇宙をさ迷いつづけ、この時期に再び地球に生まれ変わって来ているのである。

サナンダ様（A Z）が『天の神様』に願われた『特別の手段』には、さ迷う運をつけたワンダラー、元ワンダラーが自らの魂に目覚めて自分自身のカルマを解き、甦えるという重大なもう一つの意味があったのである。

六月二十七日、N夫人、次のテレパシーを受ける。

『多くの目覚めるワンダラーを愛で包みましょう。』

六月二十八日、「オイカイワタチ」本書初回の発送準備完了（まこと真の判ると思われる友人、知人宛の七〇冊荷造完了）するも、この日は配本の心湧き上がらず、発送中止。心の命ずる日まで発送を待つことにした。

同日（二十八日）、午後六時、N夫人は太陽を見上げ湧き上る感謝の心そのままにお礼を申し上げた。

その時、太陽の中に「愛」という文字がクッキリと浮かび上る。そして次のテレパシーを受けた。

『ワンダラーを愛で包んで下さい。』

七月四日、W氏、「オイカイワタチ」本書を配本すべき時期到来と強く感じる。そこで、かねて荷造発送の準備完了してあった初回分の七〇冊を発送した。

W氏の心は、「本書が、真の判る、地球のカルマの判る方々に、自然の手順にそって手渡され、広がって行く」ことを祈る気持であった。

丁度S氏もこの日の朝、「オイカイワタチ」本書の配本の時が来たと直感する。W氏にこの旨を語ろうと思っていた時、W氏より今日、初回の発送を終えた旨の連絡を受けた。

七月六日、夜、東京のO氏来名、W氏、S氏、N夫妻と共に夜を徹して今日までの経過を語る。その時、次のテレパシーを受けた。

『O氏とW氏の語らいは、世の終りを迎えるための準備です。』

七月九日、W氏には、六日のO氏来名以来七日、八日と日を経るにつれて、なんとも言

いようのない喜びの心が全身に広がって来る。九日の日は、早朝より、このなんとも表現しがたい喜びが全身に満ち溢れ、最高潮に達したのである。それは、天上からの喜びが伝わって来るようであった。

この日（九日）、東京のT氏来名。W氏、S氏、N夫妻と共に夜を徹して語る。丁度午前一時（一〇日）、東京のO氏より電話あり、O氏もW氏と同様、魂からの喜びが強く全身を包んだ一日であったと語る。

七月一日、N氏次のテレパシーを受ける。

『世の終りを早く迎えなさい。』

彼は、その時はどのようにすれば迎えられるのか判らなかったので、これを彼の心に納めてしまった。

七月二日、午前、岐阜県のI氏来名。W氏と語り合う。

同日午後、滋賀県のK氏久しぶりに来名、W氏、S氏と共に語り合う。その時、K氏より次のような報告を受けた。

K氏は、七月八日に、甦えりの意味を示すような象徴的な夢を見た。これは人類の甦え

りを知らせるものか、或はワンダラー達の甦えりを示されたものであろうか。その光景は非常にグロテスクなものようであるが、彼は後からなんともいいがたい暖かい喜びの心に満ち溢れる感じにひたつたのである。

その夢は三つの甦えりのさまを啓示した光景であった。

「その1の光景では、まず頸くび（首）が半分くらい切断された死者がいる。そこへ二人の男性が現われて、死者の切断された頸を針と糸のようなもので縫い付けたのである。するとその死者は甦えり、生者となって歩き始めたのである。

その2の光景では、頸は完全に切断され、僅か一枚の皮だけで頭と胴体がつながっており、その皮によって頭はぶらさがり地に落ちずにいる死者がいる。そこへ前と同じ二人の男性が現われ、死者の頭を頸の上に正しく乗せ、頸の切り口を全部縫い合わせた。すると死者は甦えり、生者となって歩いて行ったのである。

その3の光景では、頸は完全に切断され、頭は前方10m位の地上にころげ落ちている死者がいる。やはり二人の男性が現われ、一人が落ちていた頭を拾い上げ、切断箇所を合わせて頸の上に乗せる。他の一人がその切り口を全部縫い合わせてしまうと死者は甦えり、生者となって歩き出したのである。」

深く考えさせるものがある。『無の世界』で死者へ肉体の死者だけを指すのでないVは

甦えりつつあるのでなからうか。

七月二四日、未明、N夫人も次のテレパシーを受ける。

『世の終りを迎えましょう。』

七月二五日、昼頃、N夫人は次のテレパシーを受けた。

『OさんとWさんの語らいは、世の終りを迎えるための儀式である。』

今日(二五日)東京のO氏が来名することは、S氏、N夫妻共に、当日の昼すぎまで知らされていなかったのである。

同日夜遅く東京のO氏来名。今日もW氏、S氏、N夫妻と共に夜を徹して語る。この日は、一九六〇年以来苦楽を共にして歩んで来た昔の主なワンダラーに、本書「オイカイワタチ」により発見された(今日まで隠されていたと思われる)ワンダラーの中から新時代を負って建設を担当されると思われる代表二名(東京のK氏、埼玉のK氏)を加えて集合を願ひ、今までの「無の世界」にて行われて来た戦いの経過を報告するための集まりを開くことが主な課題となり、その日時と場所は次のように決定された。

第一回は八月二日、東京O氏宅、第二回は八月二四日、名古屋W氏宅と決まった。その

時には、この集まりがそれぞれ重要な儀式になろうとは予想もされなかった。

八月二日、東京のO氏宅に十二名のワンダラーが集う。奇しくも一九五八年、円盤、宇宙人を熱願し、新しい宇宙時代を希求する同志が最初に会合したのも、今日のこの部屋であった。この長き十八年間には、言語に絶する様々なことがあった。例えば感慨無量である。かくして再び今日この部屋に集まったのであるが、一九六〇年当時、苦楽を分か合った昔の仲間の欠席が目立った事は残念であった。そして淋しい気もしたが、O氏は、「人数の多寡^{たか}ではありません、集まるといふ事に重要な意義があります。」と厳然と言うのであった。

二日と三日の午前中に涉って、今までの戦いの経過が語られた。そして、

『世の終りの儀式です。』(八月二日)

『新しい世を迎えるための儀式です。』(八月三日)

とのテレパシーを受けたのである。

今まで名古屋で度々行われた儀式でもそうであったように、「人数の多寡ではありません、ワンダラーが集まる事に重要な意義があります。」とO氏が厳然と言いつつ切ったことが、今にして良く理解されるのである。

この東京での集まりが『世の終りの儀式である。』とは、その日まで考えたこともなく、全く判らなかつたのである。この重要な儀式が東京にて行なわれたのである。しかし、この事を仲間達に発表したのは数日後であった。(なぜかその時には発表できなかった。)
三日午後、O氏宅を辞し、帰途、国電の中で、N夫人次のテレパシーを受ける。

『新時代の建設がこれから始まります。』

『太陽の方と皆さんは一緒に進んで行きましょう。』

名古屋駅に着いたN夫人は、自宅に向うバスの中で(一七時四五分)テレパシーを受けた。

『世の終りを迎えました。』

この一ヶ月半における経過を次にとりまとめてみよう。

六月一九日、『ツノマカタの音楽』を聞き、世の終る戦いの出来ることを知らされる。

七月六日、O氏とW氏の語らひは『世の終りを迎えるための準備です。』と私達の心の準備をうながされている。

七月一八日、『世の終りを早く迎えなさい。』と示された。しかし気付かないので、

七月二四日、『世の終りを迎えましょう。』と再び示された。

七月二五日、O氏とW氏の語らい(会合についての語らい)は、『世の終りを迎えるための儀式』であるとまで示された。

八月二日の会合、『世の終りの儀式です。』と知らされる。(この会合が儀式になるとはこの日まで気付かなかつた。私達のうかつさを申訳なく思う。)

八月三日、次のテレパシーを受ける。

『世の終りを迎えました。』

『新時代の建設がこれから始まります。』

『太陽の方と皆さんは一緒に進んで行きましょう。』

これらの一連のつながりを、無の世界^レにおける戦いの進行に照らし合わせた時、今更ながら、戸惑い勝ちにしてめくらの手探りのような歩みの私達に対して、天は深い愛と大きな忍耐を持ってまたまた臨まれ、ワンダラー達が役を良く果たすように沢山の配慮と助

けを下さったことに、皆さんも気付かれることであろう。

八月四日、N夫人テレパシーを受ける。

『これからは、新しい世の儀式を迎えます。』

『太陽の方と一緒に進んで行くことだけを考えて行きましょう。』

「オйкаイワタチ」本書を初回に送本した方々から、大きな反響が起こった。そして次々に、真の判る、地球のカルマの判る方々を紹介されて来た。その方々は更に次の方を紹介され、次第に輪が広がる如くに、静かに、自然の流れにそって、日本国中の、それぞれの使命を持った方々へ手渡されて行くように思えてならないのであった。

その様子を見まもる私達に、「オйкаイワタチ」本書が『特別の手段』の「もう一つの意味」を開いていくのに僅かでも役立っていることが次第に判り始めて来たのもこの頃からである。

八月六日、N夫人、靈感で「新しい世への始まり」を感じるのであった。

八月七日、N氏「太陽の方が、新しい世の骨組を創っておられる」のを霊視する。

八月二四日、先月の二五日に決められた第二回目の会合が行われた。参加者二五名、名古屋市のW氏宅。

この日の会合（儀式）は……「新しい世を迎える儀式」である。
東京のO氏は次の如く宣言する。

「今日のこの儀式は、地球の新しい世を迎える儀式であります。」

引続いてW氏は、これまでの、無の世界、における戦いの経過を簡単に語り、
「只今、私達は、太陽の方、と一緒に、新しい世を迎える儀式を行っております。この喜ばしい儀式が出来ましたのは、天の神様の沢山のいたわりと、助けがあったからです。」
と結び、全員で天の神様に感謝の祈りを捧げて、儀式は終わった。

八月二八日、N夫人テレパシーを受ける。

『新しい世を迎えました。』

『新しい世を迎えたお礼をO氏が語ります。』

八月二十九日、N夫人テレパシーを受ける。

『あるお方が来られます。その時は終りの時です。』

『そのお方は、宇宙創造神です。』

やがて、いつか、宇宙創造神（天の神様）が、この地球（有の世界）へお降りになられることを示されたものであろう。

八月三十一日、ワンダラー七名集まり儀式を行う。

『新しい世を迎えたお礼』を述べ、「無の世界」における戦いは、しめくりの段階に入った。」と語り、全員で、天の神様の今までの大御業に感謝し、これから展開される天の神様の御業をお願いし、感謝を申し上げて、儀式は終わった。この儀式は、O氏を中心として一切が行われた。

これから先どのように展開して行くかは、私達には判らない。しかし、今までの長い試練と体験からして、身も心も神様に預け、神様を心に念じて素の儘に、心のんきを持つて進めば必ず道は開け、使命は果たすことが出来るという強い確信を持つに至ったのである。

これまで記述したことは、すべて「無の世界」でのワンダラーの働きである。「無の世界」で「世の終り」「新しい世」が完全に成就完了すれば、これらのことは「有の世界」に移行してゆくのである。

今までの戦いを振り返って見るに、ワンダラーは、地球の肉体を着て、「地」の場において、「無の世界」で働くのである。「無の世界」の扉を一枚ずつ開き、開かれた「無の世界」でその場の役を果たし、更に次々と扉を開いて、「無の世界」の全部の扉を開き、役を果たし終えて始めて、「有の世界」への扉は開かれるのである。

私達には、「無の世界」での戦いは、着々とまではいえなくとも間違いなく進行し、「無の世界」においては、「有の世界」への扉を開くべき準備は着実に進んでいることが判るのであった。そして、それは決して遠い先ではないことは判るのであったが、いつであるかは判らなかつた。

A嬢のこゝろ

去る五月二八日、「私は地球を破滅させる使命を持ってある星から地球に生まれ変わって来た者です。」とS氏に電話で堂々と宣言したA嬢に話を戻そう。

彼女は決して自らを悪の系統の者であると思っっているのではない。「悪い者は、悪いことが正しいと思っやってやっっているのです。気が付けば、みな神の子です。」と教えられている通り、彼女は、地球を破滅させることが神様の御心であると堅く信じているのである。彼女にはそれなりに正しいと思う理由があるからだ。

彼女は、地球を破滅させるための自分の使命を、次のごとく理由づけていた。(彼女の受けているテレパシーや靈感が、悪の力の系統から来たものであるとは気付いていないのである。)

「地球は永い歴史の中で段々と悪くなり、今や腐敗、混乱、戦争と最悪の極限にあって渦巻いている。もうなんとも救い難い事態に至っている。もうこれ以上、悪を増長さすとは宇宙への挑戦であり、神様への大反逆である。もう地球は破滅させるより他に道がないのだ。それを行うことが神様のみ心である。私の父は遙か太陽系外の、エネルギーの源の星の王様で、殆ど毎夜、父王と連絡を取り、指示を受けている。私は父王の王女であり、

十八年後に地球を破滅させる大切な使命を持って他の星から来たのである。」と彼女は語っているのである。

彼女は、K氏の語る、ワンダラー達が「地球を新生し」、「神の国とする」などということは夢たわごとであり、ワンダラー達は、自分の使命を妨害する悪い者達であると信じていたのであろう。だから強大な超能力、奇異現象を發揮してこの魅力で周囲を意のままに操り、ついにはワンダラー達の働きを妨害して来たのであった。それも五月二八日に至って頂点に達した感がある。その時の力は、S氏を正に自殺にまで追込まんとする程のものであった。

しかし、そのA嬢の行為が彼女自らの破滅と自殺への道に突き進んでいようとは、彼女自身も、また第三者も、勿論私達も知らなかつたのである。

六月一〇日、夜、A嬢は、自ら生命を断つべく、多量の薬剤を飲んだ。幸い早期発見で、これは自殺未遂で終わった。しかしこれが原因で、七日後、六月一六日、彼女はついに帰らぬ人となつたのである。

たまたまこの日(六月一〇日)は、『太陽の方が地球に降り給うた』日である。考えさせられるものがあるのではなからうか。

A嬢の死去のことは、二ヶ月余あとの八月三日、それも東京で、某円盤研究家から知らされたのであった。これを聞いたN夫妻は、A嬢とは一、二回の軽い面識しかないにもかかわらず、なぜか霊前に赴き、靈魂安かれと祈りたい衝動が心の奥から湧き上って来る。表面の心では、余り面識の無い彼女にどうしてこんな気持が起きるのかと自問自答するのであった。特にN氏の方にはこの心が強かった。しかし、N夫人には、強い力で何者かがあるところに行かせるように思えてならない。何者かに導かれている。確かに誰かに誘われていると考えた時、太陽の方々に導かれていることにハッと気付いたのであった。

八月六日、N夫妻は、生前のA嬢宅を訪れ、霊前に花を捧げて祈った。

「天の神様の愛に満ち溢れますように、真の神の愛を受け入れて、やすらぎが得られる生活をして下さい。」

「正しい方向で、正しい神様の下での霊界で、働いて下さい。」

A嬢宅を辞したN夫妻は、「太陽の方と一緒に役を果たした」という安堵の心と、A嬢のみたまは、太陽の方によって救われたという確信に包まれて、明るい、さわやかな気持となって帰宅したのであった。

第三章 『有の世界』の聖戦始まる

九月の半ばを過ぎた頃より、地球の肉体を着たワンダラー達が働く、『無の世界』での戦いは、その大半が終ったような気がし始めて来たのであった。そして月日は流れた。その間、私達仲間には、さして変化は無かった。しかし、「天のワンダラー」（地球の肉体を着ない、宇宙のワンダラー）の方々の活躍は依然として続いている。この方々による沢山の働きが行われているのであった。先にも述べた通り、「地のワンダラー」は地球の肉体を持って、どうしても果たさねばならない無限の限度まで働く。そして、残りの大半の働きは、「天のワンダラー」の方々によって成されるのである。私達仲間にして変化の無い時は、今までもそうであったように、「天のワンダラー」の方々が沢山の働きをなさっている時なのである。

「天のワンダラー」の方々は、『無の世界』で着々と準備を整えられる。それが例え九〇%であっても、残る一%は「地のワンダラー」が絶対に果たさねばならない。そして、

両者が合いまって一〇〇%となり、そのことが成就するのである。

この期間（九月から翌年四月始めまで）には、「天のワンダラー」の方々が「無の世界」から「有の世界」への扉を開く準備を着々となされつつあるという感じが、ひしひしと私達に伝わって来るのであった。

八月二四日、高知市のN夫人、自宅の裏山にて「東と西が結ばれる」象徴的光景を見る。

八月三十一日、高知市のN夫人、自宅の裏山にて「南と北が結ばれる」象徴的光景を見る。

九月二日、名古屋のN夫人、小高い山にて「天と地が結ばれる」象徴的光景を見る。

九月四日、W氏、早朝、近くの小高い山を散策中、「天と地は新たとなり、地球の変化始まる」と判るのであった。

九月八日夜、S氏、夜空に輝く星々を眺めながら、天に向かって問う。

「九月四日より地球の変化が始まったのでしょうか？」その瞬間、円盤が一機、続いて

「また一機、この問いに回答するごとく、またこれを肯定するように鮮かな光と共に飛び去るのを目撃した。」

九月一五日、S氏、次の靈感を受ける。

「高く変ることは、これから終る日まで、その火を消さぬことである。」

「残された日は、より高く変るため、ワンダラーの目覚めのためである。」

一月二〇日、S氏、早朝に次のような、考えさせられる象徴的な光景を霊視した。

「大地に一本の太い木がある。その太い木は大地にしっかりと根付き、枝葉は完全に育って一杯に密生している。その木の上から四分の一くらいの枝葉には花の蕾が一杯につき、今まさに咲きなんとしている。だが残りの四分の三はまだ蕾が枝についていない。」これを見たS氏は、やがてこの枝にも蕾が一杯つく時が来る、その時が待望の時ではなからうかと思うのであった。

一月三十一日、大晦日、昭和五〇年もあと一時間で去らんとする午後十一時、W氏は、夜空に輝く満天の星を仰ぎ見ながら、去り行く年と共に今年一年間の「無の世界」での出

来事の想いにふけろうと、我家のベランダに出る。すると、突如、上空に円盤が鮮かなグリーン色に輝きながら滑るように飛び去るのを見る。

(一九七六年)

昭和五十一年一月一日、W氏、昨夜は午前一時過ぎて就寝せるも、朝(元旦)午前六時五

〇分に目を醒す。「初日の出の御来迎を仰げ。」とテレパシーを受ける。我家の二階のベランダに出る。時はまさに夜明寸前、天空は薄暗いが良く晴れて、一杯の青空を感じさせる。視界の地平線は、太陽が出んとする前か、綺麗なアカネ色で美しく燃えているように見える。七時をやや過ぎた頃、東の空が次第に明るさを増すにつれて、まわりの地平線上では、一層もえるように美しいアカネ色が強くなって来た。いまに真紅の太陽が昇り始めんとしているのが良く判る。すると、まさに太陽が顔を出さんとするその寸前、少し上空に、ダイヤモンドを極めて大きく輝かせた如く、ピカッと強く光り輝く光体を目撃した。と同時にW氏は、円盤であると直感するのであった。

W氏は今までに数多くの様々な円盤を目撃してきたが、このような姿を見るのは初めてであった。やがて真紅に輝く大きな太陽が静かに昇り始めた。

ダイヤモンドの如くに輝くこの円盤は脳裡と瞬に強く焼き付けられて、彼は、いつまでも忘れられない深い印象を受けたのである。これは今だかつてない経験であった。

この円盤体験以来W氏には、

「地球は、無の世界」において「世の終り」と「新しい世」を成就せり。今年(昭和五一年)からは、有の世界に移行し、有の世界における聖戦が始まる。」

という思いが、日を経るに従って強く心に湧き上がって来るのであった。そして、無の世界から、有の世界への扉を開くのもワンダラーの役であると判って来たのである。さらに、その儀式がいつ、どのようにして行われるのかは判らないが、決して遠い日ではないことだけは判るのであった。

昨年(昭和五〇年)の九月中頃より今年(昭和五十一年)の四月初旬までは、私達仲間にはさして大きな動きは無かったが、決して皆無というわけではない。ワンダラー達は、それぞれが、それぞれの場で、啓示を、テレパシーを受け、また、無の世界における進行を見せられていたのである。しかし紙数も残り少なくなったのでそれらは割愛する。

四月四日、高知のN夫人来名、W氏宅を訪れる。N夫人の来名には、ある重要なことをW氏に語るという目的があったのだが、W氏と語り合ううちに、彼女は何を思ったのかそれを語らずに帰って了ったのである。ところが後日に至って、その語らなかつたことが、

W氏の信念を一層高める助けとなったのであった。

高知のN夫人は同日(四日)夜、N夫妻と会って、今回来名した唯一の目的を、次の如く語ったのである。

「いよいよ『無の世界』から『有の世界』への戦いが移される時が来たことを、Wさんに語るために、それを告げる目的で来たのです。」(W氏はこれを四月二四日、N夫妻より聞き、高知のN夫人の来訪目的を初めて知ったのである。)

四月一二日、未明、N氏、最初夢の中で円盤数機が現われ、それを目撃しているうちに目が醒めて現実の場となった。彼は起き上がって窓を開け、こんどは肉眼で、夢の時と同じ姿の円盤数機を見たのである。彼は、これは『無』と『有』の境が無くなることを意味するものではないかと考えた。しかし、充分に理解のできるまで心に温めておくことにしたのである。

同日(四月一二日)、午前一〇時三〇分、T氏、地下鉄の車中で次のような光景を啓示的に霊視する。

「自分は地球と宇宙を眼前に見ている。地球は薄い透明の膜に包まれている。その膜の下部は円錐形にすぼみ、すぼんだ処には口が開いている。その膜は、まもなくするりと抜けるような気がする。この膜が抜けて了うと、そこは、神の国であり、自由で明るい、素晴らしい処であると判るのであった。T氏は、自分の力で膜を引き取ろうとして引張った。しかし抜けないのである。」

その日と翌一三日、霊視した光景と、引き抜くことの出来なかった膜のことが心にかかり、T氏は種々考えをめぐらした。そしてT氏は、「この膜は我の力では抜けるものではない。自然の進行に任せれば良い。」という結論を得たのである。これが判ると、急にS氏に語りた衝動を感じたのである。

四月一四日、午前十一時頃、T氏の語るこの話を聞いたS氏は、これはW氏に語るべきであると直感した。S氏は午後会社を休み、久し振りにW氏を訪れた。それは午後三時四〇分であった。

T氏の霊視した象徴的啓示をS氏から聞きながら、W氏の心は、内から閃めく靈感をも同時に聴いているのであった。S氏が語り終えたあと、二人には長い沈黙が続いた。その沈黙の間に、二人は、それぞれ湧き出ずる靈感を心の中で整理し、各自の果たすべき使命を確認していたのである。

W氏の心に湧きでた靈感は次のようなものであった。
 第三者から見れば、T氏の見た光景とW氏が受けた靈感との間には、全くつながりがないように見える筈である。にもかかわらず、W氏は次のような靈感を受けた。靈感には、目に見えない奥深いものがあることが判る。

「『無の世界』で成就したことが、いよいよ『有の世界』へ移行する時が来た。『有の世界』への扉を開く役は自分に与えられた大切な役である。」

「この役を果たす時は今／＼である。」

「そのことを、天の神様にお願する時が来た。」

W氏の心は、この二人のワンダラーの言霊ことばの語りにより、『無の世界』から『有の世界』への扉は開け、『有の世界』での聖戦が始まったことを確信するのであった。またこの語らひは儀式であると判るのであった。

このような靈感を感じながら、更に長い沈黙が続いた。そのため、二人はいつものようには多くを語ることなく、その殆どの時間を沈黙と静謐せいひつで終った。

ふと、昨年ことごとの今日（四月一四日）の出来事が想い出されて、W氏は思わず立ち上った。偶然の一致か、必然の一致か、あの時から丸一ヶ年あとの今日、『無の世界』から『有の世界』への扉が開かれんとしている。しばし声なく二人は立ちつくした。そして、深い秘められた意味を探り当てようと、また沈黙が続いたのである。（昨年四月一四日についてはP 27 28を参照されたい。）

同日（一四日）、W氏は、自分に与えられた大切な使命を果たす時が来たという気持と自覚を次第に強く感じ、それは確信にまで達した。

夜半、W氏、『天の神様』に祈る。

「『無の世界』で完全に成就した『世の終り』と『神の国誕生』を、『有の世界』へ移行して下さいまでも良い準備が整いました。どうか、『有の世界』への扉を開いて下さい。そして、エクアドルの聖戦と神の国誕生の大御業を実施して下さいますようお願い申し上げます。」

宙高知のN夫人は、四月四日、靈感のまま来名したが、その時の唯一の

目的は、W氏に、「『有の世界』での戦い始まる」ことを告げることにあ

った……。この意味が理解されるであろう。

四月一六日、S氏、『離託』の学びを受ける。

四月一七日、未明、N夫人は、T氏の靈視した光景と同じ姿を、次のように見る。
 「地球を包む膜がある。その透明の薄い膜は下にさがり、円錐形にすぼみ、すぼんだ処には口が開いている。暫く見ている内にその膜はするりと下に抜け、滝の水のように飛散し、消え去ったのである。」

この意味が判らぬまま、N夫人がW氏に伝えたのは四月二四日であった。

離託を学ぶ

(この学びはストーリーにあるのでなく、これを通して、心の動き、想い、思いの中から得た学びである。)

天はS氏に離託の学びを課せられた。彼は、四月一六日、会社の上司より突然、九州転勤の内命を受けたのである。しかもこの転勤は、彼が再び名古屋の地に戻れないことを充分に意味するものであった。しかし、彼は熟慮の末、命ぜられるままにこれを受諾する決意をしたのである。転勤への誘いは過去十数年の間に、度々あった。しかしこれまでは一度もこれを受ける気持が湧かなかったので、拒否し続けて来たのである。ところが今回に限りこれを受諾する決意に至ったのは、次のような内奥の心の声を聞いたからである。

「自分の果たすべき使命も終りに近づいた。間もなく人類が迎えんとする『世の終り』と、『新しい世の誕生』の時は、地球の古い迷妄の殻を破り、ニセモノとは離別し、過去の

地球との縁とゆかりを断つ時である。それは人類が決して避けて通ることの出来ない道であり、『離託』を迫られる厳しい道である。その『離託』の型を示す時が来た。」

一九六一年に教示(サナンダ様より)されたことを思い出す。

『ワンダラーは、『離託』の運が与えられております。』

ワンダラーは、『離託』の手法を示すのだ。長年住みなれた地にも、親兄弟からも、親しい心の仲間達からも。また、この十八年間、W氏とは、陰陽の立場で深い強い糸で結ばれ、苦楽を分かち、互いに助け合って役を果たして来た。それは肉身以上のものがあつた。そのW氏とも別れて、唯一人で行かねばならぬ時が来た。天は自分に、『離託』を教え、この試験に打ち勝つ課題が与えられたのであると自覚したのであつた。

その時、T氏からS氏に大要次のような手紙(メモ)が手渡された。

「仕事(ワンダラーの役目)が進むにつれ、従来のパターンを、意識の中から掘り下げ、抜けて行かないといけない場合があります。」

陰陽の役(今までW氏とS氏がこの役をしていた。)は大切な役割だと思えますが、固定した固まりではなく、自由に抜けてみたい。天の神様が陰陽を超えておられるように、金星の考えの進んだところでは、男女、陰陽の学びから卒業して進んで行かなければなら

ない段階があると思います。この意識の上で、囚われた陰陽を超えた本当の男女、陰陽の意識の世界があると思います。金星で出来なかった勉強を地球でさせて頂いているのだと考えます。

九州への転勤の話、貴兄の素直な心の転換というか、「離託」の早さは電撃的でありました。陰陽の役が必要でない時期となったのか、新しい意識のステップが必要なのかは判りませんが、とにかく、新しい展開に來たことは事実でしょう。

私は知っています。私が一つの力で働く時、神様はそれに沢山の力を与えて、なして下さることを、意識を向けるにすぎなかったと思う程の小さな私の力に、神様は待ちかまえていて下さったように、沢山の手を貸して下さるのです。

九州行きの話、行ってもよし、行かなくてもよし。私は意識の転換（離託）と拡がりのために必要だったのではないかという考え方をしております。すべてを自然にお任せしてみると、答はいずれ出ますよ。」

S氏は過去を振り返り、幾度も考えた。神を完全に信じ切り、まかせ切ることが出来て初めてワンダラーの役を果たし得て、事態は一步進むものであったという事を……。今、正に新しく事態が一步前進せんとする時、「離託」の決意こそ新しい世界への動きの契機

となる意識であると理解し、転勤を受諾した。

しかし、少し日を経るに従い、彼は自分の離託がまだ不十分であるのに気が付いた。というのも、離託したはずなのに再び悩みはじめ、のんきさを失い、色々と考えをめぐらすようになってきたからである。それに加えて、転勤先の複雑な事情がどんどん知らされて来る。彼は悩みながら、再び真剣に「離託」の本質を模索し続けた。

「神を信ずるといっても、人々は、自分という人間を確立させておき、神との間に距離を作って、偉大なる対象として信じているのだ。だから、神の御手がおのれの自我にまで及ばないように、自分の心の世界で垣根を作っている。そして、神からの働きかけがあっても、自分に都合の悪いことは容易に受けつけないようにしている。その根底にあるものは、「未来に対する不安」である。」

未来に対する不安は即ち、神に身を託することへの最後の不安である。このように考え続けると、のんきさの心は乱れて来る。そしてついには、「天の神様に本当に完全にまかせ切っても良いだろうか。まかせ切れるお方であろうか。」という思いへと発展して行くのである。

しかし思索は、まだまだ続く。その思索は、すさまじいライマカタとなっていった。その心には、神様に、「完全にまかせられる方だという証拠を見せろ」と刃を抜いて迫って行

く自分の姿があったのである。彼は思索しながらその凄まじい自分の姿をかえりみて、これが歴史の中にみられる今まで地球で作られて来た地獄絵図であり、その起因はここに在ったのだと判るのであった。

彼は、今までの地球は各々が自我慾のままの世界（自分の都合の良い世界）を身の廻りに築こうとして、互に押し合っているのだということに気付く。今のような苦しい世界から脱しようとするならば、「我」を捨て去るより他に道はあり得ない。そして、その道こそが「離託」なのだと判るのであった。

神の世は、神のみ心のままの世である。我がない世界を迎えるのである。ワンダラーに我があって、神への全託なくして、どうして神の世の扉を開くことが出来よう。これらの事は、今までも度々語り合い、もう既に熟知していたはずである。しかし、言葉、文字を通じてれば同一となってしまうが、彼は、この模索により、以前よりは更に深く理解し得たのであった。

このようにしてS氏は更に深い「離託」へと到達したのである。そして、自然の流れに任せ、のんきに全託し、平安に落着いて暮すことが出来るようになったのは、それから一ヶ月近くを経過した後であった。

五月一五日、転勤辞令の出る一日前、不思議なことに転勤命令は白紙還元となり、流れ去ってしまったのであった。

意識が変わるたびに、事態は変わるのだった。未来の予想は全くつかないし、まかせ切るより他に道はないと痛切に知るのであった。

‘有の世界’へ

五月一日、午後十一時、W氏は、我家のベランダに出て、美しく星のまたたく大空を久し振りに眺めた。最初は円盤を見たいという気持は全く無かった。しかし、暫く美しい夜空を眺めている内に、AZ様（サナンダ様）に祈りたいという心が湧き上がって来た。

「去る四月一四日、私は沢山の靈感を受けましたので、夜、天の神様に祈り、そのことをお願いいたしました。私のこの祈りは正しかったですか、正しい祈りでしたら、円盤を北斗七星の方向に飛ばせて見せて下さい。」

と大空に向かって、AZ様に祈った。（問いを発して円盤で答えをお願いしたことは、一九六〇年以来初めてである。）

待つこと十分くらい、東から西へ、北斗の中心（柄と桶のつなぎ目）を、鮮かなダイダ

イ色と青白色の二重の光跡を画いて、円盤は滑らかに、すべるように横切った。W氏は今までも数多く円盤を見ているが、その光跡は、円盤が進むにつれて消え去るのが普通であった。しかし、この長い光の帯は消え去ることなく、北斗七星と鮮かな十字架を画いている……。

だが、円盤が突如として消えると同時に、その長い光跡も、同時に消え去った。

「無の世界」から「有の世界」へ通ずる扉は開けたのである。これまでは、長い期間に涉って、この肉眼でも霊眼でも見えない「無の世界」で戦いが行われていた。しかし、この「無の世界」での戦いも、「世の終り」の成就と「神の国誕生」の成就で、ついに終りを告げたのである。

いよいよ、「有の世界」での聖戦は始まったのである。「有の世界」の聖戦がどのようなものであるかは全く判らない。だが、不可視の「有の世界」の聖戦を経て、やがて可視の「有の世界」の「形の世界」に聖戦が移行することは間違いないのである。

これが、徐々に来るか、急激に来るか、どんな姿形をもってやって来るのか、それは判らない。しかし、その時は確実に来ることだけは間違いない。

「オйкаイワタチ」本書の終章（P 209）には、次のように記述されている。

『——しかるのち、現象界、靈界ともに（形の世界を指す）浄化が始まるであろう。そのためには、人類は様々な苦しみを通過せねばならない。地球上には各種の大混乱が発生し、その姿形は凄まじいものとなるであろう。（これ以上のことは語り得ざることであり、読む者悟れというより外はない。』

「カルマとカルマが互いにつつかり合って、凄まじい姿で、共に朽ちて行くのを見ることがある。」

「地球の過去のカルマは、終る時（形の世界の「世の終り」の戦いの時）は、みな目の前に現われます。」（地球の過去のカルマがいかに物凄いものであったかを知るであろう。）

「世の終りの厳しく変化した、惑星の今回は、今までに見られなかった、地球がレタマヤ（神の大愛）の世の終りを迎えるに至って、みな節度をよく考えて、魂の礼儀をもって迎える。」

主の従える神々が降り給い（有の世界へ）、地球を讚美し、人々の魂を救い、人々は礼儀をもって神の国の近づいたことを知り、死（肉体の死）を迎える。」

あとかき

先に発表した「オイカイワタチ」（本書）は、一九五八年から一九七五年までの約十八年間に渉るワンダラー、オイカイワタチの使命と聖戦の経過を述べたものであるが、資料の莫大さに比して紙数が限られていたため、いきおい全体を通じて抽象的な記述とならざるを得なかった。しかし今回のこの別冊は、以後のオイカイワタチの働きを発表可能な限度においてある程度まで具体的に述べたものであり、期間としては、一九七五年四月から一九七六年五月初めまでの約一年間のことが中心となっている。

このように、本書と別冊とはある意味では対象的な性格のものであるが、にもかかわらず両者に共通するのは、「無の世界」における展開と進行とが述べられているということである。したがって、「無の世界」を正しく理解することは、本書、別冊を通じてその奥底に流れている私達の真意を汲み取っていただくための、重要なカギとなるであろう。

しかしながら、「無の世界」のことを、現界の限られた言葉と文字をもって表現することは不可能である。むしろ、本書、別冊において述べられている数々の言葉や事件から直感していただくより仕方がないであろう。したがって、矛盾した言い方ではあるが、本書、別冊の真意を汲んでいただくことによって、「無の世界」を正しく理解し、その「無の世界」に対する正しい理解をもって、本書、別冊を貫く私達の真意を汲んでいただきたいと願うするよりほかはないのである。

編者の私自身も、これまでに「本書」「別冊」共に数え切れないほど繰り返し、読み返しているが、その都度、新しい目覚めと、深い自覚を得て、私自身の助けとなっているのである。

「形あるものは、形なきものの影である。」という言葉がある。これを、「有の世界」は、「無の世界」の影である。」という言葉に置きかえることもできよう。しかし、ここで注意せねばならないのは、私達のいう「有の世界」とは、現界、幽界、霊界をその中に含むということである。つまり、私達は、世間一般でいわれる幽界、霊界を「形なきもの」としているのではないということである……。現界の言葉、文字をもって幽界、霊界を記述することすら中々困難といわれているのに、ましてや、「無の世界」のことを表現するのは、至難のわざであろう。

願わくば、行間に流れる真意を、真の心で、真の魂で判っていただきたいと切に望む次第である。

地球の大周期と大変化、即ち「世の終り」と「新しい世の誕生」は、ある日、ある時に突然形となって現われて来るのではない。これらは、*無の世界*で完全に創られ成就してから、*有の世界*に成り、のち「形の世界」にその姿を現わすのである。

たとえば、映画のことを考えてみよう。（この例は、適切とはいえないが良き例が見当たらぬので……）私たちは、映画館に入って映画を見る。スクリーン上に展開し、進行する光景を見ながら、喜び、悲しみ、怒り、快さ等、さまざまな感情を覚える。しかし、このようにしてスクリーン上に映し出される以前に、実はもうその映画は製作されてしまっているということに注意していただきたい。私たちの知らないところで、さまざまな工程と、原作者、脚本家、監督、多くの俳優、裏方等々の沢山の人々の働きを経て、そのフィルムは既に製作されてしまっている。しかし私たちは、そのフィルムがスクリーン上に映写され、形となって現われてはじめて、その映画を眼で見ることができるのである。

同じように、*無の世界*で成就された映画フィルムは、地球の「形の世界」というスクリーンに映写（移写）されることによって初めて私たちの眼にその姿を現わすであろう。

これから、*有の世界*でこれらが成り、そのあとで映写（形の世界）が始まるのである。

多くの人類がこの映画を見て、過去の地球の、人類のカルマがいかに凄まじいものであったかということ、自らの目で、身体で、心で、体験するであろう。そして人々は、地球が、人類が、驚くべき重大な時期に到達していることに気付くのである。

それは、凄まじい姿形で人類に迫ってくる。もはや人類は逃げることもできないし、逃げる場所もない。過去のカルマは、ニセモノは、大きな音を立てて崩壊して行くであろう。自然現象からくる大変動と人為的な大混乱の発生……この大変動と大混乱を人類は身に受けて、人間と地球の真相を学びとり、神の国の近づいたことを知るに至る。金、物、権力、こうした今まで頼っていたものすべてが頼るべき真物でなかったことに気付き、頼るすべ、を神様におくようになるのである。こうして人々は、ニセモノの地球から、*離託*してゆくであろう。

多くの人類は、*真物*に目覚め、神様の最愛とまこと、に目覚めて、過去の迷妄の肉体を脱ぎ去り、新しい世へと移行してゆくのである。

いよいよ、*有の世界*での聖戦が始まった。*無の世界*から、*有の世界*へと通じる扉は開かれた。ワンダラー、オイカイワチは、これからは、*無の世界*と、*有の世界*

の両方であって、与えられた役を果たしてゆくであろう。しかしその役は、前もって知らされているわけではない。今までもそうであったように、何をなすべきかは、その時に至って初めて判るのである。

私達に判るのは、事態は着々と進行しているということである。この進行のさまを、私達の仲間は垣間見ることがある。その記録が私のもとには沢山寄せられているので、残った紙数でその中の一、二件を取り上げてみることにした。

二月一九日、未明、高知のN夫人、あることを象徴する次のような意味深い夢を見る。

「私は赤ちゃんを抱いていました。ハダカの赤ちゃんです。どういうものか、苦しそうにするので、お尻に手を当てると固いのです。そこで撫なでてやると、始めは白い卵のような便が二個できました。続いて、どんどん灰色のような便がでて、最後に真黒な便がどっさりできました。その量の多いこと、赤ちゃんの身体の半分もありました。

『よかったですね。』

『これでよくなります。』

と誰かがいっています。自分の傍にいる人も皆、自分の中に詰っている汚いものを出してしまいました。』……………続いて……………

「空の高い所に、三角形のような形をした真白な雲が湧き出て、その真中に、裾まで垂れた真白い衣を着た大変にご立派な方が立っておられる。前にも拝したお方と同じと思えるのです。」

三月四日、未明、高知のN夫人、夢の中で、美しい暖かいものに抱かれる感じがして目を覚す。——すると一つの光景が極めて明瞭に心の目に浮かんで来た。

「以前拝した、あのお方が立っておられる。空の高い所で白い雲三角形に乗って立っておられたお方である。天なる父よ、とお呼びするのがピタリする、あの懐しい、慕わしいお方である。かつて、我々が地球に降りて来る時には、あのお方のお前で誓って来たのだ。そのお方は、大勢の方々を従えて高い所から降りて来られた。遥か彼方に明るい道がいつまでも続いている。

『宇宙への明るる道が開けました。』

と声が、宇宙に響き渡るのであった。」

五月二八日、午前五時、名古屋市のN夫人は、次の光景を靈視する。

「我が家にいると、窓が開けなくなった。前方を見なさい、と何者かに言われてい

るように思えるので、静かに窓を開けた。ところが前方には、今まで自宅の前にあったとは全く違った景色がひらけていたのである。

前方には大海原があった。なんとも表現しがたいほど綺麗で荘厳な緑色の海原であった。大海原のむこうには陸地があり、山々も見える。眼前に展開する大海原の果てには、巾広い明るい帯状の色とりどりの美しい道（このようにしか表現しがたい）が海原から天上にまで続いて開けている。この道の左右は、美しい天空である。

目を、天に続く道に向けると、海原からやや上空に上がった処に、約五〇名位の人達が道の中に点在して、何かの準備をしているようである。丁度、間近に始まる本番を迎えるための準備をしているように思えるのである。この画面は暫く続いたが、やがて、画面は転換する如くに、これらの人達の姿は自然に消え去るようになうすれて行き、再びもの、美しい色とりどりの天空にとどく道だけになったのである。

目を更に天空に向けると、天空に浮かぶ白い雲のようなものに乗って立っておられるお方が見える。そのお方は、高い天空から段々と近づいて来られた。真白い衣を裾までまとわれ、顔型もハッキリと判る。大きく明瞭に見ることができるのである。そのお方は、何とも表現しがたい、暖かい、柔らかい、力強い、まことに神々しいお方である。右手を高く挙げられ、その手には十字架を持っておられる。その時、イエスキリスト（サナンダ様）

だと思った。

そのお方の後方の左側の天空に、もうお一人の白い衣を裾までまとわれたお方が立っておられたが、そのお方のお顔をハッキリと見ることは出来なかった。

天空に立たれたそのお二人から下に広がる海原の間には、また別の美しく荘厳な、光のようなものがつらなっているように思われた。

海原は、何とも言えない程に美しく輝いている。そして、この海原に、イエスキリストの右手に持たれた十字架が写されたのであろうか、大きく、白い、十字架が一面に浮かんだように明瞭に輝いて見えるのである。

それは美しい海での、夜の景色の様であった。」

七月二二日、朝六時三〇分頃、N夫人は次のような象徴的啓示を見せられた。

「N夫人は、ある山の中腹から空を眺めている。その空のある一点を注視していると、天空に円盤の形をした雲が浮かんでいるのに気が付いた。その雲の中心の一点に黄色く輝くものが現われ、それは次第に輝きながら大きく広がって、ついには円盤型の雲よりも更に大きくなったまま光り輝いている。暫くそれを眺めていると、その光り輝くものが突如姿を変えた。それは、実に可愛い男子の赤子に変わったのである。その赤子は横に寝て

いる。横たわる赤子の腰から足先にかけては、黄色いフラフープのような輪で包まれていた。暫く見ていると、その黄色いフラフープの輪のようなものが突如くると向きを変え、腰から頭の方を包むように移動した。すると、とたんに赤子の上半身は起き上がったのである。その瞬間……

「生まれ変わったのだ！」

「地球は新しく生まれ変わり！」

と直感したのであった。

そして、そのとても可愛(注地球を意味するものであろう)い赤子はとんとんこちらに近づいて来たのであった。」

八月一二日、午前一時、滋賀県のK・N氏は意味深い靈感を受けた。

彼は、一〇日頃より風邪にかかり、三日間、会社を休み床に伏せて休養を取ることになった。

これは、日頃の激しい社会の動きと、会社での激務からの心と身体の疲労を癒してくれる良き助けとなる日々であった。

彼は床に伏せたまま今日までの種々様々なことを想起しながら心と身体を休めた。

一日の夕方頃より心も身体も軽くなり、やがて、心の奥底よりなんとも表現しがたい

喜びと感謝の心が湧き上がって来るのであった。この心と感情は時間を経るに従い強くなってきた。

この、心の奥底より湧き上がる感謝の心と喜びの心が、やがて、祈らずにおられない衝動となって、東の空に向い、感謝の祈りの合掌をしたのである。丁度、一二日午前一時であった。

東の空はどんよりと曇っている、その雲間を円盤が一機、彼の感謝の祈りに答える如く鮮かに飛び去るのを目撃した。

その瞬間、彼の心と身体は、なに者かが通り抜けたようにスーッととして、まことに清すがすがしい感情にひたったのである。

その時、彼は、真の魂から湧き上がる靈感を感じた。

「N(彼の名)は、新しい世に、既に生きていたのである。」

九月二十七日、未明、N氏次の光景を霊視する。

「月も星も輝かない暗闇くらやみの夜である。円盤のものすごい大編隊が大挙して天空に現われた。その大編隊は、上段、下段の二段の帯状をなして天空を通りすぎ、急にスピードを速めて、アッと思う瞬間に消え去ったのである。」

次の瞬間、場面は転換した。
見渡す限りの全地上から無数の円盤が、天空に向って次から次へと飛び上がって行くのである。

地上を見ると、そこには暗闇でも良く判る、平地あり、山あり、谷間あり、島あり、そのいずれの場所にも、光体となった人間がいる。その光体の数は実に無数といえるだろう。その光体はすべて人間であることが良く判るのである。その光体は、地上に飛来した円盤に乗船している。やがて円盤は地上を離れて天空に向って飛び上がって行くのである。その円盤の数たるや実に無数といえよう。

地上で人口の多い場所と思われる所では、光体は数多くある、その光体はつぎつぎと、飛来する円盤に乗船する。円盤は打上花火の光の線のようにほとんど地上を離れて天空に飛び上がって行く。人口の少ない山々、谷間、島では、光体は近くに着陸している円盤に向って集まって来るのがよく見える。全員が円盤に乗船する。

かくして、円盤は全地上から天空に向って物凄いスピードで飛び上がって行く。それは地球の全土で行われていることが判るのであった。

そして、人類は一人残らず円盤に救助されるのであった。
これらの一切の行動の中で、だれ一人として、あわてる者もなく、また混乱もなく、軽

ろやかに、しかも極めて早く、まことにスムーズにその救助は行われたのである。」

N氏はこれを目撃して、「これで全部終れり」と強く感ずるのであった。

(註九月二十七日項のみ、あとがき、校了後に挿入した。)

これらの記録から、これが何を意味しているかは、各自で考えて頂きたい。

私達の申し上げられることは、これから先に起こるいかなることも、すべてが「新しい世の誕生」のための大御業であるということである。神様の涙の愛の大試練であるということである。

かくして、人々は神の子への自覚に至り、全人類は一人残らず救われる。これは現界、霊界を通じていえることである。地球という遊屋自体が一進化を遂げるのである。地球の波動数が上がり、愛と調和に満ちた、喜びにあふれる神の世が誕生するのである。

これは神様の久しく待たれた「約束の時」である。また神様の「み心」でもある。

このことが判った時、私達全人類は、天の神様にどれ程に感謝しても、まだ足りないことを知るであろう。

「人類の苦しみを見て涙して泣く、ワンダラーのまこと、この心」（S氏の靈感）

「ワンダラー全員が、愛の心で一つに結ばれた時、地球は黄金に輝きわたり、その時、主はおり給う」（51・2・21、K夫人テレパシーを受く。）

これを全国のワンダラーの方々に捧げて、”あとがき”とする。

最後に、別冊発刊にあたり、沢山のご協力を頂いた多くの仲間の方々に、そしてこの印刷のために親切な援助を下さった加納夫妻に感謝申し上げます。なお文中には、新・旧の送りなが混じっていることをご了解頂きたい。

一九七六年八月三一日

編 著 者

オイカイワタチ 第二卷(別冊二)



善

月
未来への使命を思ひ
つぎに何をすべきか
何をどうするか
今宵も又
月の光を見て
何を待た

善

目次

第一章	天の神様、この地球に降り給う……………	5
第二章	新しい世の王を頂 ^{きみ} く……………	29
第三章	エクアドルの戦い始まる……………	68
第四章	フィナーレの儀式……………	83
あとがき	……………	116

第一章 天の神様、この地球へ降り給う

一九七六年
昭和五十一年五月頃から暫くの間、ワンダラー達は、それぞれが、静かな流れの中でテレパシーを、靈感を受けての生活をすごしていた。

しかし八月半ば頃より、再びワンダラー達の集る時が来る、それは大切な儀式であるという思いが仲間の方々の心に起こって来たのである。

名古屋のN夫人も「また、みんなが集まる時が来る。」との靈感を八月二十一日に受けた。

その集まりが、いつ、どこであるのか、また、その目的が何かは判らないが、ワンダラー達は、間もなく大きな儀式が始まろうとしている事を、なんとなく直感するのであった。そして、その頃より（八、九月に入ってから）再び、ワンダラー達の交流が自然に盛んになり始めたのであった。

九月に入ってから、S氏は「湧玉」についての靈感を多く受けるようになった。湧玉のことは「オイカイワタチ」本書にも述べられているが、彼には、靈感を受けると共に湧玉について考える日々が暫く続いたのである。

「天と地をまことで結ぶ処、これが湧玉。私は湧玉の中にいた。心の中に湧玉があった。湧玉は地点であるが同時にまたすべでももある。

地球は玉である。地球全体が湧玉の地である。

湧玉を通じてワンダラーは結び付かねばならぬという気がする。

天と地を結んで、湧玉は神様のおみえになるところ。

湧玉を通じて宇宙（神の世界）は連らなっている。

湧玉はまこと、の泉である。まことを通じて神様は働かれる。

ワンダラーが湧玉を守り通さねばならない理由はそこにある。

神様が世界を語られる唯一の根元はまことである。

自然と生活は、神様の語らいの場である。」

「湧玉のまことに目覚める事がオイカイワタチの目覚めである。

湧玉に、湧玉のまことに目覚めたワンダラーが集う時、主はご降臨下さるであろう。」

(注) S氏がW氏にこれを語ったのは十月二十五日であった。)

八月半ばのある日、N夫人の心中には、昭和五十年十月二十七日未明、夢の中で八ある神社へお参りに行ったV時^{昭和五十年}のことが浮かび上がって来るのであった。そして、昨年の夢での約束を現実を果たす時が来たと強く心に思うのであった。この思いは日を経るにつれて強くなり、ついに確信にまで達したのである。

しかし、約束の神社は、一年前、夢に一度見ただけである。そこは「熱田神社」といい、「神宮」ではない事だけが確かであった。普通ならば、果たして現実に存在する神社なのだろうか、もし存在するならばそれはどこにあるのか……とだれもが一応は疑ってみることであるにもかかわらず、夫人は、素直に深くこれを確信するのであった。

九月の中頃、仕事で来合せたある人に、N夫人は「熱田神社」のことを聞いてみたいと思つた。なぜか、そう思つたのである。この事を他人に聞くのは、今回が初めてであった。

するとその人は、「熱田神社は大府にありますよ、私はそこから通っているのです。」と語つたのである。そこでN夫人は、昨年からの約束である「熱田神社」へお参りする日時を、九月二十三日と心で決めたのであった。

九月二三日、N夫人、熱田神社の神前に額突き次のごとく祈る。

「天の神様（宇宙最高神 宇宙創造神）が、この地球にお降りになられる時が来ます。どうか地（球）の神々様にはお迎えの準備をして頂くようにお願い致します。」

そして、この祈りを終えたあと、N夫人は一ヶ月以内に再度ここにお参りに来る必要ありと直感するのであった。

ちなみに、熱田神宮には、この地方の方々が語っておられるところによると「地（球）の神様」がお祭りしてあるとのことである。

九月二十七日、未明、N氏、円盤の大編隊が地球に飛来して人類を救助するさまを霊視する。（註）「オイカイワタチ別冊（一）」P 101 102を参照）

一〇月一四日、午後十一時五十分、N夫人は、今回の「熱田神社」参拝の日を、十月二十三日と心で定めた。そして、この時に「祈る内容と心」について考えをめぐらしていると、八月が見たいVと思う心が湧き上る。

夜空の月を眺めていると、月の下に浮かぶ雲がある。そしてその雲に『おわり』とハッキリ判る文字が浮んで見えるのであった。しかし、N夫人には、この意味が十分に理解し

かねたので、更に深く考えを続けていった。

その時、次の光景が夫人の心の中に浮かんで来た。

それは——昭和五十年昨年八月三十一日、W氏宅にワンダラーの代表七名が集まり、（無の世界）地球大浄化の大御業を天の神様にお問い合わせする。お祈りをした時の光景——であった。

これによって、今見た『おわり』の意味を理解したのである。

「天の神様をこの地球にお迎えして、地球の大浄化と、神の世の誕生の最後の御業をして頂くのである。そのための準備を地の神々様（熱田神社）にして頂くように……。」
お願いに行くのであると直感したのである。

同日（一四日）、N氏、仕事の途中、車は偶然にも素戔嗚神社の前を通った。その時、なぜかお参りしたいという心が湧き上がった。彼は神前に額突いて次のとおり祈ったのである。

「どうぞ、あとの事はすべて天の神様にお任せして、この地球へ天の神様をお迎えする準備をして下さい。」

一〇月二〇日、午後十一時三十分。N夫人は円盤を目撃して次の如く感じた。

「十月二十三日再び熱田神社に行く。その時の心構えは、十四日に理解した『おわり』の意味の通りであり、それは決して間違っていない。」夫人はこのような深い確信を円盤から得たのであった。

一〇月二一日、終日にわたって次のような靈感がN夫人の全身を包む。

「いよいよ地球大浄化の時が来た。」

同日(二一日)、N氏も勤務先での仕事中に、「いよいよ最後の地球大浄化の時が到来した。」と直感する。

一〇月二二日、Y氏、世の終りに関すると思われるひとつの夢を見る。

「私は、以前(一九六〇年当時)私達が住んでいた家にいました。すると、そこへ、宇宙の方々から通信があったのです。」

『始まります。外へでて空をごらん下さい。』

外へ出ると、夜空には満月がくっきりと浮かんでいましたが、突然、その満月が三重にぶれたようにゆれうごいたかと思うと、ぐんぐんと大きくなってきます。見ているう

ちに満月の直径は十倍になり、二十倍になり、肉眼でクレーターなどが見え始めました。それと共に地球の方にも大地震が起こり始めたのです。」

一〇月二二日、W氏は高知市のN夫人より次のような内容の手紙を受け取る。

「昨日(二〇日午前二時)、重要と思われるテレパシーを受けましたので報告します。

「さあ、最後の準備を始めましょう。」

その時受けた靈感から、最後の準備とは、神様の降りられる準備であること、場所は富士山に関係のあること。

いづどんな形になるのか全然わからないのですが、また何をするのかも判らないのですが、余り遠くない日、富士山へ行かなければならない様に思います。富士山が呼んでいる様な気がするのです。」

このN夫人の手紙は、かねてからW氏の心に画かれていた絵を極めて明瞭なものとならせ、自信を深めてW氏の決意を促がす大きな助けとなったのである。

その決意は次の通りであった。

(1)ワンダラー達の集まる時が来た。

- (2) 天の神様をお迎えする儀式の日を、十月三十一日とする。
 (3) 場所は、富士山の湧玉の池。

同日（二二日）、W氏は名古屋のN夫人より明二十三日、再び熱田神社に参拝に行く旨の電話を受けた。W氏は夫人に、「勇気を持って、使命を大切に果たされますように……。」と語り、あわせてワンダラー達の最後の重要な準備をなすべき時が来たことを申し添えたのであった。

一〇月二三日、N夫人は早朝から柔らかい靈感に全身を包まれ、次のような思いが湧き上がって来るのであった。

その1 地の神々様（熱田神社）に、天の神様のお迎えのための、最後の準備をして下さるように、今日はお願ひに行くのである。

その2 ワンダラー達にも、最後の準備をする時が到来した。

- ・ワンダラー達の集まるべき時が来た。そして最後の準備をするのである。
- ・その準備とは、天の神様が、この地球にお降り下さる事に関係がある。
- ・その場所は、富士山の湧玉の池である。

N夫人は昼食をすませ、熱田神社に行くべく家を出た。そして、今朝からの受けた靈感について考えをめぐらしながらバス停に向って歩いていった。すると、突然上空に、昼間ではあるが、鮮やかな色と光を放って円盤が飛び去るのを目撃したのである。この時、N夫人には、「この考えは正しい」との確信が与えられた。

それから、夫人は全身に降りそそぐ次のような靈感を味わいながら目的地に向った。

・ワンダラー達の役目は、天の神様がこの地球にお降りになられる、そのお迎えの準備をすることである。

・その準備をする方は、湧玉の池に関係のある方々である。

・その方々はすべて行かれるべし。

・昨年八月三十一日W宅に集まり、天の神様^{ねかす}に祈られた方々は全員富士山の湧玉の池に行かれるべし。

N夫人は熱田神社に額突^{ねかす}いて次の通り祈った。

「この前（九月二十三日）ここに参りました時は、天の神様がこの地球におみえになられるための準備が行われまして有難うございました。

いよいよ地球大浄化の時が来ました。地球最後の浄化の大御業が行われますように、

地の神々様のご準備をお願い申し上げます。

私達ワンダラーは富士山の湧玉の池に集まり、天の神様をお迎え致します。

どうか、地の神々様、天の神様がおみえになりました時、共に地球の大浄化の御業（みわざ）をして下さいますようお願い申し上げます。」

この日（二三日）、N氏は再び素戔鳴神社に行きたい衝動にかられるのであった。彼は素の儘に行動しようと思いい神社に向いた。そして、次のように祈ったのである。

「須佐之男命様、今日までの長い間、本当にご苦勞様でした。あなた様のお役の終りの時が来ました。

今までは劍（つるぎ）の御世でしたが、こんどは鏡の御世と成ります。鏡の御世と成るために、天の神様がこの地においで下さいますので、須佐之男命様も、天の神様をお迎えする準備をして下さい。今日はこの事をあなた様にご報告するためにここに来ました。」

一〇月二五日、夜十時頃、W氏は我家のベランダに出て、最近ワンダラー達の動きが再び活発になって来たことを思いながら夜空を久し振りに眺めていた。

湧玉の池での重要な儀式は十月三十一日と決められ、その人選もほぼ内定された。二十

七日にはワンダラー六名が集まり、これを正式に決定する運び（はて）となっていたのである。

そして今夜は、この重大な儀式に関しての日取り、人選に誤りがあってはならないと強く考えた為に、W氏はいいに円盤にこの回答を求めようと思ったのであった。

彼はAZ様（サナンダ様）に次の如く伺ったのである。

「来る十月三十一日、ワンダラー達は富士山の湧玉の池に集まり、天の神様のご降臨をお願いし、お迎えする儀式を行います。この儀式は神様のみに心になかった正しい儀式でしょうか。こと重大でありますのでお伺い致します。

正しければ円盤（なまら）を滑かに、すべるように天空に飛ばして下さい。誤りでしたらパツ、パツと爆（は）ぜるような飛び方でお示し下さい。」

待つこと三十分くらいすれど円盤現われず。いつもは十〜十五分間くらいで現われるのだが、不思議という外はない。と思いつながら尚暫く夜空を眺めていると……彼の口より突如湧き上がるように出て来た言葉があった。その言葉は、

「正しくもあり、正しくもなし。」

その瞬間この言葉を肯定するように円盤が一機、先に指定した二つの飛び方とは全く異なる飛び方で現われたのであった。

彼は明確なる回答が得られなかったことを残念に思いながら自分の部屋に戻った。する

と瞑想に入りたいという感情が湧き上がって来るのであった。

静かに瞑想に入ると、再び彼の口より湧き出る言葉は……

「正しくもあり、正しくもなし。」と繰り返している。そして、この言葉は次第に次のように変化してゆくのであった。

「何うべき事にあらず、実行すべき事である。」

「ワンダラーは靈感のまま実行に移すことである。」

「ワンダラーの進む道を、靈感に従わないで、実行をしないで、何うような事で……ワンダラーの使命がどうして果たせようぞ！」

「実行し、役を果たした後に初めて答えられるものである。」

「円盤で証あかされて、それによってワンダラーは実行するのではない、ワンダラーは靈感のまま実行したあとに初めて証あかされる事である。」

「今夜の行為は、天の神様に、A Z様に、極めて礼儀のないことである。ワンダラーとして最も恥ずべき悲しい行為である。」

と心でハッキリと判って来るに従い、「天の神様」と「A Z様」を追いつめ苦しめた事が判り、誠に申訳なく、お詫びの言葉が心の底より涙と共に湧き出て来るのであった。

心ゆくまで詫びたあと、彼は清すがすがしい気に満ちあふれて……

「勇気が全身に漲みなぎりわたった。」

来る三十一日の儀式と人選に誤りはない。あとは大切に実行あるのみ」と強い自信と確信が全身に湧き上がって来るのであった。

一〇月二十七日、午後八時、O氏、S氏、T氏、N氏、N夫人、W氏の六名集まる。

「来る十月三十一日、富士山の湧玉の池にて儀式を行う」ことに全員が一致して正式に決定された。心を新たにしてこの決意を全員が改めて深めたのであった。

ここに「天の神様」をお迎えするための最後の準備は整ったのであった。

一〇月二十八日、(儀式の日が来る三十一日と決定八二七日夜Vされた、翌二十八日。)夜半すぎから降り出した雪は午前中に富士山の全部を覆いつくし、富士山は裾野まで真白と化したのであった。きけば、富士山の測候所開設以来はじめてという大雪であったという。

自然は、天の神様の降り給う富士の山を全山大雪で清めて、天の神様をお迎えする準備を整えたのであった。

一〇月二十九日、Y氏、
一日中、何か特殊な、清冽とでもいふべき感情に包まれたのである。

話は少し前に戻るが、十月半ば頃、あるワンダラー（SU氏）からS氏に、ある光景を
霊視した報告もたらされていた。

「今日は（その日の）二日前です。この日は大風の吹き荒れた一日であった。」

「今日は（その日の）一日前です。この日は一片の雲もない快晴であった。」

（その日）とは一体、なにを指しているのでしょうか？

一〇月二十九日、（その日の二日前）

日本中に大風が吹き荒れた。特に日本海側の東北地方は風速三〇米を越す強風となり、
酒田市の大火を更に大きくしたのであった。

一〇月三〇日、（その日の一日前）

名古屋地方は朝から一片の雲もない快晴の一日であった。

この二日間の事が、SU氏が霊視した光景と関連するか否かは知らない。しかし、仲間

の一部には、「その日」を十月三十一日に当てはめるとするならば……とう、な、ず、く、者もい
たようであった。

同日（三〇日）、K夫人は次のテレパシーを受けた。

「さわやかな神様の愛によって、地球は救われる。神様の愛によって一緒に進んで行き
ましょう。」

一〇月三十一日、儀式（「霊の世界」の湧玉の儀式）の当日。

O氏夫妻は、東京より富士山の湧玉の池に向かって車で出発した。以下に紹介するのは、
O氏の手紙のままである。

——前文略——午前七時頃わが家を出発し、中央高速道を通って河口湖へ出、富士山
の北側を通って富士宮へ行きました。中央高速道の終点（河口湖の出口）近くで真正面に
富士山が見え、頂上の三角形の雲に気づきました。丁度、山が二つ重なったような感じ、
又は帽子をかぶったような感じでした。真白のふわっとした雲で、他には雲一つない晴天
でしたので非常にハッキリと、あざやかでした。あまり珍しいので二人共声をあげ暫くこ
の雲について話し合いました。

その時、彼女(註) O夫人)は心の中で、「天の神様が降りられるのではないか」と思ったのです。

高速道路を出て右へ曲り、車を進めていったのですが、左側に富士山が見え、雲は相変らず変化しませんでした。更に十分ほど進んだ頃は雲(三角形の雲)の裾が私達の方に伸びて来て、私達はその下に入ったような感じになりました。その頃、道端で十分ほど休憩しました。

(註) オイカイワタチ別冊(一)P97、三角形の雲について参照。

午前九時頃富士宮に着き、駐車して浅間神社へ行ったりしていたのですが、十一時三十分頃、空が曇ってきて黒い雲が早く走り、いかにも嵐が来そうな感じで、これは皆(名古屋方面の方々)が着く頃には一天にわかにかき曇り、大嵐になるのではないかと話し合いました。その後は雨も降らず天気も快方に向かい、皆さんをお迎えしたのでした。

——後文略——

一方、名古屋方面のワンダラー達は新幹線静岡駅にて乗換えた。身延線待つホームでひとときの一刻、十一時三十分頃、N夫人はホームから天空を眺めた。すると、天空は厚い黒い雲に覆われていたが、その雲間から光の三角形が天空に現われるのを目撃した。その三角形

の光の下に「すみました」と輝く文字で書かれてあるのが判るのであった。

しかし夫人は、湧玉の池での儀式が終るまで、これを語らなかつた。

先に到着したO夫妻の待つ富士宮駅に名古屋の一行が到着したのは、十二時四十分であった。O夫妻と合流して最初に浅間神社へ直行し、「木花開耶姫之神様このはなさくやひめ(金星での御名、テケル様)に今日の儀式が無事に行われますように……」とお願ひしたのであった。

この頃は、富士山は裾野まで厚い黒雲に覆われており、全くその姿を見ることは出来なかつた。

続いて一行は「湧玉の池」へと歩を進めた。そこは、浅間神社と比べて極めて静かな処であった。しかし一行が揃ってお祈りの出来るような適当な場所が見当たらない。その時、不思議な手順が我々を導いたのであった。

「湧玉の池」の神水の湧き出る源の場所(ここには柵さくが設けてあり、その奥に湧玉の池の神殿が造られている。)へ、私達を案内してくれる人が突如として現われたのであった。その人は柵さくを開け、神殿に近づき、その扉を開き、私達をそこに案内してくれたのである。そこ(神殿)は、富士山が出来て以来、富士山にある雪がとけて地下に浸透し、それが湧玉の池に泉となって湧き出る源みなもとである。この神殿の祠ほくらの中は、一人がようやく入れるくらいの広さである。岩間から神水がこんこんと湧き出ている。ワンダラーは交る交る祠に

入り、神水を口にふくみ、そして祈ったのである。この時、天の神様はお降りになられたと実感している者もあった。

「天の神様、この地球にお降り下さいまして有難うございます。有難うございます。」

N夫人はここでの祈りを終えた時、次のテレパシーを受けたのである。

「無事、儀式は行われました。」

この儀式が終ったあと、N氏は次のテレパシーを受けた。

「神様のさわやかな愛によって、この世の変化が行われます。」

一行の七名は、それから湧玉の池のほとりにそれぞれ腰を下して静かな一刻ひとときをもった。

この時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「この地球は新しく変わりました。これからは新たなる地球の儀式を行うが良いでしょう。」

「湧玉の池」にての儀式は無事に終り、私達は帰途についた。その頃には天候は全く一

変していた。富士山には一片の雲もなく、快晴の空に、神々しい、美しい富士の山の全姿が綺麗にクッキリと浮び出て、あざやかに見えるのであった。余りの美しさに全員は暫く声もなく眺め続けたのである。

その時(午後三時四十五分) N夫人は富士山の裾野すそのより円盤が上空に飛び上がり消え去って行くのを目撃した。

「私達も大切な任務を無事に終えて帰途についた。彼の円盤の宇宙人の方々も、我々同様に任務を果し終えて帰途につかれたのである。」と判るのであった。

この儀式に参加した方は、O夫妻、S氏、T氏、N夫妻、W氏の七名であった。

同日(三一日)、Y氏、

一日中、非常になつかしい雰囲気に含まれる。この雰囲気誘われるままに、近くの神社へ出かけた。実はこの日は天の神様を迎える重大な儀式が湧玉の池で行なわれていたのであったが、彼はこのことは全く知らなかった。

私達が今までも度々体験して来たことであるが、ある役を、ある儀式を果す上において、ワンダラーはその都度、それぞれの役割を受持つようである。その役割は、

- (1) その儀式に「気付かせる役割の者」
- (2) その儀式を「実施に移す役割の者」
- (3) その儀式を「果たした事を証しする、又は傍証する役割の者」

この役割は、その役、その儀式に応じて、その都度変ることもあるが、いずれにしても、この三者が渾然一体となって、役を、儀式を全員で果たしている事が判るのであった。

だれ一人も欠かすことの出来ない大切な役割が与えられており、皆が与えられた役を完全に果たすことによって、神様の御業が成就して行くのであると判るのであった。

一月六日、K夫人と高知のN夫人はW氏を訪れて、最近に受けたテレパシー、靈感と体験を語った。次は、三十一日に行われた儀式の成就を証しするその一例である。

K夫人には、十一月一日より四日まで連続して、心の底より喜びが全身に満ち溢れて来るのであった。そして、この喜びは四日に至って最高潮に達したのである。

夫人は、「偉大な儀式が行われた。これで絶対に安心であり、すべて完了せり。」と直感するのであった。そしてその時、次のテレパシーを受けたのである。

「今日の栄光を我が力と思うな。この陰には神のいとし子である高い魂を持った幾多のワンダラーがサタンの手にかかり、後足を引張られ、あるいはキズつきて地獄のさまに落

ちている。その屍は累々と重なっている。その方々の犠牲が今日に導いた陰の力であることを忘れないように……その方々に愛の心を向けよう。」

同時に次の光景を霊視した。

「ワンダラーの累々たる屍に神様が柔らかい青い霊波をかけられている、荘厳にして大愛のお姿を拝したのである。」

（匿名古屋のN夫人はこの日（六日の夜）、「K夫人と高知のN夫人が六日にW氏を訪ずれ翌七日富士山に行かれる事は、天の神様」がこの地球にお降りになられた事を両者（三十一日に湧玉へ行った七名と、十一月七日に行かれる両夫人）が、お互いに身をもって知り、確かめ合い、証しする大切なお役であり、お二人はこの役目を果たされに行くのである。」と靈感で判るのであった。

一月七日、K、N両夫人は湧玉の池と富士山の全姿が展望できる現地に赴き、お祈りをしたのである。

両夫人はこの現地での深い祈りの中で……「天の神様は、この地球にお降りになられた。」ことを、富士山を拝しながら身をもって確信するに至ったのである。その時、次のテレパシーを受けた。

「神様は愛をもって変動を徐々に進められます。」

一月四日、午後六時、N夫人は先月三十一日の大きな儀式のあと、初のテレパシーを次の通り受けた。

『神の愛によって、この地球は変わりつつあります。

このように変わりつつある姿を皆に知って頂きましょう。

そして神の愛によって皆さんも一緒に進んで行きましょう。』

一月一五日、来る十九日夜に十月三十一日湧玉の儀式に参加したワンダラー七名がW氏宅に集まることに決定された。これは儀式であると判るのであるが、今の時点では何の儀式となるかは判らない。しかし判る時が来るという確信はあった。

この儀式（十九日の会合）はまず東京のO氏の心の中で決められていた。それが他のワ
ンダラー達には靈感で判り、近く儀式が行われることを理解していたのであった。

一月一六日、W氏は、来る十九日の儀式について思いをめぐらしていた。すると十月三十一日に受けたテレパシーを思い出した。

「この地球は新しく変わりました。これからは新たな地球の儀式を行うが良いでしょう。」

来る十九日の儀式は「新たな地球の儀式」の最初に行う儀式であると理解したのであった。そしてこの儀式は……

「この地球の天と地が結ばれる儀式」（N夫人十一月十六日、このテレパシーを受ける。）と判るのであった。

一月一九日、ワンダラー七名集まり、午後八時四十分より儀式が行われた。出席者はO夫妻、S氏、T氏、N夫妻、W氏である。

先ずW氏は最近の経過と、十月三十一日に大切な儀式が行われるに至ったことと、その前後に起ったワンダラー達の様々な体験経過を報告した。そして十月三十一日の湧玉の儀式により、宇宙最高神（天の神様）は、この地球に降り給うた。ことを報告した。

O氏はこれ（報告）を受けて、「天の神様に、この地球にお降り頂いたことのお礼」を申し述べた。そして、O氏の唱導で全員が「天の神様」に感謝の祈りを捧げたのである。

そして、これからは、神様の愛によって、私達ワンダラーは、神様と共に一緒に進んで行くことを心に祈って行きましょう。」と互いに語り合ったのである。

また、「新たな地球の儀式」である今日の儀式は、「この地球の天と地が結ばれる儀式」であると皆で話し合ったのである。

以上のことがお互いに語りつくされて、全員心が一つに統合され、愛に結ばれてこの儀式は終わったのである。

ワンダラーの聖戦は、「有の世界」に移ったことは前述の通りであるが、別冊(二)において、これまで述べてきたこと、次に述べることも、新しい地球の「有の世界」の中の「霊の世界」での経過である。

(ここで述べる「霊の世界」とは、通常世間でいわれる霊界、幽界を指すのではない。)

第二章 新しい世の王^{きみ}を頂く

一月二七日、K夫人はW氏を訪れて、最近の体験を語る。

その1 次に示すのは少し前から現在に至るまでいつもK夫人の心に見え続けている儀式の光景であった。

「富士山のある場所に、裾まで垂れた白い衣をまとわれたお姿の「天の神様」と思われるお方が、西方に向ってお立ちになっていられる。その廻りにはワンダラー十数名が△の型を^{えが}き、やはり総員西方に向かって立ち並んでいる。そのようにして儀式が行われているのであった。ワンダラーは男性が十名、女性が五名くらいであった。」

註この光景の霊視は十一月二十八日午前中まで続いたが、午後に至って

消え去ったのである。この儀式は終わったのであろうと思った。

その2 K夫人は、最近殆んど毎日のように同じ靈感を受けていた。

「▽と△の原理が今まではバラバラに離れていたが、それが結ばれて☆の原理が解けた

とき、次の儀式が始まる。それは契約の半分の儀式である。」
 K夫人は意外な靈感のために、この意味を理解しかねていたが、今日（二十七日）に至りこれをW氏に語るべきであると決意して訪れたのであった。

これを聞いたW氏は、

「私には☆の原理と意味は良く判る気がします。つまり、☆と●とは表と裏、表裏一体、合せ鏡であり、表が裏になり、裏が表になるのです。新しい世の深い重大な意味はこの二つに含まれているのです。」

☆は契約の半分の箱であり、もう一つの半分の箱は●の契約です。☆と●が結ばれて契約の箱となり、儀式になると思います。」

と答えた。しかしW氏にもなせ、このような回答をしたのか判らなかつた。ただ、その時、そのように口から出たからであつた。

御後日に至り、これが大きく展開していくとは、その時には全く想像もしていなかつた。

「ユダヤ教においては、△は人から神に向う契約、▽は神から人への契約、両方が合さつて☆、神と人との契約となる、という意味に考えられている。」と後日Y氏が語つた。

一月二十九日、W氏は高知市のN夫人より手紙を受け取つた。次に示すのはN夫人の手紙のままである。

二十七日の夜はどうしても寝つかれなくて、富士山での事などを色々と思ひ返えしておりましたら、次のような不思議な光景を霊視し、テレパシーを受けました。

☆
 〰〰〰 ダビデの星がある場所を照らしているのです。

——頂度イエス・キリストの誕生の時、星がユダヤのベツレヘムの生誕の場所の上にとまり、光を照らしたように——

そのある場所は皇室●（神様の席の方のおられる所）らしいのです。

いよいよ結びの儀式の時が来ました。

偉大なる御魂とワンダラーの結びです。

心配はいりません、神様がなさる儀式です。

御偉大なる御魂とは、「神様の席の方」を意味するのであろう。その偉大なお方とワンダラーの結びの儀式の時が間近に始まりんとして、事を示し教えられたものと思われる。

この頃（十二月二日頃）、W氏は、滋賀県のKN氏より☆についての手紙を受け取った。「☆の意味ですが、△は地球を表わし、その象徴の富士山をも表わす。▽は天、天の神様、その意を表わす。そして合体☆が神の意になつた世界であり、世の中であり、天と地の結合であると感じます。

そして、この結合を基として、形として現われているのが◎であり、皇室であると思えます。」

一月一日、S氏は夜十一時四十五分頃、床に入ってから暫く種々に考えをめぐらしていた。その時、次のような声なき声を聞いた。

「天皇陛下は○○○なりになる。」

この声なき声は極めて深い印象となつて、翌朝に至るも心から離れなかつたのである。

一月四日、夜九時四十五分、N夫人は夜の天空を眺めなさいというような靈感を受けた。

夜の天空には、丁度反物を広げたように帯状のハッキリした白い雲が現われていた。広い天空一杯に、東から西へ、南から北に、長いこの帯状の雲がこの地球をクロスしてい

るような姿であつた。その時、N夫人は次の靈感を受けたのである。

『この地球は神様の愛に包まれて、いよいよこの地球をクロス（大浄化）する幕開けの儀式が行われます。』

その除幕式のテープのカットは、天の神様と神様の席の方がなさるのであると判るのであつた。

一月八日、夜八時三十五分、N夫人は十二月四日に目撃したのと同じ光景を見た。すなわち、再び夜の大空一杯に長い帯状の白い雲が、東から西へ、南から北にかけられて、この地球をクロスしていたのである。

この光景を暫く見ていると、東から西への長い帯状の雲はカットされて粉々に散つて行った。この時、

『除幕式（地球大浄化）のテープは切つて落とされました。』とのテレパシーを受けたのである。

N夫人はこのことをW氏に直ちに連絡すべきか否かと迷つた。年末までの仕事が山積して極めて多忙であつたため、少しの時間も惜しかったからである。だから仕事の一段落した時に連絡をしようかと考えた。

その時、N夫人は、心の中に、ドーンと「祝典の花火」が打ち上げられる音を聞き、その光景を霊視した。と同時に、心の底より喜びとうれしさが満ち溢れて来る。そしてこの喜びの最中さなかに電話機を取り上げてW氏に連絡している自分（N夫人）に気付いたのであった。それは夜八時四十分を少々すぎたころであった。

同日（八日）、高知のN夫人、次のテレパシーを受けた。

「天にも輝き、地にも輝く者を見る事が出来ます。」

その時、真赤にそまった美しい赤富士の姿が霊視されたのである。

「天にも輝き地にも輝くお方。」それは、真赤にそまった赤富士の姿で象徴され、新しい世の中心者を指すのであると判るのであった。その偉大な御魂とワンダラーの結びが始まらんとしているのを直感するのであった。

一月九日、K夫人は天の神様の愛の涙を直感し、次のテレパシーと光景を霊視して涙したのであった。

「エーテルのすき間から神様の愛の涙がしみ落ちる。

~~~~樹液したたが木の幹をしみて滴り落ちるように~~~~

天と地は新しくなり、喜びの歌に満ちているのに、羊の子ら（ワンダラー）は、あちらでも、こちらでも、背をむけて盲めしいている。」

一月一〇日、I氏は朝七時少し前に家を出た。日の出の少し前の時間であった。東方の山の辺はアカネ色に輝き、太陽が正に昇らんとする直前であることがよく判る。その時、彼は、東方の山から光の太い柱が天にまで届いているのを見たのである。その巾を少しも変えずにまっすぐに天にまで達している光の柱。その時、彼の心中には次の言葉が浮び上がって来たのであった。

「新しい御国が生まれる時、東の空に光る柱が立つ。」

この明るい輝く光の柱は数分間見え続けていた。そして、やがて太陽が山の辺から現われた時には消え去ってしまった。

一月九日、午後五時三十分。N夫人、夕餉ゆげの買物に行く途中、オレンジ色に輝いて飛び去る円盤を目撃。

夜九時三十分頃、N夫人はこの円盤のことを想い出して考えにふけていた。すると「月を見なさい」とのテレパシーを受けた。月は極めて明るく輝いている。

その時！

『今はよみがえりの月です。皆さんは愛の心を持って進んで行きましょう。』

銚月もよみがえったのである。

一月一日〜二日の三日間、N夫人は連続した霊夢を連日の未明に見た。その夢とは、次のようなものであった。

一〇日の夢。大変に大きな家が与えられた。(銚地球のことを指すのであろう。)その家の表は綺麗に清めてあるが、しかし、なかは大変に汚れていた。この家は広くて住み良いので、永住を決意した。そして大掃除を行わねばならないと思った。

一日の夢。地球の全地域に雪が降っている。天から降り注ぐ雪はさらさらと誠に気分の良さを感じさせる降り方であった。この雪は世界各国に降り終り、いよいよ日本であると思った。やがて日本中にさらさらと心地よい雪が降り落ちるのを見て「地球は清められた。」と感じたのである。

二日の夢。十日に見た大きな家の中は既に美しく綺麗に清められ、整理、整頓されて、その中で生活をしている。玄関が二ヶ所あって、その一つは一般に用いられ、ほかの一つはこれに関係する方々の出入口である。何れの入口からもかの広いホール(別冊一)P25参照)に通じている。今では、そのホールには本当の神様の事が書かれた書籍が一杯に並べられているのである。そして、そのホールには、立派な王子様と美しいお姫様が行儀よく座っておられる。その光景は、多くの人達(人類)がいつこられても良い準備と体制が整っている事を象徴するようであった。

一月一日、一月七日の二日間、連続して同じ霊夢を見る。N夫人はこの霊夢の中で、次のような文字の書かれた紙を手渡されたのである。

「汚いものは取りのぞかれました。」

「黄金の世界に導きます。」……これを注釈するように、その紙には更に次の文字が、その場で書き加えられた。

「輝かしい世になります。」

一月十九日、午前二時頃からN夫人の眠りは極めて浅いものとなり、数回目を醒した。そのたびに、心の奥から次の言葉が湧き出て来るのであった。

「地球は浄められました。地球は浄められました。」

そして、続いて次の光景を霊視したのである。

「自分（N夫人）は部屋で書きものをしている。ふと、窓の外を見た。天空には、東から西に続く長い帯状の白い雲が、カットされて粉々になっている。丁度、十二月八日に見たのと同様の光景であった。」

しかし今回は、その粉々の白い雲が突然形を変えて、ある姿を創ったのである。それは実に、荘厳な姿であった。それは神様のお姿であった。白髪、白髻はくせんにして、裾まで垂れた真白の衣をまとわれたお方であった。

そのお方は大変立派な椅子に腰を降ろされ、お顔は正面に向けられ、両腕は手のひらを伏せて、両肘掛けにそえておられる。

そのお姿には、暖かく、柔らかく、ほのぼのとした嬉しさ、しかも厳しく、力強く、とても表現しがたいものがある。N夫人はただただ有難いと感ずるのであった。

その椅子にかけられた神様のお姿は東から西へと雲が流れて行くようにお進みになってゆかれた。」

この神様のお姿を拝した時、我々ワンダラーの準備が整えば、この神様は今にもお立ち上がりになって、大御業を下さるばかりの時に来ていると感ずるのであった。

N夫人は、腹の底から安心立命と申そうか、嬉しい大平の心が満ちあふれて来るのを感じるのであった。（後日に至り、この神様は偉大なお方、ソクトル様と判った。）

十一月三〇日、未明、I氏は次の夢を見た。

「私はある川を嬉しく楽しく渡って行く。それは向岸に高貴な方がおられるからである。向岸につき、高貴な方と、喜びと嬉しさに溢れての語らいをした。しかし、語らいが終れば再びもとの処に帰らねばならない。気が進まないが帰らねばならない。仕方なくもとの今までいた処に帰ったのであった。」

一二月一日、未明、I氏、次の夢を見た。

彼（I氏）はある乗物（宇宙機）に乗り宇宙旅行をしている。途中下車した処は土星であった。大変に心地こころよいので帰ることに気が進まなくなり、二日ほど留まった。だが今はここに永住することは出来ない。帰らねばないのであった。そこで彼は地球に帰ったのであった。

地球に着いた彼は友人の家に立ち寄った。そこに一冊の本が大切に置いてある。この本を手にして開くと「地球を灌溉かんがいしよう」と書かれており、地球の東、西、南、北の四方より地球を覆いつくすように、又しみわたるように、水が流れ出て浸透し、灌溉して行く姿を見たのである。これは、水による地球の清めを指しているであろう。と同時に、四方から流れ出るエネルギーが地球を包んで結ばれるのであると感ずるのであった。

また十二月十二日、I氏は富士山の湧玉の池に立って感じた。

「四つの力エネルギ(清めの力、清めの泉)が富士山に集り、湧玉の池を通して、これが世界に広がって行く。」と直感するのであった。

二月六日、I氏は「離託」について次の如く靈感を得た。

「『離託』という事は、唯なにも考えないで神様にお任せするという意味ではなく、自分自身が神様とつながっているという実感、神様との一体感の中で、全てが喜ばしい、有難いと感じることである。このような時は、心身共に軽くなり、光に包まれる。」

二月十五日、未明、K夫人、次の光景を霊視し、かつ言葉を聞いた。

そこには気品高く尊いお方が二人おられる。その中のお一人の方が次のようにK夫人に語られた。K夫人は平伏してそれを承ったのである。

「二人の子供を前にして、別に動きは無かった。ただ『忍』であった方が、五次元の段階に進まれた。」

K夫人には、まだ会った事もないが、この方は〇〇さんであると判るのであった。

二月二日、未明、N夫人は次の光景を霊視した。それは天空における出来事であった。

天空から下に、まっすぐに連なる巾の大変広い光の柱が見える。光の柱の上には、黄色がかったオレンジ色の丸い玉が——袋のようなものから飛び出したように、或いは抜け出たようにと申そうか——あった。

その光の柱の下の方にはオレンジ色に輝く雲が一杯に広がっている。丸い玉と、このオレンジ色に輝く雲を結んで光の柱があり、その中間に、以前にもお見受けしたイエス・キリストのお姿を拝したのである。その時、イエス様は下にお降り頂いたのであると直感した。

黄色に輝くまっすぐな巾広い光の柱はそのオレンジ色に輝く雲の下にまでも、連らなっている。さらに、この光の柱の左隣りの上の方には、「白くて丸い」とても綺麗なものが在り、それは躍動しているのが判る。そして「白くて丸い」ものの中には白い文字で、**ON**と書かれている。この**ON**の文字は最初から終りまで同じ位置に明確に画かれていた。

**ON**について考えをめぐらしていた時(翌二十三日)、次のテレパシーを受けた。

「輝かしき世の始まりです。」

一月二五日、W氏、高知のN夫人より大要次のような手紙を受け取る。  
十二月二十一日から二十二日にかけて、不思議な夢を見ましたのでお便り致します。  
ある場所に私(N夫人)とKさんとが居たのです。するとあたりの様子が非常な変化を  
し始めたのです。

天の景色と地の景色が、丁度合せ鏡で写した様にピタリと一緒になるのです。

その光景は実にカラフルで美しく、教会のステンドグラスを思わせるものがありました。  
私とKさんは、そこで盃を交わしながら御祝いしているのです。

「とうとう、その時が来ましたね。」

「オイカイワタチ」の通りになりましたね。」

「Sさん達も、どこかで同じ時を迎えているでしょうね。」

「儀式がすんでから〇〇〇でしたね。」

——この会話を交した事をハッキリ覚えております——

すると目の前でKさんの髪がサーッと赤みがかった金亜麻色きんかあまいろに変わり、肩のあたりに美しくゆれているのです。見ているうちに、Kさんは、丸顔で、ピンクの輝くような美しい肌、ギリシア彫刻のような若々しい美しい人に変化していくのです。あゝKさんはこういう方だったのかと思つて……夢からさめたのです。

一月二日、N夫人は一月四日に行う「オイカイワタチ別冊(一)」の發送準備の手順について、考えをめぐらしていた。その時、太陽を見たいと思つたので、外に出て太陽を眺め、次のように祈つた。

「神様の愛によって多くの方々をお導き下さい。」 丁度十一時三十分であった。

太陽は天高く輝き、その太陽の下に白いハッキリした巾の広い帯状の雲が、南から発生して北に進んで行くのが見える。更に、それと同じ白く巾広い雲の帯が西から発生して太陽に向つて進んで行き、やがて太陽に突き差さるような恰好かっこうになった。そして太陽の左下のところに、白い明瞭な線の雲で三角形を画きだした。しかも、その上に「天の神様」がお立ちになっておられると判るのである。

更に、太陽を中心とし、南北にかかる白い巾広い帯状の雲を低辺として、太陽を包むようにして巨大な半円形の美しい虹がかかっているものであった。これを見た時、N夫人は次の通り直感したのである。

「神様の大爱に包まれて、別冊により、多くの人達が動き始める。」

一月四日、「オイカイワタチ別冊(一)」の發送準備のための荷造りが完了する。

N夫人は荷造りの途中に、「別冊は要求のありたる方々にどんどん渡されるべし。」と

の靈感を受ける。別冊は一月五日に第一回が発送された。

一月五日、I氏、次のようなテレパシーを受けた。彼はそれに注釈をつけて、W氏宛に送った、彼の手紙の大意は次の通りである。

一月五日早朝、夢の中で三人程の人々と話していた。その時、突然、

『天の聖所が開かれました。』

との声なき声を聞いた。この声の始まりの時は夢の中であつたが、終りの時は夢から醒めた状態であつた。

今までの経験では、あの様な状態でのテレパシーは、何か意味があつたようです。大変重要な一つの始まりを意味するように思います。

その日、「天の聖所」について黙示録を調べてみました。大体、次の項に「聖所」が出て来ます。

#### 黙示録第一章

「……この世の国は我らの主と、そのキリストの国となつた。主は世々限りなく支配なさるであろう。……」

そして、天にある神の聖所が開けて聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなづまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒のひょうが降つた。」

#### 黙示録第四章

「見よ、白い雲があつて、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかつて大声で叫んだ。『かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた。』雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。」

また、もうひとりの御使が天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。……」

#### 黙示録第五章

「……天にある、あかしの幕屋の聖所が開かれ、その聖所から、七つの災害を携えている七人の御使が、汚れない、光り輝く亜麻布を身にまとい、金の帯を胸にしめて出てきた。……すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、七人の御使の七つの災害が終ってしまうまでは、誰も聖所に入ることが出来なかつた。」

#### 黙示録第十六章

「それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむかい、『さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を地に傾けよ。』と言うのを聞いた。」

第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、『事はすでに成った。』と言った。」

黙示録は二二章から成っており、後半の第一一章より「聖所」が出て来るようです。第一〇章までは一つの準備が現わされていて、第一章でこの世は神の国となり、天の聖所が開かれて、それからはいろいろの事が具体的に現わされて行くわけです。

『有の世界』において、天の神様が立ち上がられる事を意味しているように思います。

—— 後文略 ——

(私達仲間の一部には、聖書の黙示録は、ワンダラー達の働きと歩みを象徴的な予言で、示したものであると解釈する者もあったようである。)

一月一〇日、N夫人は、最近自分の果す使命は『月』と関係があると思えてならないので、夜十一時四十五分、窓を開け、月を眺めて、「私の役が月に関係があるとするならば、正しく導いて下さい。」と月に向って祈っていたが、再び「私の役が月に関係が……」とここまで心に思った瞬間、円盤が天空に現われ、半円を画き鮮やかな長い光跡を曳いて地上に落下するように消え去った。

一月二一日、早朝W氏は「Tさんに会いなさい。」「会えば判かります。」とのテレパシーを受けた。W氏とT氏は一月十六日に会う事に決まった。

一月二三日、朝、N夫人は次のような意味深い啓示的な光景を靈感と共に霊視した。

「自分(N夫人)は月を眺めている。突如として月が回転する。月の表が回転して裏になり、また回転して表に戻ったのである。それは瞬間の出来事であった。と同時に、N夫人は、自分の見えないあるものが一転し、大変化して、新しい自分に変わったのに気付くのであった。

『表が裏になり、裏が表になる。』この変化が、月にばかりではなく星においても同様に行われているさまを、皆が外に出て眺めているのであった。眺めている人達はみな光体となった人間であった。

このように月と星とが変化する、即ち『表が裏になり、裏が表に変わる時』、人類も同時に変わるのである。また廻りのすべても変わるのである。それもビックリする程の瞬間においてである。その変化には、少しの苦しみも、痛みもないが、ただ穢きたないものを身に付

けていると、その汚れに<sup>よど</sup>応じて重くなり、重さが加わって大きな重量感となってしまう。その穢いもの、汚れたものが無くなれば（綺麗になれば）、軽くなり、フワツと爽やかな感じと共に、変わるのである。廻りのすべてのものも同じように変わるのが判る。これが本来の姿ではないかと思われた。これと言って物が移動したというように変わったのではなく、それでいて全身が変わったと感じるのである。あ、このようにして変わったと知って気が付いた時、肉体の死を迎えるのであると思われた。

このようにして全員が気付くのであるが、これに気付くまでには、その人の穢いものが取り除かれて綺麗にならねばならない。この過程には人それぞれに早い遅いはあるが、何れにしても全員が気付くまで月と星の変化は行われている。気付いた瞬間に変わる、その時には全員がアッと言が出るほどの変化があるのである。そして変化のあとに気付いたら、そこに本当の自分があるのである。生まれ変わったのであろう。その瞬間の差、即ち表と裏とは全く同じように見えるが、しかし、気付く前と後の間には明らかに変化があったという事だけが、確信をもって判るのであった。」

註この啓示を言葉、文字をもって記述する事は不可能であるが、この文中から、なにかを直感して頂きたいと願うのみである。

この日の夜（十時三十分）、今朝の啓示的霊感と、霊視した光景のことを繰り返して考えをめぐらしていた時、次のテレパシーを受けた。

「その時、神の愛によって、地球全人類は救われるのであります。」

一月一四日、I氏は次のような霊感を受けた。

「何事も自然に任せておけば良いのだ。悪い様に思われる事でも、裏に深い意味があって調和を取るために起こるのだ。」

一月一七日、W氏は、高知のN夫人より、一月一日に受けた霊感と、天のしるし、についてしたためた手紙を受け取った。（註 この手紙は一月十六日に書かれた速達便であった。一月十六日は、T氏、S氏、W氏によって次の儀式が決定された日であった。）

その手紙の要は次の通りである。

——前文略——一月一日は、天のしるしの多い日でした。殊のほか輝かしい初日を我家で拜んだ時、一九七七年は大切な年であると心に浮かびました。

また夜、何気なく外に出て夜の天空を見上げて驚きました。夜空は薄雲で一杯に覆われていましたが、我家の上空には、月を中心として円い輪ができていたのです。その輪はま

るで真円まんまるの型で抜いたようで、中には雲ひとつなく、すきとおるような夜空が見えていました。月から西に少し離れた所に強く輝く星が一つ見られました。

今まで月に傘が被かぶった様に月の廻りに円形が見られる事がよくありましたが、これは、それとは全く違ったものでした。その輪は月の直径の十倍以上は充分にあるほど大きなものでした。

この円い大きな輪の外側の天空は白い雲で一杯に覆われていて、星の光もかすんで見えない程です。円の輪の中のみが澄み切っており、まるで手を延ばせば届くような錯覚を覚え、この円い輪を通して外宇宙へ吸い込まれて行くような気持ちになりました。

私は昨年十二月二十二日未明に霊視した光景のことと、今朝（元旦）の初日の輝きのことと、それに夜の天のしるしについて、次のように考えました。

「天と地が合せ鏡のように一つになって見えた事は、天で行われた事が地でも行われる事を意味している。」と感じます。

「新しい世の中心者は、天にも輝き、地にも輝く者である。この方を迎える儀式が、天と地で行われることにより、神様の席の方（皇太子殿下）は王の王たる位に就かれるであろう。」と思うのです。

「これは契約の地で行われる大切な儀式であり、それは間近に始まりんとしている。」

と思うのです。——後文略——

一月一六日、W氏が十一日朝に受けたテレパシー「Tさんに会いなさい。」により、今日W氏はT氏と会うことになったのである。T氏の語る内容は大要次の通りであった。

T氏は昨年十二月二十九日より正月三日まで、連続して皇室に関する靈感を受けたのである。

この靈感を要約すると次の通りである。

△ 御皇室のタイタスカンに目覚められるべき大切な時期が到来した。

△ 天皇陛下はこの地球でのお役を終えられたのである。（此この地球の「霊の世界」でのお役を終えられたという意味である。）

△ 新しい世を統べられる王きみである、神様の席の方（皇太子殿下）の、タイタスカン（王の王たる心）に目覚めて頂かねばならない時が来た。

△ 皇太子殿下のお目覚めによって、ルシファー、オリオンも、神様の愛に、まこと目覚めるのであると思ったのである。

T氏は、今だかつて考えもしなかった靈感であるだけに、これを仲間達に語る勇気が出なかった。それは、もし間違った靈感から仲間達を混乱と誤った道へ追いやることがあつてはならぬと恐れたからであった。

だが、湧き上がる靈感は信念となり、彼は、これにかかわる一切の責任を己れ一人で負う決意をして行動を開始したのであった。先ず御皇室の最大のご祖先である伊勢神宮へ、この事に関し、お願いに詣うでたのである。

彼の決意は次第に強いものとなり、この問題では生命を賭しても良いと真剣に考えるに至った。

この話を聞いたW氏は、次に始まる重要な儀式の時期は熟せりと直感するのであった。そこでW氏は、この日（十六日）に来合わせた、T氏、S氏と共に、この儀式について話し合い、儀式を次のように決定した。

この儀式は、

「新しき世界を統べられる王（神様の席の方、皇太子殿下）を奉戴する儀式」

昨年十月三十一日、天の神様（宇宙最高神宇宙創造神）の降り給うた湧玉の池に、ワンダラー集いで、神様にご報告とお願いと感謝を申し上げるのである。それは、偉大なる御魂とワンダラーの結びの儀式である。

報告

新しい世界の中心者と成り給うて、新しい世を統べられる王が、お立ち上がり頂いても良い準備が地球に整った事を、天の神様にご報告申し上げます。

お願い

神様の席のお方であられる皇太子殿下がタイタスカンにお目覚め頂き、新しい世界の中心の真の柱と成り給うて、新しい世を統べられる王としてお立ち上がり下さるよう、天の神様にお問い合わせ。

感謝

新しい世の王に、タイタスカン皇太子殿下を奉戴申し上げた喜びを、天の神様に感謝申し上げます。

この儀式は一月三十日と決定された。

後日になってこの儀式は、「カアハミテスの儀式」であると確信するのであった。

註「オйкаイワタチ」本書P182には次のように書かれている。

「日本の皇太子殿下は、『神様の席の方です。』と語られた。

そして新時代にそなえての使命を持って地球に降りられた御方であり、その使命は『カアハミテス』であると宇宙語で語られ、その意味は『今は語れないのです。』と。時期尚早ということであろう。しかし、これらのことは時が来れば判ることであろう。」

また、この儀式は、☆と☉を結ぶ契約の儀式であるとの靈感を受けているワンダラーも

あった。

一月二〇日、N夫人、次のテレパシーを受ける。

「今、甦えろうとしている。」

何が甦えろうとしているのか？ 先に（十二月九日）月が甦えり、今、地球が甦えろうとしているのでなからうか、と思ったのである。

一月二一日、未明、N夫人は次のことを象徴する霊夢を見た。

「天に出来上がったものが地に移される。そのお祭（儀式）が今まさに行われんとしている。」

一月二四日、Y氏次の如き夢を見る。

あるところに朽ち果てかけた小さな祠があり、その中には、ひとつの仏像が安置してあった。しかしこの仏像は全身が真黒になってしまった、極めて異様な印象を与えるものであった。N氏は、この異様な仏像を見た瞬間に、

「ムム、この方は……」

とつぶやき、突然仏像の真正面に正座するとそのまま夜を徹して祈り始めた。すると段段N氏の姿がその仏像に変化してゆくのである。そしてついには、全身から異常な炎をふきだしあう二体の仏像が相對することとなった。炎の色は、最初は赤黒く、汚濁に満ちていたが、どんどんと変化してゆき、ついにはすべての邪念をふりきり、仏像の姿は透明な至福に満ちたものに変わっていった。すべてが終るとN氏は疲れ果てたように身を起こしたが、その時はすでにN氏も別の姿に変わっていた。

一月二七日、午後一時三十分、K夫人は太陽の廻りに大きな虹が円を描いているのを見る。その虹は円の下部の二〇%ほどが消えており、つながっていなかったが、青空にくっきりと浮かびあがる実に美しいものだった。

銚これを聞いたある仲間が、これは、ある進行を示しており、消えて

いる二〇%もやがて繋がりが、完円な真円の虹となるのも間近いであ

らうと感じたのであった。

一月二八日、朝、K夫人は次の光景を靈視した。

ニコリほほ笑まれる美智子妃殿下が、「やっとここまで来ましたね、あと一歩でお逢

いしますよ。」と云われたような感じがした。逢うというのは、来る三十日の儀式のことのように思った。

一月二十九日、Y氏久し振りにW氏を訪れて、一月に入ってから見た二回の不思議な夢について語る。

その一回目は、一月七日、天皇陛下の礼服に正装されたお若き日のお姿の写真である。このお姿に重なるように、二つの画面が現われた。上には菊の御紋章が、下には丸い円の中に手の平(掌)を広げた図柄であった。それは、天皇陛下は菊の御紋章を手放される事を象徴するかのようであった。

二回目は、一月二十九日(今日)午前六時頃、日の丸の旗が、丁度影絵のように現われ、その旗の中に、極めて鮮明にして明確な文字で、『陛下は○○なられた』と書かれてあるのが判るのであった。

その時、陛下が御在位五十年を返りみて、「極めて残念であったのは、あの戦争であった。」と心で思っておられる、その思いが伝わって来るようであった。

目を醒したあとも、『陛下は○○なられた』という意識が明確にかつ強く残っている。それは、彼をして、今朝のテレビ、ラジオ、新聞等で発表されるはずであると信ぜしめる

程の思いであった。

彼が以上を語り終えた時は午前十一時三十分頃であった。その現在に至るも、Y氏の心にはこの事が生々しい記憶となつて残っていると、彼は語るのであった。

Y氏は、昨年十一月頃よりW氏から依頼を受けていた事柄(プライベートのこと)を回答するために、一月四日頃より訪問しようと思つたのであるが、どうしても行けない事情が続出し、遂に今日(二十九日)の訪問となつたのである。

明日(三十日)の儀式の前日に至つて、これを語るために、今日まである力で延ばされていたと思わざるをえない不思議さであった。と同時にこのことはW氏に対して明日の儀式の重要性を傍証し、かつ儀式に参加する者の自信を深める助けとなつたのである。

陛下が○○なられたとは、「有の世界」の「霊の世界」においては、

陛下はご使命を終えられたということであろうか、或は、かつて一九

六〇年に、世の終りの時、天皇は古い『日本と共にあります』と教え

られたが「霊の世界」の古い日本の終る時を指すのだろうか。

同日(二十九日)、夜十一時、N夫人は月を眺めた。月は雲で出来たダビデの星章の中に包まれて輝いていた。この瑞象は、明日(三十日)の☆と☉の契約の儀式に関係するも

のであると思うのであった。

一月三〇日、朝の散歩に出た時、W氏は、晴れ渡った南の空に浮かぶただ一つの雲に心と目が集中した。その雲は不思議な形をした鳥の姿だったからである。その時「鳳凰」というテレパシーを受けた。暫く見ていたが、やがて、その雲は消え去って行った。

散歩を終えて我家に近づいた時、東の空に、再び「鳳凰」の姿が太陽の横に並んで浮かんでいるのを見たのであった。

これを見たW氏は、今日の儀式に深い関係があると直感し、また、今日を寿ぐ証しと受け取ったのである。

田W氏は我家に帰り、百科辞典にて「鳳凰」の霊鳥想像図を見た。そして、今みた不思議な姿形をした鳥と全く同じであるのに驚いたのであった。

後日に至り、「鳳凰」の意味を辞典で調べ、更に驚きを新たにしたのである。

辞典に曰く。

「聖王、世に出て、天の下を治す時に、天すなわち応えて其の祥瑞を示す。」

「聖王が世に出ると現われるという瑞鳥。」

「聖徳の天子の兆として現われると伝えられている。」

一月三〇日、儀式の日、参加者は、東京よりO夫妻、高知市のN夫人、岐阜県のI氏、名古屋方面より、S氏、T氏、N氏、N夫人、K夫人、W氏の十名であった。

静岡駅から富士宮駅に近づくにつれ、電車は富士山の全姿が展望できる場所を通過するのであるが、今日の富士山は全姿を雲で覆われている。

電車が富士宮駅に近づいた時、全姿は雲で覆われているが、頂きの処だけは△の額縁を抜いたように雲が取り除かれ、山頂が美しく浮かび出ているのが展望された。これを見て、この△の中に富士山の頂上を現わした意味を探ろうとしていた一部の仲間もあったのである。(注△の意はP 29 / 32 参照)

一行は富士宮駅で下車し、浅間神社に向った。そして、浅間神社の大鳥居の前で、富士山の方を眺めた。富士山は、全山を壮大な雲に覆われ、その雲は、天空一杯に伸び広がって、ある事を象徴するかのような勇姿を見せていた。

天空には驚く程の巨大な三重の雲が一杯に広がっている。その雲の大きさは、下部の一層の雲の一部分で富士山の裾野までの全姿を包んでなお充分に余りある程なのである。一層と二層の雲の境目に、富士山の頂のみが、丁度、冠を頂いたように美しく輝いているの

が見える。二層、三層の雲も一層とほとんど同じ巨大な雲であって、この三層の雲が重なって天空に浮かんでいるのである。しかも、一層、二層、三層とあるこれらの雲は、中ほどの部分は上下につながっているように見える。丁度、巨大な王の文字を画いているように見えるのである。

その有様は、地球の象徴である富士山が、巨大な王を頂き、かつ、王冠を頂いたかの如くであった。

この荘大な勇姿を見て、このように理解し、今日の儀式の証しであると心に深くかみしめた仲間もあったのである。

一行は浅間神社に詣<sup>もつ</sup>でて、木花開耶姫之神様に今日の儀式が無事行われるよう御加護をお願いした。

続いて湧玉の池の神殿となっている祠に一人、一人と入って、天の神様にお祈り（報告、お願い、感謝）をしたのである。

K夫人は、この時、次のような靈感を感じた。

「祠に入った時、柔かく、暖かく、白い神様の霊をそこに感じた。一心に祈りを込めていた時、二つの白い御手が差しのべられ、私は抱かれて、ユリカゴの中に入れられたような心地よさだった。暖かく、柔かく、よい匂いがした。その時、『間もなく安らぐ時が来

る。』と私に告げられたように感じたのである。

神様の讚美したもう、喜ぶべき<sup>地</sup>みどり児<sup>球</sup>の誕生を示されたものと理解するのであった。」

湧玉の儀式のあと、全員が富士山を展望出来る旅館に入り、ここにおいて、この儀式に至るまでの各ワンダラーの受けた靈感、テレパシーの内容がお互いに語られた。

生憎、富士山を覆っていた雲は晴れることなく日は没し、一部の仲間の方が期待した真赤に染まる赤富士を仰ぐことは出来なかった。

高知のN夫人とK夫人はその日、その旅館に宿泊することにしたが、他の者達はそれぞれ東京、名古屋方面へと帰宅の途にいたのである。

一月三十一日、朝、宿泊したN夫人とK夫人は、期待した赤富士を拝したのであった。この時の体験を両夫人から次のように手紙で知らされた。

「美しく天にも地にも映える赤富士を見るといふ事は、その願いが神様に届き、その証しをして見せて下さるものであれば、その日にそれを見る事が出来なくとも、次の日か、或は十日後かも知れないが、必ずその証はいつか見せて下さるでしょうと云われたWさんの言葉を、私達は信じていました。

三十一日朝、六時半頃、Nさんが、「富士が見える」と大声を出しました。その時は普通の色で、ただ昨日見えなかった全姿が見えていただけですが、余りの素晴らしさに、大急ぎで服に着替えて外に出ました。

七時が十五分前ぐらいから少しづつ赤くなり始めました。七時、見事に赤く染まりました。天にも輝く赤い雲、地にも輝く赤い富士を見た時、皇太子殿下は天にも地にも輝くものとなられたと確信致しました。また、「事はなれり」、「契約の儀式は完了せり」と強く感じ、神様有難うございましたとお礼を申し上げました。

その時の富士の色はアカネ色ともピンク色ともいえる淡い赤色なのです。それは、前に霊視した赤富士の勇姿と同じでした。また、二十八日の朝霊視した美智子妃殿下の御召物の色とも寸分違わぬ色でした。

その時、私達は、富士山の東の空に、美しく黄色に輝く光の柱（電柱位いの巾）が、天から地に至るまで、まさに天地を結んで立っているのを見たのです。

この時、二人は感動し、もはや何の思いも残すことなく、限りない感謝に包まれて帰途についたのです。」

同日（三十一日）、夜十時頃、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天皇陛下は王冠を返却され、皇太子殿下は即位新生されます。黄金の世界に導きます。」

二月三日、岐阜のI氏、

日の出の時刻より少々前、東の地平線は美しいアカネ色に染まっている。その時、太陽の出る所より、天にとどく太い光の柱が立つのを見たのであった。その太い光の柱は、太陽が地平線より昇る少し前までは赤味をおびていたが、太陽が顔を出し始めるに従って極めて美しい黄色に変わった。巾は、太陽の直径と同じくらいの太さであった。

二月八日にも、I氏は、二月三日と全く同じ光の柱を見たのである。

I氏は、この天のしるしを見て、皇太子殿下は、ご使命に、そしてタイタスカンに目覚め始められたと思うのであった。

二月七日、午後四時三十分頃、N夫人。

西に傾いた太陽を見た時、太陽の両側に虹の柱が立っているのを見た。太陽に向かって右側に立っている虹の柱は、強く光り輝き、眩しいくらいであり、鮮かに、美しく、極めて強く輝いているのであった。その時、この虹の柱は皇太子殿下を象徴していると強く思っ

たのである。

左側の虹の柱は、光の力も薄く、やがて消え薄らえて行くかのように……。その虹の柱の鈍く輝く色彩を見た時、「沢山のご使命を終えられた天皇陛下」のことが思われたのである。

二月一日、朝七時三十分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「お城は新しいお城に変わりました。」

「稲に穂がきました。」

N夫人は、象徴的に語られたこのテレパシーの意味を理解しようと、考えを深くめぐらしたのであった。

今朝（十一日）のテレパシーの意味と、午後熱田神宮で祈った事、それに、最近身のまわりに起こった事などについても更にN夫人は考えたのである。そして、次のように理解したのであった。

昨年十二月二十四日、知人のU氏宅を訪れた時、お琴で「さくらさくら」と「荒城の月」を聞かされた。それを聞いた時、N夫妻はこの曲詞に何か深い関係があると思った。しかし、その時は判らなかつた。今年二月六日、それ程の深いおつき合いでないU氏宅を

再び訪れたいという衝動にかられたので連絡をした。不在の多い方にもかかわらず、その日に限り都合が良く、訪問をした。

すると、また琴を聞かされた。しかも同じ曲である。（Uさんは、初めて聞かせると思っているのである。）N夫妻には、忘れかけていた昨年末に聞いた時の深い印象が、再び湧き上がって来るのであった。

琴が奏でる「荒城の月」の三章

天上影は変らねど、栄枯は移る世の姿

うつさんとてか、今もなお、

ああ荒城の夜半の月

この歌詞が一月十三日に霊視した月の変化を思い出させた。月の「表と裏の変化」と、この歌詞との、奥にある意味を考えたのである。

荒れ果てた、暗黒の城（地球）を、光り輝く新しい城（新しい地球）とするには、新しい地球を統べられる皇太子殿下という中心者の灯（ひかり）がともされることが必要である。そして「城は新しい城となって、灯は輝くのである」と判るのであった。その時、「稲の穂は灯の事です。」とテレパシーを受けたのである。そして、「お城は新しいお城と変わり、灯がついた。」と判るのであった。

N夫人は、二月七日夕方、太陽を挟んで両側に立った虹の柱を見た時から、王位の御譲について「天の神様」にお願いしようと考えた。

そのお願いは、二月十一日、熱田神宮に詣でて行われたのである。

「天皇陛下、今までの、戦前、戦後のお役目、任務、大変ご苦労様でございました。本当に有難うございました。」

これからこの新しい地球を、新しい世界を築き、お創り頂き、その中心者となられます皇太子殿下におかれましては、すでにこの心の準備はすべて整われております。

天皇陛下より皇太子殿下に、「御位のお譲り」の「宣言」をして下さるようになり、天の神様、よろしくお願い申し上げます。」

この祈りは熱田神宮から帰ってから一日中続けられたのである。しかし今日（十一日）の行為については、だれにも語らずに心に納めて了ったのであった。

二月二日、昼十二時十分頃、N夫人は空に輝く太陽を中心に、（太陽の直径の十倍くらいの）円形の美事な虹が天空に画かれたのを見た。その時、昨日（十一日）の熱田神宮での祈りは正しく、そして、その役を果たした。と感ずるのであった。

熱田太陽を中心に包む巨大な虹は、一月二日は半円形、二七日は八〇%の

円形となり、二月十二日は完全な円形の環を画いたのである。これは、あることの進行を物語っているようであった。

この太陽を包む完全な円形の虹は、この天のしるしは、この時を境として、現在（四月末）に至るまでに、数多く見せられたのである。

かくして、「新しい世を統べられる王を奉戴する儀式」は終わったのである。ここにおいて、皇太子殿下のご使命「カアハミテス」の意味を理解することが出来たのである。また、この儀式が「カアハミテスの儀式」であった事も理解したのである。

新しい地球の「霊の世界」において、新しい世を統べられる王を頂いたのである。

この頃より、ワンダラー達は次の儀式の準備について気付き始めて来たのである。

### 第三章 エクアドルの戦い始まる

昨年十一月下旬頃より、次の儀式、即ち「エクアドルの戦い」輝かしい黄金の世の儀式・地球大浄化の儀式」と、一月三十日に行われた「カアハミテスの儀式」の準備が平行して進行していたことが、これまでの経過をお読み頂いてお判りのことと思う。

二月上旬頃より、ワンダラー達は、それぞれが再び、次の儀式が始まらんとしていることに気付き始めて来たのであった。

二月七日、早朝、I氏、霊夢にて、「儀式が間近い。」と知らされる。

二月八日、早朝、I氏、再び霊夢にて次のように知らされた。

「儀式には多くの方々が集まり、○○さんを中心として取り行われている。」

二月十一日、高知のN夫人、次のような靈感を感じた。(手紙のまま)

「私(N夫人)は今日(二月十一日)、なぜか、○○さんと神様と大事な儀式を行っていられるように思います。」

二月五日、夜九時頃、N夫人は、仕事を終え、我家に帰るべくバス停に向う途中、去る十二月八日に見たのと同じ長い帯状の白い雲が、天空に南北一杯に連らなっているのを見た。

去る十二月八日に東西のテープ(長い帯状の白い雲)がカットされたので、今は南北にあるだけである。N夫人が歩きながらこの南北の雲のテープを潜り抜けたような感じがした時、突如その雲のテープがカットされて粉々に散って行くのを見た。

先の十二月八日に東西がカットされ、残りの南北のテープは今ここにカットされた。これで、天においては地球大浄化の除幕のテープは全部カットされたのである。N夫人はこの地球での除幕の儀式も間近いと直感するのであった。

二月十九日。S氏、N夫人、共に儀式の間近いことを直感する。N夫人は、その時、「輝かしい金の世の儀式」と心で思った。

二月二〇日。W氏は、次の儀式について考えをめぐらしていた時、時は熟せりと直感し、儀式の日は三月二十日が良いと心で定めた。

同日（二〇日）、I氏。

「次の儀式はいつ行われるであろうか」と自宅で考えながら空を見上げていた。すると雲が移動し始めて、**3**という数字を天空に画がいたので、**3月3日**かな?と思った。すると雲の**3**の数字は暫くして消え去り、雲が再び移動して、次に**20**という数字を画がいたので、彼は、儀式は**3月20日**に決まったと思うのであった。

二月二一日、高知のN夫人は午時十時頃、「オイカイワタチ別冊(一)」を読んでいた時、次のテレパシーを受けた。

「儀式が行われます。この儀式は〇〇さんを中心として行われます。」

この時、心に浮かんだのは、いよいよルシファーがまことの光にあてられて、その間違いに気付く時が来るといふ事であった。

二月二三日、未明、N夫人は次の夢を見る。

「天より、錦鶏が〇〇さんの家の庭に舞い降りて遊ぶのを見た。」

二月二四日、ワンダラー五名集まり、「次の儀式」を迎えるための準備が行われ、正式に次のように決定された。

とき、三月二十日

黄金の世の儀式（輝く神の世の儀式）

地球大浄化の儀式（地球大浄化除幕の儀式）

二月二七日、高知のN夫人よりW氏に、次のような手紙が送られて来た。（原文のまま）

二月二十五日朝、目が覚めた時「地軸の傾斜」を霊視致しました。その後もずうっと霊視は続いております。その時、私は、この様に感じました。

古い地球の柱が倒れようとしている。即ち古い地球の柱たる現天皇の時代の終りが近いという事です。

今度の儀式について今一番に思うことは、「神様の涙でぬらす地球」という思いなので

やつれて悲しそうなお顔の中に、父として子を思う涙を感じます。神様は只一人の迷い

子のためにどれ程のお気持を持たれたか、イエスの言葉を借りるまでもなく、すべての子供を救い取られる今度の大御業の中に、泣き叫ぶ子を見ねばならぬ親としてのお苦しみがなぜか強く強く伝わってまいります。

どれ程の深い懺悔をしたらぬ程、神様からお預りしたこの地球の山、河、自然は傷つき破れ、人の心もそれと同じ状態にある今日、せめてこの世の終る時、すべての人が神様に、「ごめんさい」と云える心になりたいと思っております。私はそうした気持で、その日を静かに祈りたいと思っております。

二月二十八日、未明、K夫人は次の光景を霊視した。

「鏡のように光り輝く太い柱（電柱の数倍）が天地を貫いて立っている。そのそばに、光らない細い木のような柱がまさに倒れんとして、傾いている。」

それは、新しい地球の真の柱が立ち、古い地球の柱が傾き倒れんとしている象徴に思えるのであった。

三月一日、午後六時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「日、月、今ここに交わりました。」

三月七日、未明、N夫人次のような靈感を受ける。

「天皇陛下は、ご使命の終られたことを自覚された。そして、皇太子殿下は、新しい世のご使命を自覚された。そして、陛下と殿下は来る三月二十日の儀式をお待ちになられている。」という事がなぜか判るのであった。

三月一〇日、朝六時、I氏は次の様な光景の霊夢を見た。（手紙のまま）

夢の中で目が覚めて起き上がったらまだ夜の十二時でした。そのまま服を着て廊下に出て空を見たら、真暗な空の中に大きな赤っぽい色をした彗星の様なもの、左から右へ向って行きました。その後、幾百個もの、流星の様なもの、黄色かかった青い鋭い光の尾を曳きながら左から右へ飛びました。その時、夢の中で次の様に思いました。

「これは普通の現象ではない。いよいよだ。三月二十日の儀式の後、自分が考えていたより、もっと早いスピードで地球の浄化は進むのだ。……そして現実に目が覚めた時は朝六時でした。」

三月一五日、午後六時。N夫人は、西の空に美しく輝く細長い巨大な葉巻型母船を目撃した。

夜十時三十分頃、N夫人は、この美しい母船の事を考えながら活字用辞書を見ていた。その時、(丁度辞書のあるページを無意識にめくっていた時、)

「いよいよ、その時が近づきました。」

「リューキュー王国」とテレパシーが入った。夫人は、心の中で、沖繩の「琉球の王家」となんの関係があるのだろうかと思った。すると、「それは違います。」「黄金の世界のこと。」と再びテレパシーで教えられたのである。

丁度、広げていた辞書の頁に、「鏐りゅう」という活字がある。意味は、「美しい黄金」と書かれてある。

「聖王(天子)の統べられる国である、美しい黄金の美しい地球の誕生の時は、いよいよ近づいた。」と理解したのであった。

三月一七日、未明、N夫人は次の霊夢を見た。

「若々しい宇宙人がN夫人を訪れて『三月二十日の儀式について、○○さんのその日のための稽古がまだ足りません。まだ用意のし足らぬところがあります。足りない」と儀式が立派に成功しません。まだ時間があるので間に合うように用意して下さい。そうすれば立派に儀式は成功致します。当日はニコヤカに儀式が出来ますようにして下さい。』と語る

のであった。」

三月一七、一八日の両日は、○○氏はこの儀式での足りぬことを真剣に考え、ついに……  
「一九六一年に天の神様が○○氏に命じられた、その内容を語り、その戦い開始の儀式である旨を発表するのである。」と決意したのであった。

この内容を書きとどめて、発表の用意を整え、これを我家の神前に供えて床に着いたのが十八日の夜十二時すぎであった。

三月一九日、午前八時〜八時三十分、N夫人は太陽を見たいと思って外に出た。

天空は、薄雲で一杯に覆われている。この薄雲を通して東の空に、太陽が輝いている。眩しいはずの太陽を今日も正面まともに見ることが出来る。その太陽に、『愛』という文字が輝いて画かれているのが見えるのであった。

夫人はそれを見ていったん部屋に戻ったが再び見たいという感情が湧き上がるのでまた外に出た。

その時、太陽が意外に早く動くのを見たのである。そんなに早く動くはずがないと心で思うのだが、やっぱり早く動いて行くのである。

しかも、その太陽の下の方に月か、あるいはもう一つの太陽のようなものがある。(多分月であろう) その月も西の方に同じくらい早さで動いて行く。しかも、上にある太陽と下にある月は別々に西に動いて行くのであった。太陽が動く時は月は静止しており、月が動く時は太陽が静止しているように見える。

暫くこれを見てみると、ある瞬間に、太陽と月が垂直につらなつた。そして、その中間の天空にゴシック活字体で、極めて明確にVという文字が画かれたのである。

これを見た時、太陽と月が一つに重なり合うのではないかと思った。その瞬間、「この重なりは明日の儀式によって成るのである。」とハッキリ判つたのである。

同時に、〇〇さんの明日(三月二十日)の儀式の用意は完全に整つたと直感した。

三月二〇日、儀式の日は到来した。参加者は東京、千葉、群馬、埼玉、岐阜、名古屋、愛知、滋賀、京都、大阪から、計二十四名であった。(この他に、心と魂で参加された方が五名あった。)

S氏が開式を宣し、W氏は、この儀式に至るまでの経過を語つた。その大要は次の通りであつた。

「今日の儀式には一九六〇年にサナンダ様(AZ)が語られた、『ワンダラーを縦の糸とし、地球の真に目覚めた人を横の糸として、よく神様の御業を織りましょう。』という言葉の中にある、『縦の糸』の方々が集まられたのである。

『縦の糸』、即ちワンダラー、特に日本の国に生まれたワンダラーは、『オイカイワチ』の役をするのである。『オイカイワチの使命』は本書P115に書かれている通りである。

一九六〇年から今日まで、日本のワンダラー達は様々な体験と、学びと、試練を経て、沢山の役を、また儀式を果たして来たのであるが、これらのすべてが、この、『オイカイワチの使命』を根拠としていた。そして、この根拠より一切が発展して来たのである。これらの道は終始一貫しており、すべてが『オイカイワチの使命』の中にあつたことを知る事が出来たのである。

ワンダラーの儀式とは、天の神様の御手足となって役を果たすことである。ワンダラーは、神様のお命じになられた全てを、一つ一つ準備を整え、これを報告し、これを実施して下さるように天の神様をお願いするのである。そして、お聞き届け頂けたことを感謝申し上げる。これを儀式という。

神様が行われる儀式に、ワンダラーは参加してこれを行うのである。ワンダラーは、儀

式の内容、時期、場所を、すべて神様のお考え通りに行うことが大切である。従って、儀式に参加する者は、靈感やテレパシーをよく味わい、神様に全託して靈感のままに実行する事が大切である。」と語り、引続いて、「オйкаイワタチ別冊(一)」以後に行われた「儀式」と、これらの「儀式」に至るまでと、以後に起った様々の経過を語った。

昭和五十一年十月三十一日に「天の神様（宇宙最高神<sup>宇宙創造神</sup>）をこの地球にお迎えする儀式」を実施。

昭和五十二年一月三十日に「新しい世界を統べられる王<sup>きみ</sup>を奉戴する儀式（カアハミテスの儀式）を実施。

そして本日（昭和五十二年三月二十日）の儀式、

『エクアドルの儀式（戦い）』

「黄金の世の儀式」（輝しい神の世の儀式）

「地球大浄化の儀式」（地球大浄化の除幕の儀式）

W氏は、これに至るまでの経過を語り、そして、本日の儀式である「エクアドルの儀式」の真の意味について、大要次のように語った。

「今日の儀式は、今まで発表を差し控えていたが、一九六一年に天の神様が今日の日の事をお命じになられていた儀式である。

この十七年間に渉る多くの皆様方の立派な働きによって、この儀式を行うことの出来る準備が一切整ったのである。

地球という遊星、即ち惑星は、<sup>〃</sup>無の世界<sup>〃</sup>で『神の国』となり『世の終り』は成就したことについては、『オйкаイワタチ』の本書と別冊(一)の第二章までに記述してある通りである。

本日の儀式は、地球という遊星、即ち惑星の<sup>〃</sup>有の世界<sup>〃</sup>における「霊の世界」においていよいよ天の神様の大御業をして頂くようお願いする儀式である。

さて、現在の地球の地軸の位置、赤道の位置は、『ライマカタの地球』としての位置にあり、『不幸と混乱の地球』としての位置にある。

今の地球の地軸と赤道の位置から、美しい黄金の地球、輝しい神の国としての本来あるべき本当の地軸の位置に、赤道の位置に、即ち、『ラタカルタの地球』（ラタカルタ<sup>宇宙語</sup>で『愛』の意味）に変化して頂いても良い準備が地球に整ったのである。

この変化、即ち地球の地軸と赤道の変化が行われることにより、この地球は一進化を遂げ、地球の周波数は上がり、愛と調和に満ち、自然は美しく、一年を通じて快適な気候となり、喜びあふれる神の世へと変化するのである。これが美しい黄金の世の出現であり、これにより古い地球の霊の世界の大浄化が行われるのである。

天の神様に、今の地球の地軸と赤道の位置を、ラタカルタの地球としての、本来あるべき、正しい本当の位置にして頂くことをお願いする。これが今日の儀式である。

これを、天の神様は『エクアドルの戦い』と云われたのである。天の神様に、『エクアドルの戦い』を行って下さるようお願いするのが本日の儀式である。」とW氏は語り、参加者全員で、天の神様に祈りを捧げたのである。

「天の神様、ありがとうございます。」

天の神様、エクアドルの戦いを実施して頂いても良い準備がこの地球に整いましたのでご報告申し上げます。

そして、黄金の世にして頂き、古い地球の大浄化をして頂いても良い準備が整いましたのでご報告申し上げます。

天の神様、ありがとうございます。

天の神様、この地球に、エクアドルの戦いを行って下さいますようお願い申し上げます。

そして、この地球を美しい黄金の世界、輝しい神の世にして頂き、古い地球の大浄化の大御業をして下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、ありがとうございました。

この願いをお聞き届け頂きましてありがとうございます。

この祈りが終わると、S氏が、閉式を宣言し、この儀式は終了したのである。

同日（二十日）、N夫人、この儀式の祈りの中で、次のテレパシーを受けた。

「一つになりました。」

N夫人は、三月十九日の朝、太陽と月が垂直に並び、その中間にゴシック活字体のVの文字を見た時、翌二十日の儀式により太陽と月が一つに重なり合うこと、即ち一つになることを予じめ知らされていた。このことが実現したのであった。

同日（二十日）、I氏の午前六時の夢。

「皇太子殿下と二人（一人はI氏）でソファーに並んで坐っている。何か書いてある紙片をI氏が見て、それを殿下に渡した。殿下は立ち上がって部屋から出て行かれた。その時、I氏の心の中に次の言葉が大変に強く響きわたった。『殿下はタイタスカンだ!!』それが余り強かったので、声になっていないが、この言葉は殿下に聞えたようであった。」  
 続いて、朝八時の夢。

「皇太子夫妻が人を遣わして、我々夫妻に二人の子供を預けられた。一人は小学校一年くらいの男子、もう一人は四才くらいの女の子。男子は病身で内向的な性格であるが、女の子の方は少し活発のようだ。」

#### 第四章　ファイナーレの儀式

三月二〇日、高知のN夫人は、今日行われる「エクアドルの儀式」に肉体をもつての参加は出来ないが、心と魂での参加を祈り、儀式が無事に行われるように祈ったのである。この時、儀式は立派に出来ることを靈感で知った。かつ次の儀式の準備がこの時、すでに知らされていたのである。

午前十一時三十分、夫人は次のテレパシーを受けた。

時は熟しております。

刈入れの時の準備を行って下さい。

その儀式は僅かな者で行われます。

時を間違えない様に。

夫人には、二月二十五日の朝以来地軸の傾斜の霊視が続いていたが、三月二十日午後五時、その傾斜の傾きが著しく進んだことを霊視した。それは倒れる寸前を意味していると

判るのであった。

三月二一日、儀式の翌朝、千葉県のK氏は次の如き意味深い霊夢を見た。

その1 オルゴールの夢。

・ある建物の一室で、どなたかに壊れた古いオルゴールをもらった。  
・公園の入口かどこかで、私は、そのオルゴールを直そうとしたら、神様が手伝って下さったので、少しいじっただけで直った。そのオルゴールの音楽は、この屋外で聞くべきものでなく、もっと相応しい所で聞くべきだと強く感じた。

・古びた、荒れ果てた、人のよりつかない教会のホールが目につき、そこならば天井や壁に反響して、このメロディーが奏でられるのに最も相応しい所だと直感し、私は、ここでメロディーを鳴らし、聞き始めた。それはとても美しく、素晴らしかったので、このオルゴールは、やはりここで奏でられるべきものであると悟った。外で見向きもしなかった人達や通行人も、教会から流れ出る素晴らしい、そして新しく清らかな雰囲気メロディーに引き寄せられて、多くの人達が集まって来るのであった。

その2 目ざめてもなお涙の夢。

・子供達や老人達がいた。ごく普通の人達で特別変わった所はないように見えた。ところが、ふとした事から服の下の足が見え、その股には、驚いたことに、古キズが大きく口を空けていたのである。くさった紫色の古キズで、まるで悪魔のツメで肉がひっかき取られたような跡で、胸がしめつけられるような驚きと悲しみがあった。そういえば、子供も老人も、どことなく顔に明るさと輝きがなく悲しさを、苦しさを胸に秘めている様子が感じられてくる。その為か、身体の動きが自由でなく、身体を重くひきずる様に動いている。心には重い古傷を持っているように思われた。

それに比べて私は傷一つなく、身動きも自由に出来、なんと恵まれているのであろうと自分の幸福な姿に驚き、今までこのことに全く気付いていなかった自分にハッとなり、深い感謝の心が湧き上がったのである。

・私は、天井も低い小屋の様な小部屋に入り、古傷を持った二三人の人達と共に神に祈りを奉げた。まわりの人に見られぬようにかくれて祈っていた。その時、神様は祈りの言葉を書かれた紙片を天よりかざして、私に示されたのであった。私達は祈りながら、とめどもなく溢れ出る涙と共に泣き続けた。

・小屋の外にいた古傷を持った人達もそれに気づき、のぞき見、みんな心を打たれたように共に神様に祈り、涙にくれたようだった。

・私は、泣きながら目が醒め、目が醒めてもなお神様に祈りありがたくて、ありがたく

て涙がとまらなかつた。

その3 透明な神様の光に浄化される夢。

・水色の環（円）が初めて出てきた。次に真赤な環（円）が出てきた。これは神様を意味していると思った。火水カミに通じるからである。

・その二つの環（円）が重なり合って回転しだしたと思った。すると、その隣りに超スピードで回転するウズが浮かび出て来た。その時、なぜかハハーンやっぱりそうかと思つた。

・初めは白い光の回転であったが、超スピードになるとみんな透明になってしまった。空気のように透明になってしまった。そう思ったとたん、透明の中に神様がおられると思つてハツとした。私達は、透明な中に、つまり、神様の中にすっぽりと生かされていることに気づいた。

・そう気づいた時、黒板のようなものが出て来た。その黒板にはいろいろな意味のない事が一杯書かれてあつた。それが透明な神様の「黒板消し」で消されて行つた。透明な「黒板消し」だけがスーと見え消されるとスーと透明になるので、それを消している、透明で見えない姿のお方がだれかおられる様だ。

いろいろのものが次々と消されて透明になって行つた。身体障害児も黒板のはじに坐っていたが、それもひとふきで透明になつた。

私は、この透明になることが、神様のみ光で満たされ救われた事を意味していると判つた。透明になって行くものを見ながら、「アー良かった。」と大変気が安らかになつた。

黒板のある一部は、一回では消しづらい所もあつたが、数回こすると消え、全部がスツカリ透明になつたのを見て、これですべて良くなつたと思ひ安心したのである。

#### その4 黄金の虹の夢。

・とにかく、これ程までにとする程の綺麗な美しく輝く虹が幾重にも幾重にも重なつて天空に鮮かに出ている。なぜか、打ち上げ花火も一緒に見えた様に思える。

この花火は、地球がスツカリ透明になつた祝典の打ち上げ花火かも知れない……と思つた。

とにかく、生まれてこの方見た事もない虹で、私はそれを見ながら、あゝ、これが「黄金の世」の虹か、なんと美しいものだろうと思つていた。その虹は輝いてクッキリと浮かび出ている。今の地上の虹とは違って強い光であり、鮮かである。なんとも表現しがたい美しい虹を、まわりにいる人達と一緒に見ていたのであつた。また、そこには旗があつたようである。どんな旗であつたかは忘れたが、旗が風にはためいていた様に記憶している。

三月二三日、早朝、N夫人は次の靈感を受けた。

「三月二十日の儀式により、W氏は「ON」のボタン（黄金の世、輝かしい神の世の扉を開くボタン）を押したのである。」

（昨年十二月二十二日に霊視した光景の中にあつた「ON」の意味が今に至って良く理解できたのであつた。

夫人は「「ON」のボタンが押された。」という靈感を受けて、喜びが全身に湧き上がり、この日は一日中、このことが彼女の心の中を完全に占領し続けたのであつた。

三月三十一日、滋賀県のK氏よりW氏に、次の手紙が寄せられた。（原文のまま）

「三月二十日の儀式以来、私の心に鮮明に感じるものがありました。これは二十日以前からなんとなく霊視はしていましたが、この儀式の日以来、二三日でハッキリとしました。

・海……………（地球の新しい神の世）

・山、山土……………（この世のカルマ）

・堤……………（この世の終り、そして、新しい世の始まりの時）

この世の悪いカルマは依然根強く、心をゆるすと悪いカルマが堤を越えて新しい世に移り住みつこうとして、もう堤を越えそうになるまで山土は押しよせて来ている。私は身を挺して堤となり、この世の悪いカルマが新しい神の世にはいり込まないように防いでいる。もう、私の目の前には新しい世が、ほのぼのとした神の新しい世が、海（例え）の中に存在しています。

(1)新しい世に住む地球人（肉体を持って入る者、霊で入る者）は、ひとかけらの悪いカルマも、持って入ることのないよう、完全なる目覚めと自覚でもって入れるように祈ります。（必ず成就されることは確信しておりますが。）

(2)神様の大御業が進行するにつれ、目覚めやすい地球人から徐々に目覚めて行くことでしょう。

この時、地球は、まだ悪いカルマが肉体の前では征服しているかの如くであり、目覚めの心と現実の地球生活とのギャップから非常に苦しまれるのではないかと思います。しかし、この苦しみを乗り越えて、新しい世に歩を進めてもらいたいです。

ここで、先にワンダラーが目覚めの苦しみを味わい、この中で、より正しく、神様を拝み、充実した建設的な心を持って生活して行けば、良いカルマが出来、地球人も確実に新しい世に移行出来るのではないかと感じます。

目覚めたとはいえ、地球はまだまだ荒れ狂う世であり、つい世の終りの時を待つ心が浮

かび、この心に取りつかれがちですが、このような心では建設的な新しい世の波長に合わないと思います。

その時が来るまで、最後の最後まで、神様を信じて、のんきに、この世の仕事（矛盾だらけであっても）を淡々と果すのが良いと感じます。その時、すべてを捨て、新しい世に歩めば良いと感じます。」

四月二日、W氏は高知のN夫人より次の様な速達の手紙を受け取った。

時は三月二十日の儀式をもって急激に進みました。それで間発を入れずに次の準備のテレパシーが入ったのではないかと思いました。

地軸の傾きの著しく進んだことに対して、今日次の様に思いました。二月二十五日に地軸の傾斜の見られた時は約四五度の傾きに見えました。

三月二十日午後五時に、約一七〇度に著しく進み、まさに倒れるかと思いました。

三月二十二日には、二十日に見られた倒れそうな柱は見られず、新しい輝く太い柱がまっすぐに立って出来ているのを見ました。

私は、この時、神様の限らない愛が、苦しみ的一生を終えられようとしている〇〇の上にそそがれたことを感じました。

話は前に戻りますが、三月五日の日です。私はこの日は訳も判らないが、不思議に喜びが胸に満ちあふれ、喜びにあふれる神様の霊感が伝わって来て、神様、おめでとうございます”と何度も口をついて出るのであります。なぜか判らないが、大事な儀式があったと思えました。

それは、タイタスカンであられる皇太子殿下の御目覚めと御自覚が完了したことを、神様は殊の外お喜びになられたのだと思います。

三月五日に、天の神様と皇室のワンダラーの方々とで大切な儀式が行われ、そのお心が大変に神様をお喜びせしめたと思います。

四月一日、午前二時五十分、自分（高知のN夫人）の名前を呼ばれている様な気がして、突然目が覚めました。その時、次のテレパシーを受けました。

「いよいよ、その時が近づきました。

終りの時は最も輝かしい喜びの時です。

決して波立せず、自然に自然に参りましょう。

すべてのものが救われる事を祈りましょう。

（人のみに非ず、山川草木に至るまで。）

神様の限りなき愛をワンダラーに送ります。

神様の愛とまこと、はここに結ばれます。  
おめでとうございます。」

四月二日、朝七時三十分頃、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「子を生む」<sup>ワンダラー</sup> 「鏝球王国」<sup>りゅうきゅう</sup>

即ち「鏝球王国の地球が誕生した。」という事であろう。続いてまた次のテレパシーを受けたのである。

その時、今日を区切りとして、これからは……「ワンダラーを生み育てて行くことだけを考えて行きましょう。」

これからは、ワンダラーとして育って行く方々が来訪されるであろう。その時は、その方々が正しいワンダラーの道を歩まれる様に語り育てて行くことであると思っただのである。

同日（二日）、午後五時二十分頃、W氏を訪問した帰り道、N夫人は、吾が家に近いとある小さな道路の交叉点に来た時、（その交叉点の中心くらいで足を止めて立った時）なげなく上空を眺めた。右側の正面に月があり、左側の正面に太陽がある。その月と太陽は同じ高さに並んでいる。その時、

「地球は正しい位置にとどまった。」と直感したのである。

四月三日、午後五時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「フィナーレを行う事です。」

四月四日、朝、S氏は次の靈感を受ける。

「地球のことはすべてが終わった。」

同日（四日）、未明、高知のN夫人、次のような啓示を受けた。

「その時、神様は厳然として分かれたる。

神様がお立ち上がりになられる。そして、意識の世界、魂の世界に神様の靈感の矢は放たれる。

それを受けたものは、

あるものは、それまでの苦しみ悲しみが拭い去られ、フワッとした暖かな限りない安らぎの世界におかれる。

あるものは、その強力な神様の靈感の矢を受けて、のたうちまわる程の苦しみを味わう。

それは、いずれも、

意識の上に行われる浄化であって、まず、世の終りは、意識の世界から始まる。意識の変化がやがて形に現われるのである。

その心の変化が実は大変な大きな変化であって、今までの考え方と大きな変化をなした時、この地球の形の浄化も、その心の変化と同じ様に進められる。」

同日（四日）、N夫人は、午後六時、九時、十二時と三回にわたって月を見た。

午後六時。

夕日の如くに輝く美しい月を見た。夫人はその美しさに、驚きの眼で見入った。

午後九時。

月は、黄金のオーロラに包まれて美しく輝いている。月の上部は、半円形の白い雲の環で包まれている。

その時、前方の家屋の屋根の上に、小さく輝く光点の円盤があった。その円盤は少し上昇して、幾つもの屋根に沿うて西方に進んで行く。夫人は「円盤であるならもっと明確にこちらに来て見せて下さい。」と云うと……

「こちらにも用事があります。今は地球を見て廻っております。」とテレパシーを受けた。

しかし、その光点が西方に進むにつれて、それが十字型であることが判る大きさにまで拡大したのである。やがて、その十字型宇宙機はこちらに近づき、次第にその姿も大きくなって静止した。暫くして、その宇宙機は再び屋根の上を沿う様にして彼方へ消えて行った。

午後十二時。

月は極めて美しく輝き、月のまわりは黄金のオーロラに包まれ、更に午後九時の時は半円形であった白い雲の環は完全に円形となって月を包んでいる。

四月五日、午後四時三十分。

天空に、白い雲の長い帯が、西から現われて東へと進んで行く。太陽は西に傾き、丁度その太陽のところから白い長い帯状の雲が発した様である。しかも、雲の発した西の端と太陽との境目に、虹が立っているのであった。

（註）昨年の十月頃より、天のしるしは次第に多くなって来たのである。

四月六日、夜、W氏は、

「地球のことはすべてが終わったという完了の儀式」（フィナーレの儀式）を四月九日に行うことを心に定めて、S氏、N夫人とこれを諮り、決定した。

四月七日、午前二時、N夫人は目を醒した。その時、次の文字を明確に霊視した。

「すべて終わった。鏢球王国。」

鏢球王国は丸ゴシックのベタ文字の活字で鮮明に書かれてあった。

「すべてが終わわり、鏢球王国となった。」という心が湧き上がり、感謝と喜びの心が強く全身を包むのであった。

同日（七日）、午前十一時二十分。

N夫人は太陽を見る。太陽は、大きな虹で包まれている。その虹は、太陽を中心として上から半円形に覆さり、下からも半円形の虹が向い合わせとなって今にも互いにつながり結ばれて、完全な円形の環にならんとしている。

西の天空には細い白い雲で巨大なXが画かれている。Xの中心より巾広い白い雲が突然現われて、東へ東へと進行し、上下の虹が結ばれんとしている僅かな隙間すきまを通して太陽の中心に入ってしまったのである。

これを見た時、「すべてこれで完了した。」と直感するのであった。

太陽を上と下から包む虹の環は、やがて正午頃には繋がり、完全な円形の環の虹となった。この虹の環は、午後三時すぎまで目撃された。

（註）今までもしばしば見られた太陽の廻りにある虹は、時間にして大体三

十分以内であったが、この時以来、太陽を包む円形の虹は、長時間に

渉って天空に画かれるようになって来たのである。しかも、この天の

いるしは、殆んど毎日の様に目撃された。

同日（七日）十六時三十分、N夫人は西に傾いた太陽を眺めた。その太陽に「完」「Z」の文字が画かれているのが明瞭に判るのであった。

「すべてが完了した。これで終わった。」と直感したのであった。

同日（七日）、十八時三十分、W氏は西の空を見た。太陽は既に西の地平線下に没していた。西空の一角はまだ少し明るい、夕日の照りはえは全く見られず、一杯に白い薄い雲が幾重にも幾重にもあった。

その幾重にもある白い薄い雲の中に、丁度オレンジ色に染めぬいた布テープの様に美し

く輝く雲が、南の端から北の端まで極めて長く浮かんでいるのが目撃された。その瞬間「これは深い意味を秘めている。」と直感したので、彼は、西空の視界が最も開けている近くの高台に行つて、このめずらしい現象を充分に観察した。

もし地平線下に没した太陽の夕日の照りはえであるならば、西空一杯に薄く密集している他の雲々にもオレンジ色の照りはえがなければならぬはずである。それは全く見当らない。密集した薄い雲の中に一本の染め抜いたオレンジ色の布テープがある様に、まわりとそれとは明確に区別出来たのである。

これを見たW氏は、「すべてが終わり完了したことを示す証しである。」と直感した。早速、これをW氏はN夫人に電話で知らせた。ところが、丁度時を全く同じくしてN夫人もこの光景を眺めて、W氏に知らせようと電話機の前に来たところなのであった。

W氏とN夫人はこのことを互いに確かめ合つて電話を切り、再び外に出て西空を眺めた。しかしその時には、あの長い南北につながるオレンジ色の布テープの如き雲は一片の跡形もなく完全に消滅していたのである。

もしこれが夕日の照りはえであれば、白い長い布テープの如き雲の残骸でもあるはずであるが、その一片すら全くなく、忽然と消え去つたのである。時は、十八時三十五分であった。これらの出来事は僅か五分間のあいだのことであつた。W氏とN夫人に、これを見

せるために現わされたと思わざるを得ない程の僅かな時間のあいだの出来事だったのである。

四月八日、未明、N夫人の夢。

「地球のすべてが大学の位置に成つた。」ということ象徴的に示す霊夢を見る。(この意味は、今までを小学校に例えれば、大学ほどの高周波数の新しい地球になったのである。)

四月九日、午後二時、W氏宅に五名のワンダラー集いて、次の通り儀式を行った。

『地球のすべての終わり(完了)の儀式。』

三月二十日(エクアドルの儀式)以降、今日までに起つた様々の経過を報告し、また各自がそれぞれ語つた。

次の祈りを捧げて儀式は終わった。

「終わり(完了)の儀式の祈り。」

天の神様ありがとうございます。

天の神様のお命じになられましたすべては整い終わり「輝く美しい神様の地球」が成就

致しました。ありがとうございます。

ここに、地球のことのすべては終わり完了しましたことを天の神様にご報告申し上げます。

今日、この喜ばしい終わり（完了）の儀式を迎えることが出来ましたのは、天の神様の沢山のいたわりと、沢山の助けを頂いたお陰であります。ありがとうございます。

これからは、全人類、全動物、山川草木、万物一切のすべてのものが、天の神様の愛によって救われますようお願い申し上げます。

天の神様ありがとうございます。

同日（九日）、儀式の終わった日の夜十時、W氏は次の靈感を受けたのである。

「神様のみ国は、有の世界」の「霊の世界」に成就したのである。」

「すでに地球は正しい位置となり、鏖球王国りゅうきゅうこくとなり、周波数は高くなり、愛と調和に満ちた喜び溢れる、神のみ国」がここに顕現したのである。即ち『新しい霊の世界』は神の世となり、神様の国となったのである。ここに、新しい地球が『霊の世界』に誕生したの

である。」

「今、この肉眼で見える混乱の、この世は、すでに過ぎ去った古い地球である。この、影の地球」（古い地球）の世からは、『新しい霊の世界』は周波数の違いから見ることが出来ない。しかし、古い地球のすべてが大変化によって消え去っても、高い周波数の『新しい霊の世界』は消え去ることはなく、そこに厳然として存在しているのを見るのである。

新しい地球は『明る湧玉』となったのである。それは『霊の世界』で成ったのである。「古い地球は、私達ワンダラー全員が真まことに目覚め、一つの心で結ばれた時に救われるのである。」

ワンダラーの目覚めは、人類の目覚めである。目覚めた時、気付いた時、人類は救われ、古い地球の大変化と大浄化が行われるのである。

それはワンダラーの双肩にかかっている。」

同日（九日）、未明、N夫人、次のテレパシーを受ける。

「美しい木き（気きに通ずる）を育てて行くだけを考えて行きましょう。」

四月一〇日、七時五十分、W氏は朝の太陽を見た。

太陽には大きな虹の環がかかっている。この虹の環は太陽の直径の十倍位いはあろう。南の空には長い帯状の白い雲で出来た大きな×が画かれている。その×の雲はかなり早いスピードで太陽の方向に進んで行く。午前八時十分頃には×の雲は虹の環と接触し始め、次第に虹の環の中に入って行って消え失せたのであった。

太陽のまわりの巨大な虹の環は午前十時半頃まで眺められたが、その後消え去った。

四月一日、夜十時三十五分～四十五分、それはN夫人が仕事を終えて我家に帰る途中の出来事である。

西の空を見上げた時、夜空に雲で出来た不思議な形の鳥が舞っている姿を見た。その時、「鳳凰の舞」とテレパシーを受けた。

ところが、東の空にも同じ姿の「鳳凰の舞」を見たのである。それに加えて、西の空の下（地平線）から黒い線が早い速度で左斜めに上昇して行く。更に東の空の下からも黒い線が右斜めに上昇して行く。その西と東の黒い線の先端は互いに結ばれて、地平線を底辺として巨大な三角形を画いた。天空に画かれたこの巨大な三角形の中には、一片の雲もない。すべて消え失せたようである。そこは真黒の夜空がすけて、いる様に見える。しかし、三角形の外側は薄い白い雲が天空一杯を覆っているのである。

その時、次のテレパシーを受けた。

「今ここに、この地球は神の御手に包まれています。」

同日（十一日）、高知のN夫人は次の光景を霊視した。

不思議な静けさが心を満たし始めた時、一つの光景が目に見えかけました。

○、球です。まるい球。即ち地球です。

灰色にくすんで、にぶい色をしています。

ある地点に神様がスックと立ち上がられました。その地点は、富士山のわく、たまの地です。

大きく御手を広げられました。そして左右にゆすぶられました。上下にも。

すると御手の先から不思議なエネルギーが流れ出し、わく、たまの泉を流れて、それは四つのエネルギーとなり、地球全体に広がっていきます。「濯漑だ。」と思いました。

地球の東西南北から、神様のエネルギーが清らかな水のように流れ出し、そのエネルギーは地球の中央で結ばれ、更に地球の内部へとしみ通っていきます。

その神様のエネルギーが地球を網の目の様に包みこんだ時、

「ポッ」と灯がともった様に透明な美しさで輝き始めました。

再び神様の御手が大きく動かされると、その御手の先へ宇宙からのエネルギーを呼び集められました。

静かな美しいエネルギーの流れが幾條も流れ集まり、それはまるい、地球を幾重にも包みました。

「水ももらさぬ」という言葉が口について出ました。

神様の御手と宇宙からの暖い愛のエネルギーに、地球は確かりと抱きしめられたと思われました。

四月一三日、N夫人、朝八時〜八時三十分の霊夢。

最初にサタンが現われた。目だけをまん丸にむき出し、頬はこけ、顔は痩せ衰え、顔中に汗をかき、非常に苦しそうな姿で、鬼のような顔をした人間であった。それを見た時、サタンであると判るのであった。

そのサタンが、「これからは幸せになります。」と云ったのである。その時は、サタンの鬼の顔は消え失せて、ニコニコとした喜びの笑顔に変わったのである。

すると、地下の穴から苦しそうに喘いでいる女性が出て来た。その地下の穴の中にはまだ多くの人達がいることが判る。その沢山の人達はすべてサタンのトリコになって苦

しんでいる者達である。

地下の穴から最初に出て来た一人の女性にサタンは次の言葉を語るように指示し、サタンもその女性と一緒に語るのであった。

「これからは幸せになります。」と……。

サタンの爪で心を捕えられて地下の穴の中に閉じ込められた他の多くの人達も、一人一人がサタンと一緒に、「これから幸せになります。」といった。これにより全部の人が救われると判るのであった。

場面は変わり、家の中にN夫人がいる。夫人も「これから幸せになります。」といった。家の外にいる人も、「これから幸せになります。」といった。

このようにして、すべての人達が救われて行くことが判ったのである。

四月一四日、十八時三十分、N夫人。

西に傾いた太陽を見る。その時、オレンジ色に輝く円盤が一機滞空している。その円盤はオレンジ色の雲の様な帯を引きながら、三〜四分間進行していったのである。それは一度、オレンジ色の長い帯状の雲が空中に画かれたようであった。

このオレンジ色の円盤が消え失せたたん、オレンジ色の帯状の雲は突如、真黒の雲に

変わったのである。その真黒の帯の様な雲は東の方向に延長しながら白色の雲に変化した。その長さは最初の二倍くらいに伸びたのである。

再び、N夫人は西に傾いた太陽を見て、天の神様に深いお礼の言葉を申し上げていた。すると南西の空にある雲が、「神様のお姿」に見えた。そして、「神様である」と直感するのであった。そのお姿を見て、「神様は御手を大きく拡げてお立ち上がりになられた。」と直感した。これを拝した夫人は、深い大きな感動が全身を走り、涙の出る程に感激したのであった。

四月一日、N夫人は昨日（十四日）の天のしるしを思い出して、考えをめぐらしていた。すると次のテレパシーを受けた。

『イエス・キリストは復活（元）された。』

註「この地球の終わりの期」に、二千年前イエスと生まれ、十字架の上に磔になられたイエス・キリストは、この世に復活されると一九六〇年にサナンダ様（イエス・キリストの金星での御名）よりお聞きした記憶がある。このことを意味するのであろうか。

続いて、次のテレパシーを受けた。

「モーゼも甦えられた。」

同日（一五日）、早朝、I氏は二つの夢を見た。

その1 ある部屋にW氏、S氏など、数人の方々といる。儀式は終わった。やれやれという雰囲気である。窓の外に何か飛んでいる物が発見された。それが窓のそばに近づいたので見ると、役者が履いた草履であった。棒でつついて見たが、実体はなかった。その時、思った。「実用に使われていない物が、実体のないものが、影のようなものが、今は実体の如くに見えているだけである。これは、今の地球を象徴していると思った。」

その2 皇太子殿下が天皇に即位する儀式が行われた。我々夫妻はその準備の手伝いをするようになった。

古びた建物（皇居であろう）の中で、ごく内輪の方だけが参加して行われた様である。それは質素な儀式であったが、正装された皇太子御夫妻の御姿のみひときわ立派に輝いていた。皇太子殿下は若草色の束帯であった。

四月一二日、朝、S氏が目を醒した時、口について突然「大火事がある。」との言葉が出て来たのであった。

四月一七日、高知のN夫人は二つの夢を見る。

その1 ○○は大火事となり、○○や○○○は火炎に包まれている。それをテレビが中継放送している光景であった。

その2 天空に「新しい地球の地図」が画かれた。その地図には、今の地球のアフリカの様な大陸は見られたが、あとは今の地球の地図とは姿形が全く違っていた。

同日（一七日）、十二時三十分。N夫人は窓から空を眺めた時、次のテレパシーを受けた。

「天の日王<sup>かおろ</sup>」

夫人は「天の日王」について考えながら天空を見あげた。すると巨大な雲が三層に積み重なっている。それは去る一月三十日（カアハミテスの儀式の日）富士山で見た王を画いた時の雲と同じであった。今はそれより更に大きく、この地球が、この巨大な王にすっぽりと包まれている様であった。「天の日王<sup>かおろ</sup>」は巨大な王を意味するのではないかと思った。

四月一八日、午後二時頃。N夫人は、太陽を眺めながら昨日（十七日）の天のしるしと「天の日王」について考えた時、次のテレパシーを受けた。

「天にもあり、地にもある姿、今ここに結ばれています。」

この時、「天の日王」（皇太子殿下が天皇になられることを意味すると思った。）「天皇（天の日王）天にもあり、地にもある姿、今ここに結ばれています。」と判ったのである。

その時、西の空に、「三角形のオレンジ色」の美しい雲の様な天のしるしを見たのである。

同日（一八日）、朝未明、N氏は次のテレパシーを受けた。

「ミカド、ミカド。」

「世界の指導者となった。」

四月一九日、午後五時二十分。N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天のしるし、しの終わりの時。」

この時夫人になぜかW氏の事が思われ、かつ彼の顔が浮かんだ。

この知らせを受けたW氏は、

「地のしるし始まる。」「いよいよ地において始まる。」と直感し、「これから自分は地における沢山の役を果たす。」と思うのであった。

宙「天のしるしの終わりの時。」とは、天における一切のことが終わり、天においてお働きになっておられた、天における神々様は地にお降りになられて、「いよいよ地において天の神様と共に始められる。」ことを指すのである。天空に現われる天のしるしの意味でないことを附記する。

四月二二日、午前十時三十分、N夫人。

「太陽を見なさい」とテレパシーを受けた。暫く太陽を見ていた時、次のテレパシーを受けた。

『天と地と一緒に行われます。』

天と地と一緒に行うのです。

天と地と共にあるのです。

天の神様に祈れるだけ祈りましょう。」

四月二三日、N夫人は五人のワンダラーが集まる儀式の光景を霊視する。

四月二四日、午後七時。W氏宅で、S氏、T氏、N夫妻、W氏の五名にて儀式が行われた。その儀式は、

「この地に、大御業のお願いの儀式」である。

去る四月九日に行われた「終りの儀式」<sup>フィナーレ</sup>以後、今日の儀式に至るまでの経過をW氏が報告した。そして今日の儀式は、

「天の神様は御手を大きく拡げて、お立ち上がりになられた。いよいよ、天の神様がこの地においての大御業をして下さる時が到来した。そこで、これは、地にあるワンダラーが天の神様に『大御業』をお願いする儀式である。」

この儀式を、判りやすく、言葉を変えて云うならば、次のような、天の神様との語りであるといえよう。

天の神様は、地にある我々地球人（ワンダラー）に礼儀をもって問われる。

「地において、いよいよ行うことにしますが、地の用意は出来ておりますか。」と、それに、地にあるワンダラーは答えて曰く。

「地の準備は整いました。どうか大御業をこの地において行って下さるようお願い申し上げます。」

と礼儀をもってお答え申し上げる儀式である。

儀式の祈り。

天の神様ありがとうございます。

天の神様の愛と御恵みにより、新しい地球は「無の世界」、「霊の世界」に成就し、神様のみ国となり、美しい黄金の世、鏖球王国となりました。ありがとうございます。

(天の神様は御手を大きく拡げてお立ち上がりになりました。)

天の神様、いよいよこの地の大御業を行って下さっても良い準備が整いました。どうか、大御業を、天と地と一諸に行って下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、全人類、全動物、万物一切のすべてのものが、天の神様の愛に目覚め、天の神様の愛によって救われますようお願い申し上げます。

四月二五日、午前四時四十七分、N夫人。

天の神様に起こされて目を覚ました。天空を見なさいと言われていたようであった。

天空には巨大な雲がある。なぜか、天の神様のお姿であると強く思えるのであった。その雲が西から東へと動いて行く様を見た時、

「御手を大きく拡げてお立ち上がりになった天の神様は、いよいよご活動を始められた。」と直感するのであった。

四月二七日、午前〇時五十分、N夫人は、この深夜、まだ仕事をしていた。その時、言葉では全く表現しがたい音を聞いた。今だかつて聞いたことのない音がする。「天の音」とでも云おうか、その「天の音」は、なにものかを連続して打ち鳴らすように響きわたって来る。その打ち鳴らす「天の音」は地球のすみずみまで響きわたる。また、夫人の足先から頭の先まで全身に響きわたる音であった。この音を聞いた夫人は、何かと家の外に飛び出したのであった。しかし、そこにはなんの変化もなかった。

空を仰いで、「天に関する音であれば円盤で知らせて下さい。」と云った瞬間、それを待っていた如くに、一機の円盤が尾を曳いて飛び去ったのであった。一体なんの音であろうか、何れ判る時が来るに違いない。

宙これを聞いたS氏は、この「天の音」と感じた音は、黄金の太陽円盤を打つ音ではないだろうかと言った。「宇宙人は呼ぶ」という本には次の様に書かれている。

『……この大きな黄金の太陽円盤を打つと、大地震、地球の変動を起こしさえする。あのバイブレーションを起こすのだ。……』

同日（二七日）、N夫人、午前七時三十分には次のような霊夢を見た。

「沢山の人が次々と〇〇さんを訪れて来る。〇〇さんはその一人一人に語り、その人の持つ不必要なもの（悪いカルマ）を、その人の身体から取り除いて行く。それは丁度、悪いカルマを取り除く病院の院長であった。」

宙このことは、すでに一九六〇年（十二月二十八日）に次のように示されていた。

AZ「〇〇さんは——中略——<sup>あか</sup>明る湧玉では、悪いカルマをわるい者の体から真で取る役をされるでしょう。』

四月二六日、朝、S氏。

このたびの地球での戦いにおいて、自分達ワンダラーの働きの至らなかつたことについて反省し考えを致していた時、次の靈感を受けたのである。

「天の神様は、ワンダラーの至らなかつた事は、ご自分の責任であると思っておられるという感じを涙しながら得たのである。」

だから、天の神様は、全ての人々のため、全てのもの、<sup>こた</sup>のために、『特別の配慮』（この意味は、地球をより高く変化させることによって、人類に<sup>こた</sup>応えんとされる天の神様の深い大愛の配慮）がなされた。地球をより、高い場にもって行けるような働きがワンダラーに出来るように、更に、次の遊星の戦いが良く出来るように、天の神様は再考なされて、この『特別の配慮』を決意なされたのが今回のこの地球での戦いである。」と判るのであった。

終り

## あとかき

先に「オйкаイワタチ」本書と別冊(一)、そして今回別冊(二)を編著発刊して、改めて今日までのワンダラー達の歩みを振り返って見た時、今にして驚くことがある。それは、一九五八年から一九七七年の今日に至るまでの二十年間近くにわたるワンダラー、オйкаイワタチの進める道のすべてが、「オйкаイワタチの使命」(本書P 115に記述)を根源とし、この源泉から一切が展開しており、それは終始一貫した道であったということである。

この道を日本にいるワンダラーは歩み、「オйкаイワタチ」本書、別冊(一)、別冊(二)に記述してある通りの役を果たして来たのである。ワンダラー達は、この地球での聖戦を、二十年間近く行って来た。これからも役を果たして行くことであろう。

この聖戦はまず最初に、「無の世界」で始まった。

地球の「無の世界」において、「世の終り」が行われ、「新しい世」が成就して、「無の世界」での戦いが終了したのが、昭和五十年九月三十日であった。「無の世界」では、「新

しい地球」となったのである。

この「新しい地球」の「有の世界」に、「美しい黄金の世鏢球王国」が成就完成して、「有の世界」での戦いは、昭和五十二年四月九日の「フィナーレの儀式」により終わりを上げたのである。

ここでいう、「有の世界」とは、今の、この地球の現象界、霊界を指すのではない。それは、「明る湧玉となった新しい地球」での「霊の世界」を指し、そこは高い周波数の世である。従って、この地球での肉眼、霊眼をもっては見ることは出来ないのである。

もう「新しい地球」は、「無の世界」、「霊の世界」において完全に出来上がったのである。この驚くべき事実を、全人類は間もなく知る時が来るのである。

人類は、やがて、この高い周波数の「新しい地球」の「霊の世界」(鏢球王国)へ移行するのである。(注)肉体が移行するのではなく、霊が移行するという意味である。)では、今、我々人類が住み生活しているこの地球は一体何者であろうか……。

それは、過ぎ去った、今まさに消えんとする古き地球、実体のなき影の世である。そこには古き重厚な低い周波数の肉体という上衣をまといて、苦しみながら真の目覚めを待つ人類が、次の新しき世へ移行せんと期待しているのである。

人類が「新しき世」に移行するためには、魂は様々の厳しい試練を受ける。これによっ

て、これまでの地球はニセモノの地球であることに気付く、そして真物ほんもの（新しい世Ⅱ鏢球王国）に目覚め気付いた時その人は移行する。

神様の愛によって、神様は人類に気付かせるために靈感をかけられる。

それは、まずワンダラーから始まる。

ワンダラーの目覚めは、人類の目覚めに通じるからである。私達ワンダラー全員が目覚め、一つの心に結ばれた時、この地球と人類は救われて「鏢球王国」に移行するのである。すべてはワンダラーの肩にかかっている。

また、古い地球でのワンダラーの目覚めは、次の遊星での戦いを良くするカルマとなるのである。

いよいよ、目覚めのための、神様の厳しい靈感は、魂の中に、意識の中に、環境（自然現象と人意的変化）の中にかけられる。

この道は、決して生やさしい道ではない。厳しい試練の道である。しかし、真まことに目覚め、神様の大爱に目覚めるか否かによって、安らかな道とも、茨の道ともなるのである。

何れにしても、全人類と万物一切のものが、幾く久しく待望した「神の世」は、一皮めくればそこに厳然として在るのである。

この一皮（古い地球）をめくるための、地における大御業の聖戦が始まったのである。神様の涙の愛の大試練は目前にある。

しかし、決して恐れることはない。いかなることがこれから起ころうとも、目覚めと気付かせるための、神様の愛の助けの中にあるからである。この意味を本当に理解した時、いかなる試練の苦しみも、喜びと感謝の心に変ることであろう。

天の神様の私達人類に対する深い大爱に気が付いた時、涙してどれ程に沢山のお礼の言葉を天の神様に捧げても、まだまだ足りぬことに気付くに至るであろう、と最後に申し上げます。あとがきとする。

その時は、全人類の、万物一切の喜びの時であり、全宇宙の喜びであり、それにも増して、天の神様のお喜びの時であると信ずるのである。

最後に、別冊(二)発刊にあたり、沢山のご協力を頂いた多くの仲間の方々に、そしてこの印刷のために親切な援助を下さった加納夫妻に感謝を申し上げます。なお文中には新・旧の送りがなが混じっていることをご了解頂きたい。

一九七七年四月二十九日（天長節の佳日）

天の神様に心から限りなき感謝を捧げて

渡 邊 大 起

御読了後、本書に強い関心がありましたら、あなたの知人で同じ志を持つ方々（地球の大周期の大変化と新しい世の誕生に確信を持つ方）をご紹介して頂きたいと思えます。私は、この方々は、地球と人類に、奉仕の使命を持って生まれた方々と信じます。私はこの方々に本書を読んで頂きたいと希っております。あなたの親切なご協力をお願い申し上げます。

## オйкаイワタチ 第二巻（別冊1・2）〔非売品〕

昭和52年6月19日印刷発行

昭和53年8月28日 再 版

昭和56年10月12日 第3版

編著者 渡 邊 大 起

発行所 オйкаイワタチ出版会  
〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
東海理化販売ビル内

印刷所 加納印刷工業  
〒461 名古屋市東区筒井二丁目12番2号  
TEL052-937-7121

# オイカイワタチ

〔非売品〕

編著者  
渡邊大起

オイカイワタチとは宇宙語である。その意味は……

「神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って進化の周期の来た遊星（地球）に生まれ変わり、その遊星（地球）を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達（ワンダラー）の集まりである。」（本書115頁）

## 第1巻 （本書）

A 5版 235頁

昭和33年から49年までの17年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足蹟を記す。  
第1部（6章）円盤・宇宙人と来訪の真相／第2部（9章）オイカイワタチの使命／附の部（2章）宇宙を垣間見て。  
地球の「無の世界」における聖戦の記録など。

## 第2巻 〔別冊1・2〕 〔合本〕

A 5版 227頁

昭和50年から52年4月までのワンダラーの「世の終わり」と「新しい地球誕生」の戦いの足蹟を記す。  
別冊1（3章）は地球の「無の世界」における聖戦。「天の神様、神々を従えて地球に降り給う、など。／別冊2（4章）は地球の「霊の世界」における聖戦。「新しい世の王を頂く、など。

## 第3巻 （別冊3）

A 5版 294頁  
口絵、カラー 8頁

昭和52年11月までのワンダラーのこの地球での戦いを具体的に記す。  
第1部（3章）「鏢球王国の霊の世界誕生、—地球の「霊の世界」における聖戦。／第2部（6章）「鏢球王国の建設、—地球の「たましいの世界」における聖戦など。／附「新しいワンダラーの誕生、

## 第4巻 （完・上）

A 5版 297頁  
口絵、カラー10頁

昭和53年12月までの聖戦、即ち、「形の世界」の目に見えない霊界、幽界における「世の終わり」と「新しい世の誕生」を記す。  
第1部（7章）「万たるワンダラー誕生、鏢球王国の国造り成る」など。／第2部（2章）「新しい地球、鏢球王国完成、「天孫降臨」など。／第3部（5章）「レタマヤの世の終わり、「エクアドルの儀式」、「古い地球葬送」など。／巻末に年表。

## 〴〵新刊、 第5巻 （完・下）

（附・講演記録）

A 5版 380頁

昭和56年1月をもって天の神様のなさる儀式、即ち「湧玉の祝事の儀式」は全て終了し、「形の世界」の現象界において、いよいよ「その時」が来た。世界中の全ワンダラーが働く本番の時が来た。  
第1部（4章）「形の世界」（霊界・幽界）の聖戦終わる「みそぎ」など。／第2部（2章）「形の世界」（現象界）の終末の期を迎える「万たるワンダラー、儀式に参加」など。／第3部「湧玉の祝事の儀式」／第4部「ワンダラーの使命は開始された！」。  
「形の世界」の霊界・幽界、現象界での聖戦。  
巻末に講演記録および年表。

## 講演記録

あなたの使命は  
開始された！

A 5版 88頁

昭和55年2～5月にかけて、大阪、東京、札幌で行われた「オイカイワタチ大講演会」の講演記録である。（第5巻の末尾にも全体を収録）真の目覚めと使命の自覚のための助けとなるものである。  
世の終わり新しい世の建設を担われる「真」の判る多くの方々— 光る魂の方々—への呼びかけに役立つ書である。

発行所

オイカイワタチ出版会

〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
東海理化販売ビル内

- 「オイカイワタチ」は第1巻～第5巻の5冊より成っておりますので、この順序でお読み下さるよう特にお願い申し上げます。（途中からでは真意が御理解になれません）
- 上記書籍及びしおりを御希望の方は、「オイカイワタチ出版会」にお申込下さい。